

# Le CORPUS



THAT  
**16**



これだけのことをル・クルールのどこかに載せて欲しい！

いかがですか……

とにかく既存の本の表紙の概念を打ち破ることに全力をあげたのです。この作品はあなたに何かを語りかけているのです。あなたもその固い防壁体制を解いてinvolvedされる必要があるでしょう。

小島 秀隆  
荻野 芳朗

注 involved. はマクルーハンの使用する言葉で「巻き込まれる」の意

LE COR  
UR 16

KOTOMA



OUR MAN IN  
YOUR WORLD



KOTIMA

Le. Coe  
UR16

鈴木



OUR MAN IN  
YOUR WORLD

これだけのことをル・クルールのどこかに載  
せて欲しい！

いかがですか……

とにかく既成の本の表紙の概念を打ち破る  
ことに全力をあげたのです。この作品はあな  
たに何かを語りかけているのです。あなたも  
その固い防壁体制を解いて involved される  
必要があるでしょう。

小島 秀隆

荻野 芳朗

注 involved. はマクルーハンの使用する言葉  
で「巻き込まれる」の意





米 薪

編集  
凌記  
131



# “一億火の玉”

ル・クール編集委員会

世の中が騒がしくなってきました。第三次世界大戦のささやき声も耳に入ってきます。今さらのことながら胸がはやってしようがありません。

ではそれを恐れているのかというと、そうでもありません、むしろ快感なのです。勿論戦争は反対です。しかし私たちは戦後派は歴史に出て来るような大きな事件を、見たことはありません。故に私は歴史が信じられないのですが、私たちは戦後派が民族的に物を考えられないのも、そこに原因があるのではないのでしょうか。それが人間的な統一に欠けそれが生徒の生徒会活動への無感心につながるのです。

私達はアメリカがなくては存在しないような日本の国、資本家のための国日本に抵抗をもっていません。だから国民の意志を、エンタープライズのように、政治に反映できないのです。学校内でも同じことが言えるのではないでし

ようか。(いうまでもなく民族・民族といって他民族をつつねたり、他人種を、差別するのではないのです……)みんなニヒリストという名をつけられたヒロイズムに酔って、団体ということを考えられない馬鹿なのです。それが世界的傾向になっているからといって……。

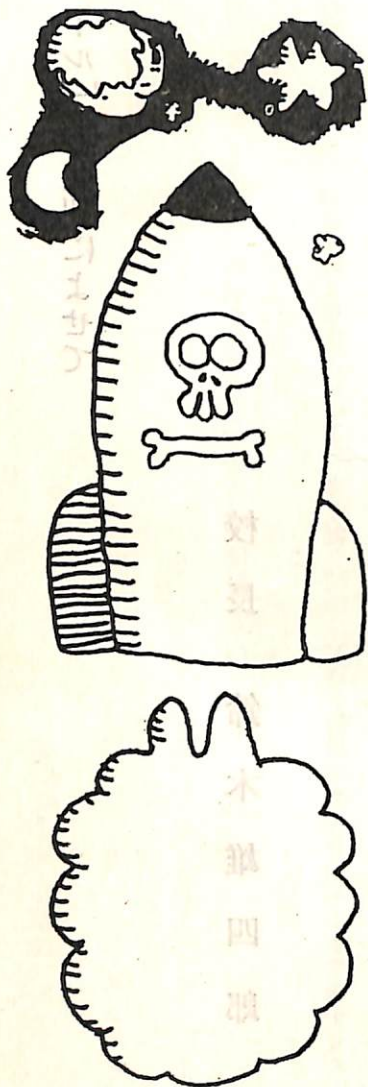
団結しましょう!!

人間としての権利を手に入れるために!!

私 しばられているあなた

まったく教科書的で、言葉のお遊びになってしまいました。私もあなた同様ここに書かれたようなことを知っていながら、ちっともうれしくありません。

嘘も書けなくなりました。





## 「ル・クール」の発刊によせて

校長 鈴木雄四郎

「ル・クール」の発行も今回で第十六号を数え、本校の歩みとともにしてきたわけである。今、創刊号からの全部を手にするには出来なかつたが手許にある十五号以前の数冊に眼を通すことによって、当時の生徒会活動の断面を知り、松原高校の成長発展を目のあたりにする感もたれ在職一年の私にとって深い親近感に打たれたわけである。

本会誌発刊の趣旨は創刊のそれをうけついで生徒の文化活動面における文芸誌的性格を多分に持っていることは否めないようである。発刊以来編集委員等の苦心と努力によって漸次、その分野も拡げられ、生徒会活動の全般を浮きぼりされる体裁もとのつてきている。勿論、その年々の重点のかけ方の相違により、編集方針の特色は示されているが、それによって、その時点における生徒会活動の流れを読みとることができ、松原高校教育の発展の推移を物語る資料としても貴重なものではあるまいか。

とは言つてもこれが本校教育の実態を知る唯一の資料であると断言するものでなく、過去の教育活動をダイナミックに、当時の生徒の実態を現わす資料としての価値を再考する必要があるが痛感される。勿論、「ル・クール」そのものが在校生として、直接的つながりとそれ自体の使命を持っていることは申すまでもない。私はこの現実が過去の歴史に

よつて支えられ、将来へと進展する力強い基盤であることを再確認いたしたいのである。

この世紀末にあたり二十一世紀への展開は、未来学の立場で論ぜられ、それぞれのイメージも、それぞれの立場・人によって画かれている。

「精神文化面においても、エレクトロニクスの発達にともない、現在の教育で特殊な才能として重視されている創造能力は、能力の価値基準の変更に一般教養として求められ、さらに問題提起者としての新しい能力が重視されるだろう」とのべられている。

話題は変わるがある人は、「日本人はテンション民族（緊張している人々）である。」といっている。「つまり日本人はユーモア感覚をもたないということが国際的評価であり、ユーモア感覚とは自分を含めて、人間の愚かさや欠陥を客観的に眺めて微笑するセンスで、この高度の精神作用は物質的にも精神的にもゆとりがないと唯目である。」とある紙上で述べている。

これらのことも考えた時、たとえわれわれの生活が世界水準に照らしそれ程高くなくとも、来たるべき将来をよく見つめながら日本人の持つすぐれた素質と努力によって、粘り強く開拓して行く精神のゆとりはユーモアのセンスに不可欠であろうと思われる。

この心のゆとりこそ「ル・クール」の持つかくわしい香として期待したい。





四十二年  
四月  
七日 始業式  
八日 入学式  
十日 対面式

十九日 身体検査  
二十日 身体検査  
二十一日 身体検査  
二十二日 新入生歓迎会

五月

一日 一回実力テスト  
五日 遠足 一年鋸山

十一日 球技大会始まる  
十八日 生徒総会

三十一日

中間考査



後期生徒会役員選挙

学校中に候補者のビラが氾濫している。昼休みには、候補者の演説を毎日毎日飽きる程流している。廊下を歩くと、胸に「会長候補「〇〇××」とか、「会長候補「△△〇〇」とか書かれたリボンをつけた生徒に必ず出くわす。放課後になると、立会い演説会の為に、全生徒が開始五分前にきちっと集まっている。学校中が生徒会役員選挙一色に塗りつぶされている。

前記したのは、我校のことであるとは誰も思わない。事実まるで逆なのだ。役員選挙だからといって、校内放送がいつもと変わるわけがない。生徒が要求しないんだもの。校内どこを散歩しても、二・三人程の候補者にぶつかる位であらう。立会演説会だといったって、生活委員が門番にならなければ、クラスの何人かは、エスケープ。放課後だって皆いつもと同じに、ある者はクラブ活動に熱中し、ある者はさっさと帰宅する。ただただあせているのは、総務の連中ばかりなり。立ち会い演説会をエスケープする人へ。



六月  
十五日 全定交流会  
十七日 三者懇談会  
二十二日 二回実力テスト

七月

八日 期末考査  
十二日 期末考査  
二十日 終業式



松原高校は予備校ではありません。生徒会というものが、ちゃんとある高等学校なのです。学校から、ある程度の自治(今は)をまかされた生徒会があるのです。  
「クラブをやるから、役員なんて……」とおっしゃる方へ……。  
生徒会なくして、クラブが存在するのですか？クラブも生徒会の一部ではありませんか。生徒会をまとめる人がいなくて、生徒会が、クラブが運営されていくのですか？あなたがクラブで不自由に思っていること、困っていること、その大半が学校側あるいは生徒側に、なんらかの訴えをしなければいけないことだと思うのです。ではそれを、どこで解決させるのですか？

私達は、目先の幸福にとらわれすぎているのです。

高校時代に何もせず何も考えず大学へ入ってしまった。クラブ活動はできた、けどあとの現実は全部目をつぶった。ル・クールを作ることに協力した。ル・クールはでき上った。でも生徒は見えてくれなかった。

これが私達の可能性の限界なのではないでしょうか。これが私達の青春なのではないでしょうか。



八月  
十五日 登校日

夏期講習  
クラブ活動合宿  
水泳教室



九月

一日 始業式  
二日 三回実力テスト  
十九日 生徒総会  
二十四日 体育祭  
三十日 文化祭



### 新入生歓迎会

果して何を観てくれるのか、何をやらし  
てくれるのか大いに期待して行つたのだけ  
れど、あまりにその大げさな名にそぐわず、ク  
ラブ紹介のための会であり、しかもそのクラ  
ブ紹介さえもおしつけがましくひどくつま  
らないものであった。会はだらだらと長く続  
き、長く長く続いた。たまりかね途中で帰る  
ものも出現し、そのため出口は閉鎖されて、  
増々悲惨な光景となった。新入生歓迎会など  
はとんでもない偽りで、クラブ紹介のため  
の会と改めるべきであったのだ。否そのた  
めに、一年生は松高というものを知ったのだ  
からある意味で歓迎されたのかもしれない。  
新入生の歓迎のための会であるのか、クラ  
ブ紹介のための会であるのか、おそらく両方  
を一緒にしてしまったのだからだろうが、そ  
れにしてももう少しましな演出をして新入生  
を楽しませてもらいたかったものだ。

### オリエンテーション

オリエンテーションとは、確か新人教育と



十月  
九日 修学旅行  
十四日 中間考査  
十七日 演劇鑑賞会  
三十日 (星の牧場)

十一月

十一日 開校記念日  
十七日 講演会  
二十九日 防火訓練  
三十日 生徒総会



か、進路指導とかそういう意味だと思いま  
す。そこにおいてオリエンテーションの一つ  
の大きな部分を占めていた規約の説明は新人  
教育ないし、進路指導というものとしての効  
果が非常に薄かったのです。またそれはかた  
くるしいつまらないものでした。ぼくらし  
てはむしろその間、いつときも早く、学校を  
隅から隅まで知り、感じ、掴みとりたかつ  
た。そうです、わからない規約の説明よりも  
効果的で、たやすく興味を注いだのです。も  
しその規約というものが絶対的に必要なら  
ば、ほんとうに大切な、常に起こるような問  
題、行動を教えて欲しいと思います。新人を  
教育するというためにはこのかたくなるしいも  
の排除する必要があると思います。そのよ  
うに最初から生徒会のことはかたくなるしくつ  
まらないものであると植え付けてしまったの  
では、後に生徒会に興味を持つものが、非常  
に少なくなるのも仕方がないことだと言え  
るでしょう。

### 「第五福竜丸」

なぜ学校で映画を上映するのかと考えてみ  
ると以外と理由がみあたらない。観て考えて



もらいたいというのがおそらく主催側の考えであろうと思う。そうなるとう当然上映する映画も考えさせる映画——政治色の強い映画または文部省で推薦するような一般にいうまじめな映画となる。そして選ばれたのがこの「第五福竜丸」というわけだ。この映画は大変その意にかなう良い映画であった。しかもこの映画はずっと前に上映されもう上映されるみこみのない映画であるから学校等で上映する映画としてはもってこいなのである。

一つ提案がある。おもいきってもっともって強烈な極言的な映画、それが反社会的であれ淫乱であれそれが大きな話題となればいい。生徒を弱きつければいい。あまりに勝手気ままな意見かも知れない、しかし僕くにはそんな必要性が大いに感じられる。学校側もこの辺でその固い頭をゆるめて生徒の行為を認めるべく協力したらどうか。

### 一本松の会

「ねえ。今日一本松の会あるんですってよ。どうするー。」

「だって八時まででしょ。遅くなっちゃうでしょ。どうしようか?、どうするー。」



十二月  
五日 マラソン大会  
十三日 期末考査  
十六日 終業式  
二十五日 終業式  
二十六日 スキー教室  
三十日

一月  
八日 始業式  
十三日 女子美容講座  
二十日 高校生を社会に送るつどい  
二十五日 弁論大会  
全定交流会

「私、出るわ。いいわ、誰かに送ってもらから……。」

放課後三時十五分を過ぎた頃のことです。

「私、勉強しなきゃならないもの……。だって家がうるさいんだもん。」

そして、五時三十分「一本松の会」が体育館で始まる時間です。その頃、学校には九百の生徒の内百八十人ぐらいの生徒が、そして定時制の生徒が、体育館に集まって来ます。そして、歌声サークル、社会問題サークル、王将サークル、おもいおもいの希望のところへさって行きます。

それから、二時間半。

「あーあ。また同じね、いつもわからないじゃない、進歩しないのよね。」

「そうね。さあ、早く帰りましょうよ、おそくなるもの。」

全日制二年生。

「あーあ。たいしたことなかったね。帰ればよかった、私も。」

全日制一年生。

これで今日の一本松の会は終わった。

「ねえ、どうして全定交流会でやるの?。」

「さーあ、わかんないわ。」



二月  
一日 一・二年実力テスト  
五日 三年期末考査  
二十日 都立学力入試  
二十一日 地理野外調査

三月  
一日 映画教室  
二日 入学発表  
十一日 年末考査  
十五日 卒業式  
十七日 卒業式  
二十五日 終業式



権利と義務という題におぼれていた私達は、その数カ月を、まったくの虚無状態というのか、空虚な頭の中で、何の転回もなくただすごしていたようだ。そこに何の努力もなかったからだろう……。

一九六七年度に起った様々な事件を、私達は「高校生の権利と義務」をハッキリさせることに、答を見いだそうとしました。高校生の権利とは、憲法に保障されたものであると思いました。高校生の義務とは、学校での束縛のことを思いました。正にそれに違いないのです。

では何故、いろいろなトラブルが、未解決のままの様にまだグチャグチャと膿むのでしょうか、それは座談会で指された様に、教師・生徒間の互いの信頼感が欠け失っているからでしょう。それは話し合えば解決する筈です。しかしそこで、かけ声倒れというのが出て来ます。つまり両者とも話し合いの場を設けると、一人前の代議士のごとく、その場限りの

## 特集

### 高校生の権利と義務



先生 宗内 昭春

A 先生  
B 生徒代表  
C 生徒代表  
D 生徒代表  
E 生徒代表  
O 生徒代表

生徒の権利と義務について、座談会を開きたいと思います。

たわ言を、ぬけぬけと口に出し、結びにおいてはそれが約束されるのです。もしそれが真に約束したのなら、それだけの努力をし、もしどうしても、うまくいかないのなら、ちゃんと相手に積極的に弁解しなさい、それをしないから互いに誤解を生ずるのです。ところが、それがうまく出来ないのです、私自身、このル・クルの特集で、そういうあやまちを犯しています。何かそれだけ、責任感というものが、この学校中、あるいは世界的な傾向の中に、欠け失っているのではないのでしょうか。そのあやまちを正すまで、私達は話し合い、自責し、まじめに考えなければ誰かが人間としての権利を剝奪されることでしよう。そして民主主義は成り立たないのです。

## 座談会

### 高校生の権利と義務について

ところで登壇人物は

司会 生徒会誌編集委員長

A つまり権利はようするに制限されるってことでしょ。それがどの程度まで制限さ

O つまり高校生として自分の言いたい事ははっきりと、弁論大会みたいな場で言いたいことそのものを言う権利があるというのと、先生のほうが見て、そういう場合で不適当なものがあつたら、却下されてもしかたがないというような義務などです。

A 弁論大会で、権利と義務という点が問題になったの。

A 権利と義務というんでですけど、高校生に合せて言うのと、この発端となったのは前回つづかれた、一学期の弁論大会から出た言葉であつて、つぶれた原因についてのは、政治的なことを言っているのか、政治的なこと、学生においてそういう政治的な社会的な問題をあつた弁論に対して、そういう権利があるのか、また義務というのは学生において義務って言葉がでたの、一応はそういうものが話してはならないということになって、出された

A 権利って言葉がでたら、相反するものじゃなくて同時に、義務って言葉が普通ならでくるでしょう。

B 権利があるんなら、義務があるんじゃないの。

れるべきかってことでしよう。つまり義務っていうのは、権利っていう言葉が出たならしょうがないから出たの、それからその義務について聞きたいんだけど。



わけだが、そこにおいて言っている権利があるのか、また高校生において先生方からだめだと言われたら、それを受けなければならぬ義務があるのかどうか。そのでた根本は弁論大会において、その政治的発言、高校生においての政治的発言において、義務というのは、先生からだめだと言われたら受けなければならぬのか……。

A

議長に対して提案ですが、結局今問題になっている、学生と政治性というのについて始めにやっていただけじゃないか……具体的な例をあげて、政治的発言は学生においてというより高校生において、許されるのかどうかということ。

先

難しい問題ですね。それで、まずその前に話しをもとして弁論大会について考えると、要するに弁論大会というのは、学校において教育活動の一環として組まれていたものであったわけだと思えます。そこで私は直接指導にあたっていないから正確な判断はできないが、おそらく生徒側がその学校の教育活動の一環になうというより、弁論大会のねらいについて発言があったように、言いた

いことを言うんだという、弁論大会を言いたいことを言う場所であると考えたところに根本的な認識の相違があるんじゃないか。少なくともあったんじゃないかと思う。そのへんにくい違いがあるままに進んでいったその結果がですね、いろいろな問題を提起したのではないのか、権利・義務というような、考え方がちょっと違うような発展の仕方をしたのではないかというように考える、これで政治的な最終のお話のございました、学生と政治的発言ですが、学生に政治的発言が許されないかどうかということですから、いのかと思うのです。時と場合ということとは学校の教育活動ということ、一応憲法によって定められた規定に基づいて活動して、それが政治的発言といっても著しく偏向し、かたよっているような場合は、なにしろ団体生活ですから、他の生徒にはなだしくかたよった認識、あるいは知識を与える、あるいはないへん影響を与える、そういう時と場所においては、やはり困るだろうし、そうじゃなくて、グループ的な活動や研究材

A

料として発言することには一向さしつかえないというようなこともあるだろうし、具体的な事例が上がらないとなかなか判断が難しいんじゃないか……。

権利・義務についていっても、なんか平行線をたどったんじゃないかと思うんです。要するに弁論大会というものの性格にしても、それを学校側がねらいとした、従来ねらいとしてきたものと言いたいことを言うということでは、全く根本的に性質が違いますのでね。そうじゃないかと思うんです。

え方ができると思っています。政治発言、意見団生活における政治的発言は、ある味で一方的な影響を生徒に与えるという、それと同時に悪影響を与えるからそれは原稿提出という形で、訂正されるべきではないだろうか。そういう考え方がそれがいわゆる先生方の考え方であったわけで、ただ私として思うのは、はたして言いたいことを言わせないで、訂正させて行なうのが本当の教育であるか僕の思うところでは、それは言わせるべきではないだろうかと思っています。結局ですね。それぞれ弁論大会において、まあ、かつてと違ってはなんですが自分の思ったことをいうというのもでよくあると思うんです。それからH・Rというものがあるわけですね。それでH・Rにおいて、その意見についてそれなりに話し合う、話し合ってみればある意味で結論が出てくると思うんです。そこそこ

先

私ですか？ はい、私もじつは弁論大会のことについては直接の担当でないのですが、私の知っている範囲のことで、お答えするより方法がないのですが、最初私が申しあげたように、あなたの言うことはよくわかるので、それはそれなりに意味があると思うのです。それは否定しないけれども、最初言ったように、弁論大会が本校で持たれた初めは、生徒指導部でそう説明したということですが、弁論技術ね、あるいは態度とか音声とか、そういった、弁論大会がもつところのその意味をそのまま受けた、弁論大会であった訳です。少くともね、弁論技術とか、態度とか、そう言ったものを無視したものではないと思うんです、その時には当然ただありのままの姿を展開するというのと、あわせて、指導を受けて「ここはこういう言いまわしをしたほうがよい。」あるいは、

A

過去、あるいは始まったのは、たしか大弁論大会があるというのでね、そこに本校の代表を送らなきゃならん、というようなことから始まったと思うんですけどね、これは、大和久先生がたしかよく知ってらっしゃると思うんですが、この起

こりは。だから、そのころ始めから政治的な発言を封鎖するため、原稿を見せろとかいうことではないんです。とにかく弁論におけるところの姿勢だとかことばの使い方とか、採点していたでしょう。それで一等賞とか二等賞とか決めておいた時代もあったんですが、そういう形で原稿を、先生が見てくれておったんじゃないかと思うんです。それはまあ、見るこ

ろで指導という形が最終的に働いた方が結局は生徒全体、ようするに原稿提出という一方的な指導というよりも総かつ的な指導ができると思うんです。より、意味の深い、そういう指導のしかたという

「このことば使いは、こう使ったほうがよい。」という風な指導が従来行なわれていたと

では、最近になって特に、今年ではないかと思いますが、ベトナムの問題とかいろいろな物が起こってきたということによって、あの原稿を見せてくれという事が検閲だとかいろいろあるというものを、おさえつけようとしているん



だ、学校側がね、そういう風にとられたふしがあるのではないかと思います。その見せてくれという事実にたいしてはね、それから、確かに生徒がどういう風に考えているかということは生で知ることとは必要なことで、それを知ることによって、生徒を知ることによって、指導することもできるわけだし生の生徒の姿を知ることとは、教師としては必要なことですね、けれどもおそらく弁論大会というものが、生徒に言いたいことを、言わせるといっていい。自己満足ね、その個人に自己満足を、与えるという場ではないという考え方もあるまたは、あつただろうと思いますけれどもね、ちょっと質問の意味と、くい違っているかもしれないが、その検閲で言いたいことを抑える、それから弁論大会そのものが言いたいことを言う場所、まあ研究発表会ですとか、いろいろなことば使いはあるんでしょうが、その辺にちょっと、食い違いがあるんじゃないんでしょうかねー。

A  
まあ、本校においては研究発表会という意味とすね、結局、弁論技術を競うと

いう意味とゴツチャになってると思うんです。少くともそれは今までは両方あったと思うんです、まあ、どっちという風に決めてなかったと思うんです、それが一番いいことには、一等・二等を上げていたという訳ですけども、結局その審査というものは、まあたいてい、技術という物を重んじてなかったし、どの人を見ても、たいして技術という物は、持っていなかったし、弁論というものを考えていたか、それとも言いたいことを考えていたか、それとも言いたいことを考えていたか、それとも言いたいことを……そこにおいて、学校においては、弁論技術を重視するという方向には一つも向いていなかったと思うんです、今までは。

先  
いや、それはあつたんじゃないんですかね。一等賞・二等賞つて決めて、私も審査員になったことあるけど、弁論の態度とか項目としてありましてね、勿論内容もありましたよ、けど五・六項目に別れておりましてね、何が何点・何が何点ということですね、採点してありました。生徒も代表がでて、採点したんでしょう。

か。採点した結果を見ても、確かに一等になる奴は堂々とね、言っておったし、という風に私共は感じとったですがね。勿論内容がなければ、弁論大会は意味がないです、ただどうしゃべるだけの形がよかっただけでも、内容が充実していって、こう展開するんでなくて、意味がないことは当然ですけど、そういうしゃべり方は、どうでもいいんだ、あるいは、ことは使い等はどうでもいいんだと言いうことではなかったと解釈するんだがそこね、学校側の解釈と、生徒側の解釈とに、多少のズレがあつたんじゃないかと、ないしはあるんじゃないかと思えます……。

A  
まあ、ちょっと、弁論技術重視という方向で、行なわれるとしたら、結局、学校行事として、要するに、学校が集めて希望者をとるんじゃないくて、H・R強制という形でやらなければならぬと思うのです。生徒会行事としてやるのでしたら生徒会としては内容重視という方向をとらざるを得ないと思うのです。そこで、まあ、今までは生徒会と学校と、ゴツチャ混ぜにしてきたという、おかしな傾向が

あつたと思うのです。少なくとも今度のは、文化委員会が主催という形なので、それは、問題ないと思うのですけれど。内容がなきゃやっぱりだめですもの。

先

いや、内容がなければいけませんけれどもね、言いたいことを、皆がバラバラバラ言うっていうのが、従来の弁論大会ではないですよ、今まで弁論大会はたくさんあつたわけですよ、どこどこ主催の弁論大会とかいろいろな弁論大会があつたわけですが、その弁論大会は、たまたま言いたいことを言うというものではなかった。だからもう今の時代で弁論大会は必要であるかどうかとさえ、言われておりますね。

A  
いや、それは先生おかしいですよ、あの結局ですね、まあ今、行なわれている弁論大会では、一番権位があつて、大がかりなものと言え、NHK主催の弁論大会だと思ふんですね。

A 先  
「青年の主張」ですか？

A 先  
あれは、弁論大会と称してないでしょう。だったら、今、弁論大会なんかしてないんじゃないかなあー。

先  
だからさ、あの「青年の主張」というのは弁論大会と称してないでしょ。

先

いや、あれは、弁論大会という口調がかしいから、変えたんじゃないですか？さあ、その辺はよく知りませんが、従来の弁論大会と称するものは、ただその一言いいたいことを言うんだというのではないことは確かですね「青年の主張」は、要するに自分のテーマを決めて、だから、あれが弁論大会であるかないかということは、私はよく知らないんですが、あれは、やはりどういふ採点をしているかという、態度とか、そういうのを、しておりますね。

A 先  
結局、あの、ああいうのになつてしまつておりますね。

A 先  
何人かが、採点しておるんでしょう？ええ、採点しておりますけれど、ほとんど、まあ、しゃべり方、それから態度は別としても、しゃべり方に関しては、優劣つけがたいと思うんです。まあ、そこで問題になってくるのは、内容と態度だと思ふんです。まあ、あやうな例から見ますと、結局この学校では、どれも、優劣つけがたいくらい、弁論のほうはへた

先

A

だから、そこに、多少のね、いや、大きな食い違いがあつたんじゃないですかね結局、あの、弁論大会。弁論大会。弁論技術を何とかいうのでしたら、一部の生徒が出てじゃなくて、全員がそれを行なわなければならぬと思うんです。それが、代表を出すというのは、何かすごくおかしいと言えらると思うのです。そういうことにはなりませんか？

先  
まあ、それは教育活動の一環として、全部が参加することはできないんだが、それを見て、

「はあーあの人のしゃべり方はいい。」とこう、感ずるとか、昔から行われておつた弁論大会というものを、教育活動にとりいれるとすれば、そういうことであつた訳で、とにかくいずれにしても、話すと長い、弁論大会のいきさつについては、なんか平行線があつたのではないか、今後、その溝を埋めるといふことは必要



でしょうね。溝を埋めて、研究発表会という形式であるいは弁論大会の定義を変える、定義を変えるというのはおかしいが、そう認識している人が少なくともいるんだからね。共通の理解の上に立って、本校でいう弁論大会はこういうものだというところで弁論大会のことは、今後うまくいくんじゃないですか。

ええ、それはそれでまあまわらないんですが、結局学校では弁論というものを、重視して、今までは少くとも、そうしてきたわけですね。

A 先

はあ、そうですね。  
それにしても、弁論大会という生徒に任せっきりで、結局、生徒やりなさい。という、そういうような形でしたら、結局生徒は、研究発表という形でしかやりようがなかったと思うんです。その点、積極的に学校行事としてやるのでしたら生徒はほとんど手を加えないとしても、学校でやってほしいと思います。それが本来の形だと思います。弁論技術のための大会でしたら。まあ、その他に、生徒の主張のための大会があってもいいと思います。文化委員会で今度やると思うん

です。結局あれは、小規模ですから、弁論技術というよりも、内容重視という傾向にならざるを得ないと思います。

先

研究発表会でしたら何も、研究発表会をやってる学校もあるし、我々もやったことあります。他の学校でね。これに、あの弁論大会とは意味が違ってきて、自分が研究したことを、発表する訳で、あるいは、クラブで研究したこととかそういう事を発表する機関ですね。だから、そういう二つのことが何か、ゴッチャになったんじゃないかと、それもこれも、文化部の先生方が中心になってやっておられるので、私が今申しあげたことはあながち、話しの的をえているかいないかは、ちょっとわからないので、私は個人的に弁論大会のいろいろな問題を、そう解釈しておりました。だから、その認識が違うから、認識が違う状態で、やれ検閲だとかね、検閲を受けたんだとかそれを受けるのがいやだから出ないとか。そして、流れたとか、なんかいろいろ問題に発展していったんじゃないですか。アノ、それで、食い違いの一つなんですけど、言いたいことを言っている、あ

D

先

それは、僕等と先生方と、そのことばに對しての考え方が、大分違うと思うんです。僕が言わゆる言いた事を言うっていうのは、自分で考えて、自分の頭にもどして、そして、何か言うわけで出たところ勝負っていうのかな下から出てくるものじゃなくて、やっぱり本を読んだり、研究資料っていうのを見て、他人の意見を聞いて、そして言うことが言いたいことを言うことで、行きあたりばったりでペラペラ言うのが僕ら、言いたいことを言う、そういうふうに見てなかったわけで、ところが先生方、言いたい事を言うっていうのが本当に好きかってなことを言うところが一ツ言いたいこと言うことに對しても、考え方の違いがあったわけで……。

そうですね。それもあつたでしょうね。それが非常に抽象的で抽象論の交換になつてから、そういうことに成っちゃうんで、言いたい事を言うっていうのもそういう想像をする場合もあるだろうし、私が聞いた範囲では原稿を見た人はいないんだそうだな。結局それでいいと言った人もいないし、だめだと言った人もい

ない。そこで言いたいことを言わしてくれない、要するになにかそこで空転していたんじゃないかと思ひます。

A

ですけれどもね。先生、原稿を提出するっていうことは、あくまでも絶対的に「検閲」行為であることは確かだと思ひます。そうじゃありませんか、あくまでも原稿提出。

結局それではですね。あの、まあ考え方によっては、学校という特別な組織内にいるから生徒はそのような検閲行為はされないというような権利は制限されるのではないかって見方と学校内であつても結局「検閲」はしてはならないというような、それは……「検閲」はされてはならないという権利があると思ひます。その二通りの考え方があると思ひます。結局、高校生の権利としてそこそこで違いがあったと思ひます。学校内において特別な間柄であるから先生から権利の制限を受けなければならない。それともこの様な間柄であつてその権利は絶対的な権利として持つことができるかどうか、その違いだと思ひます。そこはね。今日は適当ではないかもしれ

A

ないが永浜先生が研究しておられる憲法で言う「検閲」ということの意味と指導上から原稿を見せてくれっていうのは明らかに別で、それを「検閲」と解釈するのは明らかにまちがいでであると言ふことを言っておられますね。弁論大会をやるとその時に原稿を見せてくれじゃない、見せるようになっていたわけだから原稿を見ろということを行なっていたんじゃないですか。

僕が、弁論大会に出た時は、原稿を出さなかったけどなア。あの原稿提出は結局何人にもなかったんです。どういふことについて話すかその題と外略二・三行だけその……見るっていうことが始まったのは結局「ベトナム戦争」っていうことが高まったからじゃないかって、みている訳ですね。それはちょっと抑えられるという。生徒からしたら、そういう抑えられ方は、権利、まあ最低限度の生徒の権利というものを奪うものではないか。退場した人のほとんどは……。だから、それは、今に始まったのではないのであつて、原稿を提出してもらう。我々も、覚えがあります、学年で国語

A

の先生がおられたら、その国語の先生にみてもらう。そういうことは、従来行つておつたので、それが時に、これはまあ学校側の責任でもあると思ひますが、君達の時には、行われなかった。行ふことになつていて行われなかったということがあつたので、急にそれを始めたといふふうに、解釈されたのではないかと思ひますが、従来あの弁論大会というのは学校の教育活動の一つであるから、よりよき成果を上げるために原稿は見てもらつたいてた。国語の先生にね、学年には、国語の先生がいっしょやるのですね……。

はい、それで生徒としては、結局そういう風に毎年変つていふような、いいかげんなことでは困ると思ひますね。毎年こういう問題を起こしてるんじゃない、困りますからね。その点は、はっきりした態度を取ってほしいと思ひます。それから永浜先生ですね、永浜先生にしても二回・三回と言うごとに、言うことが違つていふような気がするんですが今年の場合。そういうことも、先生方の見解をはっきりさせていただきたいと思ひます







E そうすると、程度の問題じゃないかな？  
C うん、だからさ、今まで学校にしたって

極端な政治的なものなんて言ってるけどさ、あれはさ、極端な外交問題であってさ、なんていうか、政治の一部だけに、傾いているから、政治問題をいう気がしない。ただ、僕はもう義務教育ではないから、そういうことを言っても、構わないと思う。

D

構わないって言うけど、僕等三年になつて政治経済って習う訳、だから、自分でも少し、勉強しなきゃいけない訳、日本史もそうなんだけど、昭和から今までの歴史をやるの。その僕等の習った限りでは、自分の考えを発表したりするのは必要だと思う。だけど残念ながら今の高校の教育は、そこまでやってもらえないんだよね。常にその前で終っちゃって、現代の日本史をやってほしいです。先生方はそれには、自信がないと思うけど、やらなくてはならない、言うのが当然だし、そうでもないかな。だからさ、なにも障害なくて、自由に言えるんだよ。  
先 あの、それはね、政治的なことは一切口にしたり、発表したりしてはいけない

ということはないでしょうね。今のお話しの、先生はもつと言つてもいいんじゃないかっていうのはやはり、私は専門じゃないけど、日本史のね解釈のしかたっていうのは、専門家も大きく対立するんですね、定説というのがないんじゃないかと思ひます。

D

はあ、現代史っていうのは、常にひっくりかえるからね。  
A おもしろいよ。

A

いや、だから、真理がないから語れないんじゃないかな、先生方の話を聞いていますとね。

O

政治的なことを、一切口にしてはいけないというのではないとおっしゃいましたか。

O

先 ないと思いますよ。弁論大会の時も、そんなことは、一切いけないといったことはないと思います。

O

だけど、学校内で「ベトナム戦争反対」のプレート、バッチみたいのを禁止されたりなんかしてるんですけど、それは？それは、思想的に対立しているバックがあるということをも前提にしているんじゃないですか？

A それはだけど先生、確かめた訳ではないと思うんですけど。

先 純粹にベトナムに平和をと、願うということ否定する者はないんじゃないですかね。と思ひます。

A

でも、高校生の気持ち等は、純粹でしかあり得ないと思うんですけど。

先

うん、それはただ、その不幸なことに、みなさん御承知のとおり、平和運動そのものが、非常に分裂している。純粹さに疑問さえ感ずる人もいる。これも私専門じゃないから、よく知らないけど。

A

先生、先程から専門外、専門外でおっしゃいますけどね、新聞ぐらいの知識でいいと思うんです。その程度までは言ってください。

先

はい。じゃその程度でね。でその分裂してるでしょう。そういうところで、問題が起ってくるんじゃないでしょうか。

A

あのその場合。比格的、ベトナムの反戦運動の場合は、日本では安定していると思うんですけど、いかがですか、結局、三派・日共っていうのは、一般的に除かれるとしても、ベ平連っていうのは、世界的に平和運動として認められてると、解

釈されているんじゃないですか？三大新聞や他の新聞等、一通りみてみて……。

先

そうでしょうね、一応そうでしょうね。あれはちょっとわからなかったなあ。いけない理由がなんだって言ったら、学生服にバッチ類をつけると……。

A

美化がなるとかっていったな。  
D うん、美化がよくないってそういうふうな、理由だったんで、納得いかなかった。

先

あれはやっぱり、ことの起りがいろいろあったんじゃないですか、私は直接担当者じゃないから知らないとお答えするよりほかに方法がないが、その発展して行く前にいろいろな動きがあったんじゃないんですか？

A

あったんじゃないんですかってね。  
先 と私は聞いている。

A

結局、職員会を通じて、やめるようにという連絡があったので、まあ職員会っていうのは水曜日だから、水曜日でしたね全員先生方出席ということになっていたと思うんですけど、そうすると、職員会議ではどういうことをやったのでしょうか。

先

私の聞いている範囲では、バッチの前に

なにかあったんじゃないんですか？カバンにつけたり……。

A

あれは結局どういう意味でカバンにつけたのはいけないということになったのですか。

先

そうですね、話を聞いておりますとね非常にオーバーな表現を、しておったのじゃないですか。僕は直接見てはいないが。

A

そうだったかな。オーバーな表現というのはそれは主観の違いだと思うのです。なぜ、オーバーな表現をしては、いけないのですか？やはり、一応高校生という穀にこもっていますけど、中学から働きに出た人間だったら、社会人として扱われるわけでしょう。僕等は義務教育を終えている人間達が好きこのんでくる訳ですから、オーバーな表現を規制する訳がわかりません。

A

オーバーな表現と先生おっしゃいましたが、結局そのオーバーな表現にあたるような人達は、別に忠告を受けたのですか。それで……。

A

先 なんです。あの、結局カバンにつけて来て……。

A それはですけど先生、確かめた訳ではないと思うんですけど。

先 純粹にベトナムに平和をと、願うということ否定する者はないんじゃないですかね。と思ひます。

A

でも、高校生の気持ち等は、純粹でしかあり得ないと思うんですけど。

先

うん、それはただ、その不幸なことに、みなさん御承知のとおり、平和運動そのものが、非常に分裂している。純粹さに疑問さえ感ずる人もいる。これも私専門じゃないから、よく知らないけど。

A

先生、先程から専門外、専門外でおっしゃいますけどね、新聞ぐらいの知識でいいと思うんです。その程度までは言ってください。

先

はい。じゃその程度でね。でその分裂してるでしょう。そういうところで、問題が起ってくるんじゃないでしょうか。

A

あのその場合。比格的、ベトナムの反戦運動の場合は、日本では安定していると思うんですけど、いかがですか、結局、三派・日共っていうのは、一般的に除かれるとしても、ベ平連っていうのは、世界的に平和運動として認められてると、解

先 それは受けたんじゃないですか。別にひとつも変わっていないように思うんですけど。そうじゃありませんか？

A

変わっていないっていうのは？

A

まあ、どうなのかなあ、結局それは忠告で、まあそれはやめるようになってしまったわけですね。

A

先 それで、プレートのことも、やめるようにという、その関係がはっきりわからないんですけど……。

A

先 いや、だから、その、プレートを渡された訳ですけど、たとえばうちのクラスの生徒あたりは、三年生が何かに頼まれて渡された訳ですな。

A

先 いや頼まれたってそれは自主的なものだと思いますけど、頼まれたっていうのは個人の人格を無視した言い方ではありませんか。  
A 最初は、渡されたんでしよう。初めからくれているって持ってたんじゃないんでしよう。  
C そういうものでしょうか？  
A あれは、くれているって言ったんじゃないんですか？



B くださって言うてもらったクラスが大部分やってくれて頼まれたクラスもあるんですけど。

C あるの？

A でも、つけたつけないは、自分の意志でしよう。

B それはそうでしょう。

A だったら、それは、おかしいんじゃないかな。

先 まあ、それはいずれにしてもやっぱり、抽象的な問題に、具体的なプレートをつけるという問題であるけれども、非常に抽象的な要素を含む訳ですよ、だから、そういう問題はもっと煮つめて、生徒会で、せっかく生徒会があるんだからこれは僕個人の意見ですけど、生徒会でこういう問題をどう処理していくかという風な、積み重ねがあつていいんじゃないかと思えますところが全々積み重ねも何もなくですね、プレートを付けて、「ベトナムに平和を」とかね、終わりごろになったら英語かなんかになってましたけどね、私の知っている限りではね、というような、やっぱりその本質的にはもっと抽象的な物があるんじゃないんで

すかね。プレートをつけたのをやめさせ

A たとかね、そんなんじゃないくて、もっと掘り下げてみて、どうしたらベトナムに平和がくるのかということを、我々がたとえ、これもあるいはちよつと言いつ過ぎかも知れませんが、プレートをつけることによってベトナムに平和が来るのか、あるいはもっとベトナムに不幸な人がいるのを、助けようとするのか、なんかもっとあるのじゃないか、これは僕個人の意見ですけどね。

A まあ、プレートをつけるまでには、いろいろあつたと思うんですが、高校生というのは、限られた年代だから、まあ、この程度で高校生でも考えています、ということを示す程度にしようではないかというのでプレートが出来たと思うんです。その所、こういう風にお考えになったか。

先 しかし、それは、正確に伝わってないんじゃないのかな。

A 伝わっていないといえますと？

先 そういうふうに高校生では、プレートをつけようということをやっているというところが、少くとも学校の生徒会という

A 組織がある訳でしよう。

A でも、それは、個人的活動というのは生徒会外としても認められるわけでしょう。

先 うん？

A すべて生徒会の元に行なわれるんじゃないやそれはまるで、専制制ですからおかしいもんですよ。今の生徒会というのは、生徒の自主制を重んじて行こうという形でやっている訳ですよ。生徒会を取り上げる、取り上げないは別として、個人的活動はあつてもいいんじゃないですか。そこまで、学校は制限するんですか？

先 そうね、ただ、うーんと、君の方でも飛躍して考えるし、個人的な趣味とか、なんというか活動がどんどん広まったら、学校中なかなか收拾がつかなくなるんじゃないですかね。

A いや、少くとも、個人的活動というものが、すべての元だと思ふのです。生徒会活動！

先 少くとも、手続きを踏んでですね、積み重ねてやっていったらいいんじゃないかと思ひます、個人を主張するってこともいいけれど！

A まあ、結局プレートも手続きを踏んで、行うべきだったという訳ですか。

先 まあ、そういうことでしょね。

A そうすると、手続きを得れば良いというわけですね。

先 手続を経て、その筋を通してね。

A えーと、手続を経るということは、個人個人で経るということですか、それとも代表者が経るってことですか？

先 自分が、たとえば、こういうことをやりたいと思うなら、やはり学校の組織を通して、それがいいかどうか、そしたらその人が：「パー」とこうまわして、やっぱり十人いますと十人とも考えていうのは、違っていますよね、たとえば、プレートを付けている十人の生徒っていうのは、違っています。少くとも、そういう広がった状態で話をするとか、仲間むづかしくなるよね、ところがその本人が、それを少くとも意図してやろうとするわけだから……。

A ハイ……。

先 それはだれだか知らんけれども、とにかく、誰であつてもいいですね。私なら私が、何かを意図してこうやろとするわけ

だから、そうであるなら、それはやっぱり、学校の組織の中でやる。だからその責任者に一応相談をして、その指導を受けるという、その姿勢は、やっぱり必要じゃないですか？

A その指導を受けるといふ筋は、文化部：先生方の文化の係りでしょうか。

先 まあ、それが生徒会全体におよぼそうとするのなら、生徒会でしょうし。

A 生徒会でしようって、生徒指導部ですか。そうですね。

A そうすると、あの先生、生徒指導部で服装の美化という面でおかしいから、やってはいけまんということを言うっていうことですか。

先 うん？

A もし、申しでた場合、服装にそういう物があるというのは、おかしいから、やめなさいっていう見解をだされるという訳ですか。

先 訳ですかって、それは……。

A そういうことを一応、先生方の方で話し合つてなんらかの見解が出るわけですね。そうですね。

A そうだとしたら、服装の美化なんてのは

理由にならないと思ふんですけど……。

先 服装の美化が理由であつても、なくてもやはり結論が出たら、それに従わなくては、ならないでしょう。これはやっぱり、高校生の義務じゃないんですか。

A その結論が、不合理であれば、更にお願ひして、何回もやっていくってことが、一つの秩序ある社会のやり方ではないかと僕は思うよ。やはり神ならぬ人間が作った結論ですから、不合理があると思ひますよ、まあ、その時でも、何回もお願ひしてネ、矛盾があつたり、不合理と感じた時にはね。

A 結局、何回行つてもかまわないということですね。

先 そうですね。

A 何回行つてもダメだったらコマツチャウな！

先 しかし、ほんとに真剣にそう信じ、そう考えて行動し、自らかえりみてなおかつこうすべきだということであれば、わかるだろうし、ねえ、そこに純粋な意味があつて、しかも崇高な考え方があつて、あたつたら、たいていの人は、わかるんじゃないですか。そう私は人間社会を、



信じたいですね。

D 学生の権利というのは、やりたいこと、言いたいこと、政治的でもなんでもやって、もしダメダて言ったら、まづ、その、ダメダという前に、理由なりなんなりを聞いて納得した場合はそれでよしと納得できなかった場合は、何回も話し合いを重ねるなんかこう……。

A 理想的ですね。

D うん。

先うん。だから民主主義そのものってものが時間がかかるんじゃないですか。そこで気に入らないからっていつて、脱落したり、あるいは、過激な行動に移ったりするということは、民主的ではない。何回も話し合って……。

A 今日の例をあげては何ですけど、結局こ  
こまでくるのに、一時間あまりかかって  
いますね、普通だったらここから話し始  
めるが普通なんですよとね。

A 結局、それだけ、先生と生徒の間はひどい関係なんですね。

先  
めいめいが、かなり認識において、食  
違いがあつて、まあ、生徒の側から言え  
ば、先生方もいけないだろうし、先生

方のほうから、言わせれば、やっぱり少し思い過ぎと、たとえば弁論大会の例をとってみても少し思いすぎて、いろいろなことをやっているんじゃないかという点もあるし、その辺を、埋めていくという努力が必要だろうしね。

D  
○○○○の中の権利と義務

僕等は、つまり松原高校の決りみたいな  
 のがあるけれど、それにやっぱり従わな  
 きやいけないんだろうな。具体的だと、  
 生徒会とあと、ここらみたいの、それで  
 やつてれば、あとはまねをしたらいいつ  
 て言うのと語弊なんだ。モラルか、道徳に  
 反しないなら、何をやってもよいといふ  
 ことになる。

○ 何をやってもよいということには、ア

D  
レがあるけど……。  
一般的に言って……。

○  
うん。

D 一般的に言うってことは、ごまかしちゃ

ってるけど……。

○  
うん。

D  
○○○○

なにやってもいいんだ。

○ まあ、できる訳だよ。

を主体として、他にもまあ、いくつかあるかもしれませんが、集中的に出てきたというわけではないか。

A 今まで文化部が、ひま過ぎたんじやないか。

A 今まで文化部が、ひま過ぎたんじやないか。

先 ひま過ぎた？ ハハハ（笑）

C それを言うためには義務というものがあ  
るはずです。

A　まず社会に反さないというのかな。

そういうことは他人に迷惑をかけないということで、でも社会に反さないということとはみかたによっていくらでもできると思うんだが……社会に反さないということは、考え方を利用できるということ、頭の堅い人にいわせればグループサウンズだって、社会に反しているということ。

E まあそのことについてなんですけど、僕の場合文化祭やったんですね、あの時にはグループサウンズは出すということになったんですね。ところがどういいう訳か職員生徒連絡会の時におよんで、半分うやむやのうちにグループサウンズがたち切れになったんですね。あの場合僕としては納得しないうちにそうなってしまつて

C よくないね。  
先 いいわけでしょうね。いいわけであって

「悪い」って言うでしょうね。

D 今まで、ずっと問題になってきたことは

人がみて、悪いという、その違いがすぐく、はっきりしていないから、常にガタガタしている。たとえば、片方の人が見ていい、片方の人が見て、また悪い、そこんとこがすぐあつたんじやない？ いままで。これからもそこんとこの問題は、いつまで続くかわからない。

○ 我々は、学校に在る限り、先生の意見も

とり入れなきやならないでしょう。友達  
の意見よりも。

D だから、もし納得できなければ、納得で

きるまで話して、最終的に従う。

○ まあ、合わなかったら、出てっちゃう。

一同（笑）

先 それ程の問題ってのは、そんなにあるものじゃないのんじゃない？

A いや、先生……。

先 最近こう、バッパアーと出てきたもんで

それ程問題があるとは考えない。文化部

徒の方の話も聞いてくれないということ  
で職員会議で蹴られたあと、あれだけ全  
校生徒の八〇パーセントの賛成している  
ように、それはもう職員会議で蹴られた  
ら終りでだめだということ、生徒のそ  
れについてのなぜやってはいけないかと  
いう理由も、全然生徒会において説明さ  
れなかったようなんです。だからこうな  
ってしまつと、口先だけの話合ひといふ  
だけであつて、全然それが実行に移つて  
いないといふことで、そういうことを強  
く感じるのですよね、だからそういうこ  
とがあるからこそ、生徒と先生がどんど  
んはなれていくのではないのですか。

A

の他を密にしていくなということが全般的に言えるのではないかな。たとえば何が一つのことが行なわれる場合、肝心の先生の意志のそつというものを十分に計っていくという努力は、教師の手を差し延べなければならぬのであるわけだけど、生徒も、とかく連絡その他が不十分な所はないですか。

先

私の知っているのでは、生徒総会を先に



通してしまったとか、先生が知らない内に生徒会ではーんと通ってしまったという事で、そういう事になると、続いて生徒総会で通ってしまったって職員会議で否決されてしまうと、また生徒総会と職員会がくい違ってしまう。

A 先生、それは考え方が違うんじゃないんですか。あの僕が考えるのは結局生徒の中から自然的に盛り上がった意見というのが、生徒会の意見というのであって、その意見というのが職員と相対してあの…否決になってしまったということで、結局職員会を通じてから生徒総会にかけるといことは、まるっきり生徒会は、職員に左右されていることになると思うんですね。結局それはおかしいと思うんですね。予算においても、その所の見解においての違いというのが、人によって目立っただけだと思うんです。

そういう学生の権利というのは、先生がだめといったらダメであって、先生がいちと言えそこにおいてやること自体は、学生はいんだということ、ただ生徒総会ということで無能化されているということ、ただ単に名目上のことが

あるという事で、一応礼儀的にやっているということじゃないんですか。学生というのが、いくらすぐくやらせてくれと言っても全然とらないというか……。さっきの職員会議が先に通るか通らないかということでもあるし、生徒会で決ったといっても、職員会議には通らないことでは全然できないでそういうことは権利というものは全然無視されて、ただ先生がやれということとやれそうなのは、先生がだめだといったらだめだという状態にあるのではないのですか。そういうのは高校生にあるのですか。

先 それは思い過ごしだと思う。家庭におけるオヤジさんと子供みたいなもので、そういうふうな解釈すればいいんじゃないですか。事実、生徒がやりたいと思うことを全部、つぶしていきませんか。先生が……これだけはいけないということとは、つぶすと思いますかね、でも大半のことはですね、生徒がいうなりに認めているのではないですか、たとえば文化祭、弁論大会に話もどるが、私はむしろ弁論大会においては文句がいたい。教師の一人としてね。なぜ、あれは生徒会

の方が要求して臨時職員会議を開いてね。わざわざ日取りを決めたんですよ。わざわざ急に、文化部から出て来てそれをもう流して、いるんだね。流している原因はいきちがいということ、なんでもかんでもつぶすということはない。

A それだけをつぶすというのが、問題なんです。

A 結局生徒側で継続してして学校行事としてやるということは矛盾があると思うのですけど、そんな所でまあ生徒会として出してんだったら生徒会の自主性を認めるということで立場に立ってほしいんです。どうしても学校行事であるのでしたら先生方も責任を持って御指導してもらいたいんです。そして弁論術の中心の弁論大会というものをできると思うんです。生徒会の考えているのは内容中心の弁論大会であつたと思うのですが結局の意志というものを裏切っているのではないですか。

先 私個人の見解ですが、生徒の自主的な活動は、たとえば戦前でも存在していた訳

で或る面ではむしろ今より活発に活動していたように思われます。生徒会というのが出来てから、先生方は生徒の意見を尊重し生徒になるべく活動させようと思っ

A っています。そういうことで体育祭にしても、文化祭にしても学校行事として生徒に大幅に取り組む企画を持たせようと思っ

A っている。習慣を見つけさせたいという考え方でいこうというので、そこがすつきりしてないということであると思う

A なんです。然し大事なことでと思う。まあ生徒が企画したということよりも、お膳立てが出来ていてそれで生徒が小間

D

使いに使われたということは、文化祭・体育祭をやった人達が言うんですね。そのところはこれから、検討しなければならぬのですが……。

先 毎年のようにこれから検討、これから検討ということでしたね。でもその検討はされませんでしたね。悲しいな……。

D 生徒指導部がありますよね。あれがあることによって、国語の先生方の教育という知識を教えるというのは教育ではないというのですか、多分になんという傾向が出ていないかなと考えるので

先 すが。

D 生徒指導部があるから？

D いえ、生徒指導部というのは全部の先生が入っているのですか、加わっているのですか。

先

学校の分掌には全部入っているようですね。

D そうだから生徒指導部、たとえば生物の

先 中平先生は生物を教えていますね。生物という科目を通して教育というものを一つでも生徒に分ってほしいと思っ

D ていると思っ

D ていると思っ

D

人間の完成していくということがあるという事で生徒指導部に任せればいいと、知識だけを売っておればいいのだという事になりかねないわけですね。それは要するに、仕事の分担ということと進路指導とか生徒指導とかいろいろあるのですね。ということなんですがね。



すごく重視したのに高校ではその中間でそれに最近では大学入試というすごく浪人というのただ、松原高校は予備校というのはまだほかの学校よりははしくなくていいのですが……。そういうのがあってなんか大学・中学の中間であってはっきりしていないのではないですか。先生方も感じているのではないですか。

先 そうですね。たしかに生徒の方から、中学からね、入ってきた一年生は中学時代とは違って先生に親近間を持ってないというようなことをいつている生徒をよく見かけますね、たしかにもっと我々・私個人としては、生徒と接触するという機会、まあいろいろな学問を離れたそれこそ政治問題もいいでし、そんな話の中にも割りこんでいて話をするということは、必要で、えーと教師が中で反省しなくてはいけない点があると思います。でお互いに生徒の方でもまあ、やはりそういう機会を提供してね、やっていけばしかしさつきからあまり時間がなかったと……。弁論大会とは何ごとぞということになっちゃって話が難かしくなってきたしまったけれど。

E

あの、実はこの生徒総会というのは、すくなくとも高校生の間では、最高に権力を許している機関なんですね。ですけど僕が一年間やっていて思うことは、かなり先生方は生徒総会を軽視されているように思うのです。というのは先ほど出したように、生徒総会で全く多数で通ったところを無視されてしまつて、毎回見ているのですけど、生徒総会の時に先生方の出席が少なく思うのですけれど。まあ僕達の場合は生徒総会とはかなり形式化されてしまつて、お義理みたいなやつていうようなこともあるんですけど……。そういつてもやはり決つたりする最高機関なんですよ、とそれを先生方が無視されているとまでもいかなくても、かなり強いと思いますけど、まあそれがすごく生徒総会はただの形式だけであるというふうに感じられるのですね、僕には……。

先

また先生方がそういう態度をとられるじたい僕達の権利を認められていにしてはちょっとおかしいと思うのです。そういうことはありますね。一番適格な例ですね。生徒指導部があるので、その

先生方にまかせておけばいいんだというような気がね、あるんだと思うんですが。やっぱりその点は生徒指導部の方に要望していただいて、なるべく先生方に参加していただくように働きかけていた方がいいと思います。個人的には同感です。

D

あの……だけと毎回かけ声だけで本当にかげ声倒れみたいですけど、ある程度は先生方にもわかってもらえるのですけどそれ以上はそうしまししょうこうしまししょうというところで、それ以上は全然進まない。さっきの宗田じゃないんですけど……。かけ声倒れは毎回言われていますが……。今日調べて、こうしようというのが色々でてきたのですが……。少なくとも三つ四つあると思うのです。それをメモして先生方の所持って行きますからよろしくお願いいたします。

先

よろしくというのは……。先生の方から結局色々でしたからそのことをよろしく願いますということとで、まあたとえお互いに努力しようとか言うことが出てきたと思うのです。

先

ただね、この座談会の主旨がよくわから

なくなってきたが、クールの座談会というところで、テーマも何も知らないで気楽に僕は全く個人の資格で出席しているの

で、個人として僕は責任を持ちますけど、ただほかの先生方にこうすべきだということをや要請する立場ではない。

A

ちょっと失礼しますけどそれは……。

先

私は職員の代表できたのならね……。

A

そのことは私達にはわかっていて、職員会の代表できたのならここで色々なことを約束してもいいのですけど……。

先

生徒指導部には生徒指導部長がいるわけなんです。部長が生徒会があればひとみなさんでくれというのが筋道でね。指導部長には言いますこういう話合いがあったということのためにこういう会合をしたということ……。

D

学生の権利というのは言いたいことを言つて一応先生方に納得してもらわなかったら何でも話合つていうことで……。そういうことは昔、いえ、ずーとまあかと言われていることで結局ガタガタいつたて……。

A

結局、信用がないんですよ、そこで結局生徒が信用していないということで、何

回いつても無駄だということ、ほとんど暗黙の内にそういう傾向が生徒の内で作られているのです。

先

やっぱり相互間のね、生徒と職員の間とか生徒同士の間相互信頼が大切だと思う。ゴタゴタがおこる場合、言つたらおそらくためだと言うだろうと、そういうのが先に立つ場合が多いんじゃないのか、言つたつてどうせ無理だろうとか、あの先生の所へ行つたつてどうせこう言うに決つていいるというようなさじを投げ

A

それはおかしいですね、僕らはやはり教えてもらうという立場があつて先生を信用してないといふ、また先生は生徒をよく知つていないと、そこで一つの知識のやりとりがおこなわれているわけです。それがもし高校の現状だとしたら、どっか全然おかしいんじゃないんですか。

先 A

おかしい以上に恐ろしいよ。そういうことですよね、信頼しないと言ふこと、相互信頼がないということはあるいは言い方がちょっとオーバーかもしれないけれど、全然先生を信頼するしないのことよりも先入観を持ち過ぎるんじ

やないか。

A

それは先入観を持たれてしまつた先生方にも責任があるんじゃないか。

先

それはまあお互いに責任はある。人間関係というのはお互いに責任を持たなければいけない。

D

権利と義務に疑問を感じます。それはなんとかなければならない問題です。信用をつける……。先生も生徒も信用しあつていれればおきなかつた問題だ。そんな事を言つた立場世界中の人間を、刺激することになる。だからなぜこんな学校で問題が起きると今まで信用しあつていない。

C

それはル・クールで公報を書いたのだけれど両方で信頼しあえば問題は起きないのではないだろうか。

先

信頼という言葉はなかなか難しく僕もうまく正確に使えないが、それよりも誤解が多い、相手を信頼しないあの先生を信頼はできないというほどの先生はいるわけではない。そこまでいけばよいが、そのだいぶ手前で止つていて、誤解がかなり多い、弁論大会にしても私は問題があつたと思わない、この原稿を見せられ



てやつちやいけなと言われたわけでもないし……。ただそこでは話に花を咲かせたと解させても仕方がない。

先 A 検閲の見解の違いが出てきたわけです。

先 このテーマでは結局私では結論はでない。

終



世の中をまじめに考えたことのない松原高校生徒の多くは、松原高校教師を軽蔑しています。何故なら、それが真の松原高校生徒となる条件の一つだからです。校内インタビューの結果によりますと、彼等の多くは、学校に来るのも、勉強するのも義務であると考えているのです。そして極端な例ともなりますと、父母の保護と学校という束縛の中で、まったく自分の意志というものを失っているのです。それが意外と多い事は、私びっくりしてしまいました。でも今年度起こった事件、あるいは生徒会活動を見ても、多分にうなづける点がありました。では、何が彼等をそうさせたのでしょうか、私は、その一部に、今まで何の非難もされないような、私達が恐れている。教師の姿が、そこに浮かんできると思っています。教師が何かしら生徒に圧力を加える際、知らず知らずのうちに、そういうふうにならざるを得ないという意識を、さらに、何もやらないんだという意識を、さうにしてしま

ったのではないのでしょうか。

弁論大会について座談会では、生徒と教師の間で、弁論大会そのものの意味に解釈の相違があることがわかりました。それは互いに話し合いが少なかつたからでしょう。しかし教師側（あるいは学校側）が主催して毎年行なっていた弁論大会に、どうして生徒が違意味をあらわしてしまつたのでしょうか、つまり弁論技術の教育に毎年専念されている先生方の弁論大会に、内容本意の生徒の主張、あるいは研究発表というふうにならざるを得ないというふうな状況が、学校行事というもののや、本当の生徒の教育というものを、文化部や生徒指導部に押しつけていらつしやるのか、またはそのような事にならざるを得ないというふうな状況が、あたかも習慣的になつていらつしやるからだと思います。それは、あまりにも事務的な責任感しか持ち合わせないようになつた、教師の怠慢であると思ふのです。

では教師側だけに責任があるのかという点、勿論そうではないのです。義務教育を終え、ある程度一人前になつた私たち生徒がいくら教師に信頼感を持っていないからといって教師に懐疑的になつて、かたくなに閉じ

込もり、教師から幾らかでもはなれていようという態度は、お互いの誤解を深めていると思ふのです。もっとも教師の方でも生徒側と話し合おうという態度がものすごく欠けています。弁論大会を例にあげれば、弁士側と生徒側のその態度に、文化委員会が間にはさまれ、苦労したことは、職員会議に弁論大会を再度持ち込んで苦労したとおっしゃる文化部の先生等、尻にもならない程でした。

さて座談会ではその他、高校生の政治的言動あるいは行動について、宗内先生個人としては、グルーブ的な発言ならかまわないが、生徒に多大な影響をあたえるような場所での極端な発言はかまうとおっしゃいました。では何故いけないのでしょうか、文中の生徒のような質問あるいはもっと深く掘り下げた質問や怒りが、あなたの頭の中をうずまきでしよう……。

また「言いたいことを言う」という言葉や弁論大会そのものについての解釈の相違が明らかにされました。（もっとも前から解つてはいたのですが）前に述べたことも合わせて、教師と生徒の話し合いが必要であることがよく解るでしょう。

検閲については宗内先生と生徒の間で見が対立してついに座談会では結論が出ませんでした。何せ、宗内先生は専門外だし、生徒も法律的なゆずれのわけもなかつたのですから。そして割合と意見が合つたと思うのは学校側の行なつていたような弁論大会はもう不要なのではないかということです。来年度はそのことも重要な話し合いの題となることでしょう。

私はまったく馬鹿ではないでしょうか、というの、私は特集の題にあげた「生徒の権利と義務」というのを忘れて、ここまで書いてしまつていたのですから、つまり、私は題にあげたことよりも、権利を主張する前に、また義務で押えつける前に、もっと大切なものを、それこそ忘れていたからです。

もっとも根本的な問題は、やはり、生徒と教師の話し合いがないということと、両者の相互信頼・相互理解のなさということでした。しかしその事は、日本国的高等学校の（あるいは日本国の教育全般にいえることかも知れませんが）どこでも、また、昔から言われていることで、両者からどうしてか敬遠されているようです。ですが、この問題を解決しない限り、生徒も教師も互いに誤つた考

えを持つて、またイヤな思いをして、人生の一部をすごさなければならぬのです。人生の一部といつても、それ以後の生活・思考に影響することは言うまでもなく、またそれから高校生活をおもしろく楽しいというイメージから遠のかせ、頭に来ちゃうような大学準備校化の道を歩ませることになると思ひます。

ところで、その教師と生徒の間柄で、まったく申し分がないというのか、我々に不思議とさえ思ふ程の事が、朝鮮高校を訪問した時に起こつたのです。何と言つたって彼等には「生徒の権利と義務」などという言葉が考えられないのですから、なぜでしょう……彼等には、国を立てるといふ信念と、革命的精神が、また同国人としての意識が、教師を同胞という感覚でとらえていて、そこで教師も生徒も一体となつて、すべてに向つていてという感が、私の腐り切つた心臓を熱っぽく刺激したのでした。

彼等には生徒が権利を主張するということが解らないのです。

そして、我々は権利を主張し教師に反発する。教師としては生徒を信用していない。私は本當の教育とは何なのか、考えてるうちに眠りこけてしまいました。



# 創作



## 転落の後

米矢久美子

その日は、私は早々と学校を引けた。理由は他でもない——私の持って生まれた病のためであった。

——いつ私を襲うかわからない激しい目まい・少しでも精神の安定を崩せば起る動悸。今日も結局は、激しい目まいに襲われ、学校を出されたのであった。私はいつも心を静かにしていなければならなかった。もちろん強度に体を動かす事も出来なかった。私はそのた

活気をおびるのは夕方頃からなのである。だから人通りも少ない真昼間から黒い制服なんか着て、のろのろ歩く私はいやに目立った。この路に立っているイチヨウの木はほとんどが黄色くなっていた。

これが今日みたいな灰色の日には（普段は、たいして気にもしない事なのに）その黄色があまりにも不調和な程目立つ。しかし、私はその木の一本一本、黄色になりかけた葉の一枚一枚に気など使う事はなかった。一枚一枚よりは一本一本、そしてそれよりは群をなして立っている様子に少し心を動かされた。ただそれだけなのである。

この様な日に限ってこの路が、おそろしく長く感じる。どこまで行っても駅がないのはあるまいかと等と、ありもしない様な事が頭を持ち上げる。いっそ走ってしまおうかと思った。しかし、その次には、もう一人の私があわててこれを否定した。そんな事をすれば、今度は目まいくらいではすまされなくなるのだとこうして歩いている今でさえ、ひどく息ぎれがするの。

やっと駅についた。私はおぼつかない足どりで構内に入った。すぐ電車は来たが、そのまま乗る訳にもいかなかった。いつもの様にベンチに腰を下し、少し目を閉じて休んでいればじきに息ぎれは、止まるのである。看護室で寝かされたものだから今度は急に座ると頭痛がして来た。その様にして十五分くらいたつと、今まで校門を出て今になるまでの肉体的にも精神的にも不快だったあの私が、何故かずっと昔の事を思い出している様に思えた。もう気分さえ良くなれば、このまま黙って引き返すのが急におしい様な気持ちになった。きつとまだ私の心の奥に学校に戻りたいという気持ちが残っているからなのだろう。こんな所で、ぐずぐずしているのもまた妙なものであったが、遠くの信号の色が変わり電車が来るのがわかった

め幾度となく学校を引け空しさを持って帰らなければならなかったのである。私はフト、私の背にある校舎の事を考えた。今ごろ教室では授業が始まっているだろう——教師の顔・声・黒板を全面に使い、生徒に向かう様。クラスメートはどうであろう。一人一人がまるで手に取る様にわかる。しかし空になった私の席の事が頭をよぎると、激しい虚無感に襲われる。そこで私の思いをめぐらす事は終わる。いつもそうだ。私は自分の立場を幾度も考える。この学校においては全く居ても、いないのと同然じゃないか。病欠のレッテルを貼られて教員室を出入りする私は、自分でもいやになる位多いのだ。一年生の教室からはよく通る教師の声が聞こえて来た。これじゃあまるで他の学校をのぞき見しているのも同然だな——私はこう思うと、苦笑した。何とはなしに校庭をふり返ると灰色の空めがけて投げられたボールが馬鹿に白く見えた。私はカバンを横に持つと逃げる様にして校門を出た。幸い誰にも会わずホッとす。別に早々と学校を引けるのが恥しいわけではなかったが、こんな楽しくもない気持ちで帰る時は、たとえ知らない人間であつてもこの学校の中にいる人間に会うのは、耐え切れない位息ぐるしい事であつたから。

校門さえ出てしまえば少しは心が軽くなる。校門からずっとイチヨウの並木になっていて、まっすぐな路が三百メートル程駅まで続いている。私の学校の生徒のほとんどがこの路を唯一の通学路にしているのである。その両側にはずっと商店が立ち並んでいるのであつた。別にゴミゴミとしている訳ではなく、環境としてはそう悪くもない。商店街とまでは言えないかも知れないが、私たちの普段に必要な物ぐらいい間にあうし、この街（通り）が本場に商店街として

時、私はやはり家に帰ろうと思った。

電車を降りると私は、さつきより風が強くなっているのに気づいた。それほど寒くはなかったが電車がホームを出る時背中が一瞬冷くなった。改札口を出てしまうと、どんなにゆっくり足を運んだとしても私の家の玄関まで十分もかからなかった。そこから、まっすぐに歩けばよいのである。もう五年間通学した路だ。目をつむってだつてわかる。私は訳もなくホッとした。同じ路にして駅から学校までのあのうんざりするくらい長つたらしいあれよりはるかに私は好きだつた。第一あの殺風景な商店街のかけらもない。もちろんあつて欲しくはない、ごく静かな住宅街である。それぞれの家の庭には木がある、五葉松・柿・桜・黄楊等々様々な匂いを放ち、本当におだやかな気持ちになつてしまふのだ。今の季節には、家までの路の両側には柿の木がまばらにある、まだあの朱色までには染ってはいないが、本当に秋なのだと思わせる。そのうち幾個が不信な者の手によって落とされるかは知らぬがとにかくその様に静かで人通りも少ない路を行き、しばらくすると私と母との二人暮らしの小さな城があつた。門の押し戸の鍵をはずし玄関の鍵をあけたが中には誰もいなかった。いつもなら奥から私の声を聞いて母が出て来るのであるが今日は、私が早すぎたため中には誰もいなかったのである。私は靴を脱ぎ捨てて上ると、少し迷った。が、やはり台所へ行く事にした。空腹にはどうしても勝てそうもなかったから。

私は、手早くごく簡単に食事をすませると、カバンを持って私の部屋に入った。まだ十時半であつたが急に安心したせいもある、体中の力がぬけて行く様であつた。私は机の上にカバンを置くと、すぐに詰め襟のホックをはずした、上着を脱ぐと急に背中が軽くな



った様であった。部屋に入ると冷え冷えとしていた空気が暖まって来たのがわかる。わずかに四畳半の（ただし板の間）小さな部屋ではあるが私にとって唯一の城である。この部屋の物はすべて私のみが所有する物ばかりである。机も椅子もベッドも彼らは私の匂いの他は今だ誰も知らないものである。机の前の窓がさしあたって、物見の塔であった。机の前に座れば、目に入るものは窓のすぐ傍にある楓と雲とプロックの屏であり、物見台―机の上に乗れば隣の庭までが見えた。しかし、私にとっては隣家の庭がどうであろうと、その様な事はどうでもよかった。すべてこの窓の外にあるものは偶然にそこにあつて、私の窓がたまたまそこにあるだけ、ただそれだけであつた。この部屋は私の他に母が時おり入って来るだけで、幸いに不法侵入者は今だかつて一人もいなかった。多分他人が見ればうす暗いいかにも寒々とした狭い部屋にしか見えなかったであろう。私には見てくれがどうであろうと私の物であるから別に不足な事は一つない、確かに装飾もない。あると言えどアをあげて入った時、一瞬、目に入りその後は忘れられてしまふ程の小さな石膏のレリーフがあるだけで、この部屋を明るくする様な物はない。

私は何をしようかと思つたが結局は二・三時間寝る事にした。どうせ母が勤めから帰って来るのは五時過ぎるのであるし、帰ってすぐに机に向う気にもなれなかつた。そう思えば何も考える事は無い。そのままベッドに身を沈めた。寝ようと思つてももう明るくては―等と口の中でくり返していたが、天井の木目を見ているうちに私はフト遠い昔の事を思い出した。何故かわからなかつたが、ずっと昔あれはいつだったか、この様な気持ちになつた事はなかつたのか、ちやうど今日の様に曇つた日早く学校から戻り、こうして今と

全く同じ状態の中で、あお向けになつて天井を見ていた事は……。思いをめぐらしているうち私は子供の頃からの事を考えていた。今さらこうして思い出したとてどうなるものではないが。私は一人になると必ずいつかは私自身の事を考えていた。知らず知らずのうちに。何故そうなるかは自分でも不思議であつたが、結局私が父も知らず今日までになつたのだ―と思つてゐる。

私は四十をとうの昔に越えた母と二人暮らしであつた。私は生まれて一度も父の顔を見た事がなかつた。というより名前すら知らなかつた。私は母しか知らない、私は子供の頃から誰とも遊んだ思い出は一つも持っていない。忘れてしまつたからではなく、私は誰とも遊んだ事がなかつたからである。近所の子供達は口ずらさいた事もなく顔もまともに明るい陽の下で見た事はない、生まれながらに体が弱かつた私は家から一歩も外へ出なかつた、母は出さなかつた。私も外へ出ようとはしなかつた。思い出と言えどその間に読んだ絵本の絵ばかりである、それがおそろしいくらい頭に焼きついてなかなか離れる物ではなかつた。ほとんど明るい色で描れた可愛い動物の絵ばかりである。私がごくたまに外に出ると人はよく私にこう言つた。

「お父さんは？」

「いないよ」

「どうして？」

私は少しとまどつた。何故なら、私には生まれた時から父はいなかつたからだ。どうしていないのかそう聞かれたらね、母は私に幾度も言つた。

「死んだ」

私は母に言われた通り大きな声で言つた。もちろんその頃の私は、  
「死んだ」という言葉が何を意味するのか知らなかつた。何故にないのか―と考えるより「シンダ」という三つの言葉が私にはごく安易だつたからである。父がいけないのは不思議ではなかつた。私の中に父の存在はなかつた。私の中では父は本当に死んでいたのであつた。だからその言葉がいつもすらりと出た。舌は反射的にそうしか動かなかつたからである。よい言葉か等は考えた事があるはずがない。それだけ言えはよいのである。後は何も言う事はない。そう言う

と見ず知らずの大人は私を何となく見回し、その言葉を聞くとも言わず行つてしまつた。いったいその人間は私に何を言わせたかつたのか私は、ただぼんやりとその後ろを見ていた。私にとっては外界とは、ただこれだけのやりとりしかなかつた。私は子供ながらにそれは、自分にとって決して良い物でないという事をさつた。それだけで終つた訳ではなかつた。それはまだほんの序曲だつたのである。私はこんななじみぬ言葉に迎えられる外へ出たのであつた。すべて目に入るものは、めずらしかつた木も草も。木は知つていた草も。しかし、それまでの外界はすべてガラスを通していくらか光を柔げてから私の目に入つた。外界の物の色は知つていた。しかしその物の持つ匂いは知らなかつた。そして私は育つた。そんな世界に出て、初めに私を打ちのめしたのは、お父さん―という言葉であつた。決して耳に新しい言葉ではなかつた。その様な言葉は知つていた、絵本には必ず二つや三つあつた。しかし母からその言葉は一回も聞いた事はなかつた。私も聞く理由なかつたからである。それを私と同じ年の子供の声で私の耳に入つたのはこれが初めてであつた。これが現実存在するものとして耳に入つたのは

これが初めてだったのである。私はその言葉を聞いて幾度も不審そうな顔をした。

「お前 お父さん知らないの？」

半分はからかう様な、不審な物の含まれた言い様であつた。私にその聞いた子は、私が全く別の世界からやつて来た様に思つたからなのであろうか。

「どうして？」

「いないんだよ」

その子はこれだけしか言わなかつた。そして気味悪そうに行つてしまつた。そしてその次の日も同じ事を聞かれた。今度は女の子であつた。

「あんた お父さん知らないの？」

「うん」

「なんで知らないの？」

「いないんだもん」

「どうしてよ？」

「死んだ」

「じゃああんた 親がいないの？」

「うんいるよ」

「うそばかりよ」

「僕には……お母さんがいるよ。お母さんしかいないんだ」

「あんたって馬鹿ね。お父さんとお母さんと二人を親つて言うのよ」

「ちがうよ僕は生まれた時からお母さんだけなんだ」  
私はこんなふうになつた。これが女の子なのかと思つ



た。ハッとした、この女の子に言われるまで何故気が付かなかったのだろう。確かにそうであった。どの本にもお父さんとお母さんがいた。兎も象もキリンも……私は幼いながら何とも言えない悲しさに襲れた。それは「父」という物が私になかった悲しさではなかった。それ以上に何か皆におくれを取った様な気になっただけである。一種の劣等感にも似た物であった。目の前の女の子はまだいた。手を腰にあててそり返っていた。私は訳もなくおどした今までこんな気持ちになった事のない私だったから。そして気がつくとその子だけではない、その取りまきが寄って来た。みんな私をなぶる目つきに変わりはなかった。

「じゃあ 父なしね」

私がたじろいだのを見てその女の子は、けたたましくいどんできた。その言葉がいつそう激しく私を困らせた。

「あんた ババって言ってごらんさいよ。」

「言えないんですよ」

子供の無邪気な残酷さが私を打ちのめした。私はこれが女の子のお喋りなのだと思うと激しい嫌悪を感じた。それぞれ違っていた小生意気な口吻、そんな物がすべて私を圧しつぶしてしまっていた。最初私をあまりの驚きがぼんやりとさせた。しかしこれが他の子供なのだと思うと私は次におこる事を考えた。きっとこの女の子は私をさんざん痛めつけあとは自分の家来にでもするのだろうと今までそうだった光景は充分見てきた、結局口の強い鼻柱の強い女の子がこうして自分の上部の強さで他の子を圧倒してしまうのだ。それが何よりには、その囲りの女の子のへつらった様な目つき、私は嫌った、こんな悪党に負けるなんて……。さっきの目つき

たったあれだけで、もうどうしようもない気持ちにかられた。たったあれだけの紙きれが私をこんなに変えてしまうなんて、私は知っていた「不義の子」とレッテルを貼られて見られる人間の哀れさ。私は自分を激しく非難していた。私は何と愚かだったのだろうか。物に対する見方も一変した。どんな食しとでもいい、父が欲しかった、それは単なる自分のわがままからではなく本当に自分の立場を確立する為であったからかも知れない、私に相手かまわず腹を立てた。それが私に何のかかわりのない事であってもむしろにいらせすにはいられなかった。そして今まで考えていなかった世間体を考えた、果してとれだけの人が私の本当の事を知っているのだろう、今の所まだ組の人間は誰も知る訳がない。そう思うと少しは安心した。知ってしまった今となっては、誰もどうする事も出来はしない。そして最後に私の怒りをぶつける相手は「父」なる者の私が勝手に造った虚像であった。勿論、顔も名も知らない、母は今だからその事を私に言うてはくれない。その母は私にはあまりにも哀れに見えた。何も母だけが悪いのではない、母はどうしても憎む事も、軽蔑する事も出来なかった。十五年間世間の目を忍んで耐えてきた母は一度だって私をみじめにさせただろうか。私に悲しい思いをさせまいと必死になっていた母は何と強かった事か。私を生んだばかりに世間はおろか母の親類の者は母を葬った。そしてただ一人私をかかえて渡って来たではないか、「お父さんは？」という言葉に、もし私に本当の事を言えば私がどうなるか知っていたのだ。残酷な質問の裏には、最も弱い人間をあざ笑うものがあったのだ。母の事を思えば私の自分自身の葛藤などまるで物の数ではなかった。私はあんなに憤った自分が恥しくもあつた一番苦しい思い

さが、かえって逆に私の生まれながらの傲慢さに火をつけた。

私は帰るやいなや、すぐに母のところへ飛んでいった。私が何故、この様な事を言うかわからないといった顔をしていたが、母は急に泣き出した。私は母がこんなふうにするのはわからなかったが、訳もなく私も泣き出した。母をこんなふうにしたすまなさで一杯であった。母の腕の中でそっと母を見上げた時、頬を伝わって行く涙が驚く程透明だった。こうして私はまだ何も知らず十年をすごした。それまでは理由なく私の父は死んでいたのであった。中学を終る頃、高校を受験するため私は戸籍抄本を取ってすべてがわかった。目の前が真暗になった。すべて前まであったものは、ガラガラと音を立てて崩れていった。私は何と馬鹿だったのだろうか、今まで父は死んだものとはばかり思っていた。私は私生児だったのだ、すべてが恨しかつた。私は十五年間悪夢を見ていたのだ。今さらになって思い出される事はすべて、私自身の何も知らなかった恥しさの上あの知ぬ大人が私に何を言わせたかったのか今になってようやくわかった。何となく私を見回した目つきが私をつき下していった。小学校へ入学当初のあの事がまるで水に絵の具を下した時の様にはあつたと広がった。あの小生意気なスズメ達め、その中で何も知らず意地を張った自分が何と今になって馬鹿に見えた事か。私は一変した様に思えた私自身が、そして外界が、これから私はどんなみじめな気持ちで生きて行かなければならないのだろうか。あまりにもひどい、私はあれからだ。父が死んでしまっているという劣等感にしばしば襲われ、必ずそれがついてまわっただけではなかったのだ、私が理由はともあれ陰の子として世間から葬られる姿を思い浮べたそれだけで、もうどうしようもない気持ちにかられた。

をしてきたのは母なのだ。

「僕には何故おやじがいなのかわ分つたよ。」

私が何事もなかった様に言うとお母は泣き出した。私は別に悲しくもなかった。これでいいのだと言いきかせた。それきり私達二人の間から父親という概念は完全に抹殺された。私は自分でも止めようにも止まらない性格の変置を認めた傲慢さと、疑い深いのはむしろ宿命的なものかも知れない。ただただ私は自分を強くしようと思えば思う程、それらは増すばかりであった。私は考え方が変わった何をするにしても私は……と思う考えが果を作っていた。それは悪い物かも知れなかったが私にしては自己の自覚がそのみに頼る他ならないものなのだ、そう思っていた。私は今より自分の中に引きこもりがちであった。そして私には呪わしい病がついて回っていた。

私はいつまでもそのままでの姿勢でいた。この部屋に入ってから横になってからまだ十分もたっていないのだろうと思った。今までに考えていた事は決して今日が初めてではない。常に考えていた事なのである、私には考える事といったらこれの他に何もなかったのである。学校はもちろん楽しかった。ただ私の貪しい心をいやす唯一の場である。後は一人になって本を読み、心を昔に返すのであった。それから私は横になりながら音楽に没頭した。私は不思議だった七つの音が組み合わさって人をこんなに魅惑してしまうのかと幾度も思った。その時は誰にも気がねはなく伸び伸びとしている事が出来る。私にはすべて充分に満たされたところと、全くそうでないところを持ちあわせていた。それが非常に表に出た。性格もそうであった。行為も人に接する態度も私には正直なところをおさ



える事はとうてい不可能な事だという事がわかっていた。自分でも恐しい位冷酷なところがあった。本当の意味の親しい友人が出来ないのはその為であったのだと思う。それは決して友人やクラスの間が嫌いだからではなかった。ただ不思議に私が自分をむき出しに出来ない何かを阻止していた。偶然のきっかけで話し相手は出来、数人程いる。しかし親友はいなかった。特に言いたい事を言える人間が見つからなかった。皆が関心を寄せる事に関心を持とうとすると妙に息ぐるしかつた。特に私は異性に對しては全く自分でおかしいのではないのかしらと思うくらい無関心であった。それは話をするのはいやではなかった。が、心の奥には昔受けた古傷が潜在的に私をその様な事から遠ざけているのだという事に気づいていた。それはそれでよかった。何も欲しくない花を持たされた時少しもうれしくないのだから、私をすべての悩みから救ってくれる程の人間もいなかった。それは高望みだと言われて笑われた事もあったが私には異性とはそんなものだと思っている。要するとそれから来る、よけいな悩みが私をがまんさせる事はないだろうと思つた。その上私はよけいな事に気を回す性分でもあった。自分が感動した事を相手がどうであろうとむりにおしつける事を避けたというより私には、相手が何を考えているか見抜く力があつた。自分の本心をそのままにして話し合える相手が欲しくない訳ではない。しかし無理に無理に意見を一致させるのはいやであつたし、相手の意図するものが月並みなものであつたならば私は頭からそれを否定せずにはいられた。ある意味ではうぬぼれが働き私は常に精神的には一人であつた。努力をすれば友人を作る機会には幾度もあつた。私が何か言えばすぐそれに乗つて来たし私の考えはいつも優遇

された。しかし自分を殺してまで人に愛想よくはしたくはなかった。傲慢な私はそれがどうしても出来なかったのである。私はその最終的な判断は私が異端の子であるからだという方向に持っていた。それだけしかなかった、実にずるい逃げ方かもしれないが、私の立場が精神的にどんなに損失であつたかといやになる程考えた。これこそ、同じ物を見るにしても同じ様に見える事が出来る気持ちを不可能にしている。人生におけるちがいである事かもしれない。たとえ他人と結果は同じ様に得られたとてそこにたどりつくまでが全く違ふのは疑う事が出来ないであらう。私は今まで他人の中にあつて忍耐と寛容を持つて接した事はあつただろうか？ 平静なふうを装つて表面をつくらう事は知つていた。それは生長する間に与えられた私の特技にも似たものである。もちろん感情のとりこになる事は知つていたが、その次に働くのは口元に浮ぶ冷やかな笑いである。大抵の場合落着き払い感情は外に出したがらなかった。私はその上沈黙がどのように利があるか心得ていた。沈黙をじつと守つてい

も漠然としていて私にも捕える事が出来なかつたのであるが、それは私の理想のすべてを含んでいた。私は物をより完全なものに見ようとする時にはその理想をとり出した。そして自分にとり入れた。それがせめてもの慰めだったのかも知れない……。

私はいつ果てるともない考えに夢中になつていたが、この分ではとても寝れる事が出来ないのだと思つた。かえつてその方が楽しいかも知れない。しかし私は一瞬身の硬ばるのを感じられた。また激しい動悸が私を襲うのだろうか。何故？ 私はあせつた、出来るだけ静かになろうとしていたがそれはますます逆の方向へ持つて行くばかりであつた。息切れがして来る、私はこの身が動かなくなつてゐる事には気づいてゐた。どうしても身を動かしてはいけなという潜在意識が私の体を硬化させていたのであつた。耐える事の出来ない恐しさ、このまま死ぬのだと思つた。きつと私は死ぬ……ああ……何と情けない。胸の上に何か重いものがのしかかつてゐるのではないのかと思われくらい重くなつて来た。顔がカッカツとほてり、耳鳴りがして来る。身をのぞけらすとますます硬化は激しくなるばかりであつた。精神の安定どころではなかつた。これが私の恐れていた発作の現われであつた。私は自分の体の各部がどうなつてゐるのかわからない。ただ頭の中で何とかこれを止めようとする意志だけが働いてゐた。そしてその意志を意志として感じさせる物のまわりに

力とはこんな物かと思わずにはいられた。そして、その手があまりの苦しさに空を握んだ時、目の前が一瞬暗くなった。それからどれくらい時間が過ぎたのかわからないに神経が活動を始めた。硬化した体を無理に動かそうとする意志と、それを止める意志が互いに私の頭の中でぶつかつてゐた。しかし、その中点はほんやりとしている様であつた。こんなに苦しい時、頭の中のありもしない様な事が何故こんなにはつきりとわかるのだろうか。そしてその点が徐々に幅を広げていつた。それと共に正面から対立していた物は互いにおだやかになつていつた。そして呼吸も楽になりあんなにひどかつた胸の圧迫感もスーと薄くなつていつた。そして意識をとり戻していつた。その時間は極わずかであつた。おそらく一分もかからなかつたであらう。私は目を開いた。別に何事も起こらなかつた様だ。私は大きく息をついた、さつきまで硬直してゐた体は本



なった私は自分がどうなっているのか考える位の意識はあった。しかし、もうろうとした頭がそんなに鋭く働くものではない。そう思った時急に力が脱けて地の奥へ引き込まれる様に私にはこれから何が起るのかわからないまま気を失っていた。

それも少しすると私の耳に入って聞こえた音が、神経の活動をよびおこした。最初は何の音か見当がつかなかったが、かなり規則的な音である事はわかった。しだいに聴覚がはっきりするとそれが単なる音ではなく旋律を持ったものである事が、そして更にその音が木管楽器から発せられている事だと思った。はて？　どこかで私は耳にした事がある。何だったか……確かこれは序曲……いや組曲……組曲ならこんな曲の始まり方はしなかったはずだが……。ああそうだ、思い出した、交響曲だ、題名や作曲者は思い出せないけれどもかなり長いラルゴの序奏——私はフト体が動くだろうかと思った。その昔の旋律がしだいにはっきりして来るうち急に私の今こうしている場所を見ておきたかった。そっと目を開くと目の前がぼんやりとかすみ、何があるか、いったいここはどこなのかは全くわからなかった。この空気の匂いや、光の具合は少なくとも私の部屋でない事は確かだ。すると私はあれからどうなったのだろう。私の部屋は、それから私が倒れたのはベッドだったのに、頬にさつきからしきりに触れているのは、シーツや枕ではなく、しっとりとした水気を含んだ草のようだ。目の前がしだいに明るくなってくると私は全く見た事も無い広い野に倒れていた。静かに身を起すと、私は囲りを見渡した霧がかかっていて、遠くまでは見えなかった。私はひどく長くここに倒れていたらしい。ワイシャツや髪が冷たく濡れていた。今私の目に入る物といったら私の囲りの短い草と霧だった。そのむこうには

何があるのか知らない。何の気はなく上を見ると空はなかった。ただそこも灰色の霧がたちこめていた。それなのにこんなに明るいのは何故だろう？　それに私はいたいどこにいるのか全く見当もつかない。何だって私はこんな所へ来たのだろう——いや誰が私を連れて来たのだろう。何と言おうか、不思議だ、実に不思議な事だ。それなのに私は恐いとは思わなかった。不安だった事は言うまでもない。しかしその気持ちに反する様に変な冒険心にも似た憧れがあった。ここからどうやって私の家まで帰るのか等という気持ちは毛頭なかった。それよりは霧が晴れるまでここに座っていて次に何が起るのかこの目で見えておきたかった。私にはここが危険な場所ではないという事が本能的にわかる。自分が引き戻せない事も知っている。何故だろう？　しかし気を落ちつけてよく考えて見ると、私はいつだったかこんな気持ちになった事はあった様な気がする。どうして、こんな時にこんな事を考えられるのか、私自身不思議だった。非常に落ちて着いている事は私自身納得が行かない。それなのに必要になって逃げよう等という気持ちは少しも起こって来ないのである。何もそう逃げようとする事はないじゃないか、もしあれからそのままこまで来てしまったとするならば少しも恐い所ではないだろう。私はこうして座っていると、何故か心が落ち着いて、こんなに安らかな気持ちになったのは初めてだ。この空気の匂いは昔聞いた事がある。それがかえってなつかしさを呼びよせてくれるらしいのだ。私はこれからずっとここに居るのではないのかと思う。風が出て来た。もう霧が晴れて行くのが何となくわかった。それでも私はずっと座ったままであった。そして目瞬きもせずじっと目の前を見た。さつきとは全く何の変化もない。そこはただ広い野であ

った。丈の短い草が見る限り生えていた。そして広がっていた。どの草も霧を含みしっとりとなびいていた。霧には草の匂いがあった。少なくともそう感じられた。そしてなお目の前を見続けてゆくと灰色の霧が集まっているその後ろにぼんやりと白いものがあった。その白い物は何であるかはっきりはしないがしだいに大きくなって来た。こちらに近づいて来るらしいのだ。私は座ったままであった。目のはつきりと見える様になったのかも知れない。気がつく私のすぐ横に立っていた。私はびっくりして見上げるとそれは白い長い衣をまとった女だった。その物いや彼女と呼ぼう。彼女は私をじっと立ったまま見下した。長い髪の子だった。

君は誰？

私は思わずそう聞くと彼女は答えた。

私？　誰だと思ってる？

そう言うときとるすべり込むように私の横に腰を下した。そして私の方を向いて微笑んだ。

——そんな事を聞く前に、ここはどこって仰るかと思ったわ。

——じゃあ、ここはどこ？

——知らないわ。

——何故？　ずっと君はここにいたのではないの？

——昔からじゃないわ。私は名前もないのよ、それから何故こんな所にいるのかも知らないの。

——どうして？

——そんなふうに聞かれると困るわ、私　本当に何も知らないのよ。

——ここに居る事は恐くないのかい？

——恐い事なんか無いわ。貴方だって少しも恐くなかったはずよ。

——どうしてそんな事を？

——私にはわかるわ、以前からずっとここへ来たがっていた事も、それから普段考えている事も。

——僕が？　以前からここへ来たがっていたって？

私は横に座っている女の言葉を疑わずにはいられなかった。そして馬鹿な事だと笑った。何故私がこんな所にいるのか不思議でならなかったのに、そして私は彼女を見た。一度も見た事のない女だった。自分のいるここでさえ知らないというこの女はいったい何物なのだろうかと思った。私は何故こんなところで訳もわからない女とまるでとりとめもない話をせねばならないのかと思うといら立たしかった。不快感ともつかない腹立ちがあった。しかし横にいる女を見ると変な未練があるのだと思い、あわてて否定した。そんな事を考えているとついそれが顔に出てしまったらしく彼女はそれをすばやく読んだ。

——私こんな事は言いたくないけれど、貴方びっくりなさっているのでしょう？　知らない間にこんなところに来たので、でも貴方が悪いのではないわ。貴方は何も知らないのよ、だからそんなに驚くのね。でも何故こんなところに居るか自然にわかってくるものよ。私が誰かっていう事も、

彼女はじっと横から私を見ていた。私は黙っていた何も言いたくない。私はきつと誰かに勝手な真似をされているのだと思った。知らないうちに、こんなところへ運ばれて二度と家には帰れない様にしたのに決っている。そうだ。きつとそうに違いない。この女だってそうだ。あたり前の女ならこんな中途半端な物の言い方なんかする



ものか、

——僕には全く君の言っている事がわからないんだ。残念だけれど。これは嘘なんかじゃない。ただ覚えていられるといったら僕の部屋で倒れてしまったまでの事だけなんだよ。それからどうなったのか知らない。気がついたらここに居たんだ。頼むから言ってくれないか、いったいここはどこなのか。君は誰なのか。どうして僕をこんなところで連れて来たのか。

私は必死の思いであった。というのも急に不安になったからだ。さつきはあんなに落ちついてたのにこの女があらわれてからは妙にいらだった。今の私がずっと私らしい。彼女は両手を膝のところで組み下を向いたまま首を振った。

——私本当に知らないの。そんなに怒らないで頂だい。貴方どうして最初から疑ってかかるの？ 私は本当に何も知らないのよ、といつても無理ね。貴方はそれだけで納得する人ではないわ。でももう少し待ってきつとわかるわ。この次ここへいらつしやる時、その時は……。

彼女はそこまで言うのと立ち上った。そして少しあわてていた。

——どうした？

——すっかり私ったら喋りこんでしまったわ、もう行かなくては行く？ どこへ？

——もうお別れしなければならぬわ、呼んでいるの、貴方も戻る時間なのよ。訳はこの次言うわ。

私は踊り上って喜びたい気持ちであった。早くこんなところからは脱け出してしまいたい。私は彼女がいなくなっていく事もまるで気にとまりもしなかった。そして単純な喜びが去った後、初めて彼女

がいなくなっているのに気づいた。また霧がかかりだした。私をしないで包んで行くと私の体はけだるくなった。そしてまた身を横にすると眠りが襲って来た。

バツとして目をさますと私はベッドの上だった。私の体は冷たく濡れていた。汗ともさっきの霧ともつかなかったが寒気が走った。私は疲れた様に起き上ると大きく息をついた。興奮した後の様に私は落ちつかなかった。あたりはそろそろ暗くなりかけていた。時計を見るともう四時を過ぎていた。私はいぶかしげに部屋を見回した。私は確かに自分の部屋を見た。何も変わった事はなかった。私は今まで自分に起こった事がしばらくは信じることが出来なかった。そしてぐったりとした様に座り込むと両手で頭をかかえこみ学校から帰ってからの事をしきりに思い出した。私は今日目まいがするから早く引けた。それから帰って来て私の事を考えた。その次に寝ようとして発作が私を襲った。あのわき上る痛みや硬直した体・それに伴う恐怖感はまだ鮮かに頭に残っている。そして次に立った時激しい目まいに襲れ、気がついたら全く知らない場所にいたのだ。

私はあの時やたらに自分のいたところを知ろうとしていた。そうだあの知らない女が現われてからだ。何故あの女は何も知らないのだろう。あの場所はおろか自分の事すら知らないではないか。私はあの女の言う事がわからない全く理解する事は出来ないのだ。私が以前からあそこへ行きたがっていた？ 何をつまらぬ事を。私は一度だってあんな所へ行った事はない。それどころか心に描いてみた事すらなかったじゃないか、しかし、あの女の言う事はわかうとすれば決してわからない物ではないがそれ程の事に無駄な時間は使

たくな。とにかく私はどうしてあの様なところへ行つたのかわからなかった。それを知る事が出来ればそれでよい。何もそれ以上の事を知らうなどとは思わない。いや待てよ……。もしあれがただの夢だったらどうする？ 夢……そうだとしたら早く気がつかないか。馬鹿な事だ、わずかの時間に見た夢の事を今まで気にかけた事があつたらどうか、私は今日はどうかしている。きつとあんな臆病虫が何の事もなく悪い夢でも見せたのだろうか。何も気になんかする事はないじゃないか。ほんの一瞬の夢だ……その他に何が考えられる？ 夢なんか一つ一つにひつかかっていたら気が変になつてしまふさ。忘れてしまえばいい。早く忘れてしまおう。そう思うと急に今まで考えていた事があまりにも馬鹿々々しく見えた。

そしてそんな中で、もがいていた私自身が妙に小さく見えてならなかった。私は暗くなった部屋で明りもつけず長い事座りこんでいた。私はむしように悲しかった。何がそんなに私を悲しませるのかわからなかったが、しかし私には今まで張りつめていた気持ちがいっぺんにもぎ取られて跡もなく終わってしまった様に思えてならなかった。どうもやりきれない自分を何と腹立しくも思った。誰が悪いでもない。ただどこへ行つても私だけが一人とり残されてゆく様な気がしてならなかった。

私が我に帰つたのは外の戸が開かれる音が聞こえた時であった。自分で気がつかなかったもののもう真暗になっていた。母が始めから戻って来たのだ。私はあわててベッドをすべり下りた。足音は母に違いなかった。子供の時から聞きなれているこの足音はすぐわかる。私は急いで玄関まで出た。まるで幼い時の様だ。今までとは全く違った意味でなつかしかった。今は何かにすがりつきたい気が

持だった。私は玄関のところで立っていた、きつと私を見て驚くだろう。何と言うかしら？ しかし次に母がどうして早かったのかという事を聞いたらどう答えようかと迷った。足音が近づいて来た。いつもの様うに静かに戸があく、私はすぐ電灯のスイッチを入れた。バツと明るくなった。母の顔が驚いた様私を見た。

「まあ今日は早かったのね」

そう言うのを靴を脱いで上った。私はホッとしたり何故そんなに早い……そう聞かれたら本当にどうしようかと思つたからである。もう私の事は、母は私の生まれた時から知っていた事ではないか。それが変に私には言にくかった。

「お腹が空いたでしょ？ すぐ夕食にしましょうね。」

そう言う母は私の背を押す様にして中へ入った。私は母の顔を見て、そして声を聞くと安心した。今までの恐しい気持ちはすっかり消えてしまった。何故あんな馬鹿げた気持ちになったのだらうと思ふ位不思議な物だった。きつともう一時間もすればあんなつまらない夢ぐらい簡単に忘れてしまふだらうと思つた。

翌日、目がさめた時は本当に気持ちよかった。頭痛もしないかつた。時計を見るともう七時を過ぎていた。私は体の調子が良いものだから浮き浮きせずにはいられた。早々と台所へ行く、もう母は起きて朝食の仕度をすませたところだった。私が来たのがわかるとバツと顔を輝せた。

「今日はどうしたの？ ずい分早いじゃないの。」

私は洗面所へ行きかけた足を止めた。

「うん今日は朝から馬鹿に気分がいいんだ。」



「でも気をつけなければ駄目よ。調子にのってまた目まいでも起こしたらそれこそ大変よ。」

母は二言目には必ずこう言うのだ。私には何十回・何百回と聞かされた。これはもう慣れてしまつて互いに天候のあいさつの様にしか聞こえない。しかし、私にはそれでよいのであった。洗面所の鏡を見た私は満足だった。いつもなら青白い顔が写るのに今日は頗る少し血の気があった。何故今日は気分が優れているのか等と考えたりはしなかった。めつたにこんな気分の良い日はない。そして一瞬も私の体はすっかり良くなったのではないのかとも思った。自分でもその様な奇蹟など起こるはずはないという事はよくわかつていた。しかし気休めにでもそう思いたくなる様な事はしばしばなのである。私は考える事は決つていた。私の不健康な体の事は忘れようとしても忘れられるものではなかった。今日ぐらひはそんな事は考えたくはなかった。せめてこんな日には明るい事でも考えようと思つた。珍しく鏡なんかに向かつて念入りに髪を櫛けずつっていると、母の声がした。

「早くしなさい。学校へ遅れますよ。何をしているの？」

私は学校に着いても何も気にならなかつた。少しでも体の調子が良いとこんなに違う物かとさえ思つた。不思議に何を見ても楽しかつた。急に今まで知らなかつた世界が明るく開けた様な気がする。この分で行けば十日間は何も起こらないだろうと思つた。決められた通り薬さえ飲めば昨日の様な発作は再び襲つてはこないだろう。天気が良かった。私はこんな日に何をしようかと普段は考えた事はあまりない。いくら体の調子は良いといつても飛んだりねたりは

出来るものではないし、せいぜい長い路を歩くくらいが限度ではないかと思う。私は学校にいる時は日あたりの良い中庭に出て暖まつた。モルタルの壁に身を寄せ碧い空を見ていた。そうして一人でいるとまるで学校にいる様な気はしないのである。目を閉じると耳には周りの生徒達の歓声ぐらひしか聞こえなかつた。このまま私は空へ吸い込まれてしまふのではないかと思う。しかしそんな一種のかげ離れた空想もすぐ周りの人間の声に破られてしまつた。こうしてごく一般には普通の一日であつたが、私にとってこれほど楽しい日はなかつた。その日ほどつくづく健康でありたいと思つたことはなかつた。まるで昨日の激しい目まい・動悸なんぞ嘘の様に思われてならなかつた。学校が終わると私は少し遅くまで図書館にいた。私にしては珍しい事であつた。幾度も足を運んだのは一年前の事であつた。二年生になると全くといつて良いほどここに来た事はない。私はもともと本は嫌いではなかつたし——いやむしろ私にとつての慰めだつたかも知れない。何でも良い本ならば私は完全に一人にしてくれる。これ程完全で、しかも一番得易い孤独があるだろうかと思う。私はあまり大げさな言ひまわしは好きではないが、*「孤独」*という言葉には非常に憧れた。子供の頃から一人でいる事に何も不服を感じてはいない。一人でいる事は私にとって最初は癖であつた。そして直しようもない習慣になつた。今の私には一人でいる事は環境によつて作成された性質になつていた。決して一人でいる事を否定したくはない。むしろその方が私には向いてるのである。それは私のある意味では定まつた物なのかも知れない。それならそれでいいではないか、無理に人と和を持とうとすれば自分にはかえつて不自然なゆがみが出る。一人でいる方がどれだけ私にとつ

て良いか知れない。すべての時間を惜しむところなく考える事に回

わせる。何を考えても他人に邪魔されなくて良いのだ。それが何よりの魅力ではないか。だからといつて友人を幾人も持つ人を見て何の邪心も起こらない。あの様な人間はあれで良いのだし、何もそこに私がとやかく言う事はない。ある意味での優越感であつたのかも知れない。それが何に対しての優越感であつたかそれは私にもわからない。多分私は自分自身が完全な孤独をこの上もなく愛しているのだという事から発生したのであらう。しかしそれはうぬぼれという悪魔が見てくれの良い衣を着ている事は私にも気がつかないわけではなかつた。ここでも私は一人なのである。なるほど椅子があり、机があり、書架があり、そこにはおびただしい数の本がぎっしりとつまっているのである。その中でしきりにうごめく人間がいた。しかし私は身こそこの限られた部屋に置いてあつたが心は手にしている本の中へ、あるいはそれをはるかに超越したものの中に溶けこんでしまつていた。わずかの重みが手の中にあり、私の抑えがたい心はそこを自由に飛び回っているに違ひない。私のたった一人で過す時間はよく他人によつて破られた。もちろん腹立たしい事は言う間でもない。今もちやうどそれによく似ていた。私は自分が呼ばれている事に気がついたのであつた。ふり返つて見ると見知らぬ女生徒だつた。私は何故呼ばれたのか知らなかつたが非常に不愉快だつた。

「あの……すみませんが……。」

私は座つたまま後ろを向いてその女生徒を見た。確かに私クラスの人間ではない事は間違ひなかつた。何故か知らないがひどくうういしい目を向けていた。

「何ですか？」

「今何時でしょう？ 私の時計止まっていますのですけれど。」

私はとつさに一種の安心感めいたものに浸された。そしてチラッと目の前の電気時計を見ると私は黙つて指さした。女生徒は何も言わず行つてしまつた。私はその横顔を見て一瞬激しい腹立ちが沸き上つた。確かにあの女生徒だ。そう思つてもう一度よく見ると間違いは無かつた。二・三カ月前の事だつた。私が一年生の教室の前を重岡という生徒と歩いてた時だつた。私の目の前を二・三人の一年生の女生徒がすれちがつた時、そのうちの一人が私の顔を見ていきなり教室へ走り込んだ。そして何か大きな声で言ひながら一人の全く見た事もない女生徒の手を引いて教室の外へ出た。ちやうど私達がそこを通り過ぎる時に何とはなしにそちらの方へ一べつをくると、手を引かれた女生徒の目が私を見ていた。別に何とも思わなかつたが、後で忍び笑いを聞いた時、私はあきらかにあの二人に侮辱されているのだと思つた。そう思つた瞬間、私は体中の血が引いて行く様であつた。あんな生意氣な奴ら！と思つた時、私の横の重岡は私の横顔を眺きこむ様に言つた。

「おい、今の見たかよ。」

「ああ見た。」

「あの目の大きい方、お前に……。」

「フン 馬鹿な！」

私は鼻先でせせら笑つた。重岡に新たに言われなくとも幾度も聞かされてた事ではあつた。ただ正面に向かつて面をつき合わせたのはそれが初めてであつた。私には大してそう重大な事ではなかつた。それは決して私のはじらいとか、そう言つた類のものでは



なく、何か自分を大切にしたいという気持ちから出た事であった。私は不思議にもあまりそう言った事の関心はみじんもなかった。確かに美しい物を見て美しいと心にはめる事はある。しかしそれが何であろうと、私の一番愛している私自身までに入りこんでくる事は好まなかったからである。さつきもそれと全く同じ事なのである。確かに顔立ちのいい、いわゆる「キレイな人」である事は私は認めた。が、それ以上の感情は進もうとしなかった。

「でも ひどく可愛いじゃないか。」

「顔なんか問題じゃないさ もっと理性があるなら人の背に笑ったりなんかするものか。」

それで全てが終わってしまった。私は聞こえる様にわざと大きな声で言ったのであった。

結局、今あの女生徒に二度顔をつき合わせた様なものであった。何も私から求めた訳ではない。あちらから勝手に時間なんか聞いてきただけの話である。私は少しも悪びれる所なんかないのだ。私には自分の楽しみを破られた腹立たしさの方が先に出了た。

これも私自身のうぬぼれの現われなのだろうかと思った。それならそれでいい、逆ならあの女生徒だってうぬぼれているじゃないかとも思った。これで何も文句の言い様はあるまい、つまらぬ時間を作ってくれたような物だ。私がこの前言った事は聞こえたのだろうか？ それにしたってよりもよって私などに時間を聞く馬鹿はどこにいるだろう。私がどんな仕打ちをするか知ってというようなものなの。そう思い私はまた本に向かった。その時からいっさいのつまらぬ邪念は消し飛んだ。閉館になったのは四時半であった。もうだいぶ暗くなっていた。その上悪い事に雨が降ってきた。私はあいにく

にあったブルジャンブルーの傘がすうっと私の方へ動いて来た。

私は何とも味わった事のない気まずさで一歩であった。私の横にいる彼女はまだ名前すら知らない女生徒だった。その上私は後先の事を考えないまずい事を言ってしまったのである。いったい彼女は何かのつもりなのだろうかと思った。私をうんと恥しめる様な事は言わないのか？ それともそれさえ言えないのか不思議であった。私はこう言う時何と言うべきか知っていた。しかし彼女は全く違う立場にある女生徒であった。彼女は黙って何も言わなかった。固く閉じた口元には何の変化もなかった。私はフト彼女は私の事をすっかり忘れていたのではないのかとも思った。あまり明るくもないところで私を見るのであるから、ただ同じ学校の生徒が雨に濡れるのを見て、ちょっとした親切からこうしているのではないのかと思った。出来ればそうであって欲しかった。今さらこんな所でよりもよってこんな時に詫げるのも変であった。私は少しとまどったがやっと口を開いた。彼女をまともに見る事は出来なかったの、なるべく落ち着くために正面を向いた。雨がさつきよりずっと激しく降って来た。

「先程は図書館で失礼をしました。」

私の声が最後まではっきりと言えないのがわかる。これだけ言うのがやっとだった。すると彼女は私を横から見た。

「ああ…あの事ならいいんです。せっかく本を読んでいらつしたのに、かえって失礼したのは私ですわ。時計を指さされた時、私本当にハッと恥しくなりました。」

彼女の言葉に嘘はなかった。最初はいのいい言い逃れかも知れないと思ったのであるが私の様な邪心のない事は声の調子でわかった。私は彼女がどんな顔をしてこの様な事を言うのだろうと思つて

傘を持っていなかった。朝は非常に天気がよかったのと思えば恨めしいものである。傘もささず歩く訳には行かなかったが、クラスの間は誰もいなかった。それでは仕方がないと思いそのまま校門を出る事にした。時計を見ると五時近くになっていた。もうこのまま帰れば母が帰っているはずである、電話をして迎えに来てもらおうかと思つたが、それまで心配はかけなくなかった。

外はもうすっかり暗かった。外の灯に照らされて雨がまるで美しく光っていた。小雨だったので上着をかぶつてしまえばそう濡れる事もあるまいと思つた。前を通りすぎて行く人々の程んどは濡れていた。それも少しすると傘が手にあつた。私が上着のボタンをはずしているとき後ろから声がした。

「あの…もしよろしかったらお入りになりませんか？」

私がふり返ると一瞬、目が釘づけになった。さっきの女生徒であつた。私はこれはまずい事になったと思わずにはいられなかった。しかし表面を冷静にとりつこうのにはそつがなかった。

「いや大丈夫です。駅まで走れば。」

「でも 濡れると良くありませんわ、さあどうぞ」

彼女はそこに立っていた。私はどうしても入る気にはなれなかった。さつきはあんな事を言っておいて、どの面を下げて傘なんかに入る事が出来るだろう。しかし彼女の言葉には一種の強さがあつた。どうしても私は貴方を入れます——そう言っている様であつた。ともするとどうしても貴方は私と帰らなければなりません。であつたかもしれない。私は一瞬たじろいだ。言葉・風体こそ優しかったが、何物にも後を見せない強さがあつた。そう思つたのはほんの一瞬の間であつた。私が次の言葉を言わないうちに今まで私の横

おそろおそろ横を見ると彼女は自然だった。私は視線があうとごく普通にそらせた。彼女は怒ってはいなかったのである。そうなるとも少しは気が楽になった。彼女は小柄だったこうして並んでいてもようやく私の肩に頭がとどく程であつた。これなら傘を持つ手が疲れるだろうと思つた。私はもう一度彼女を見ると、彼女の頬は輝いていた。私は今まで考えていない事が頭をよぎった。もしこんなところを重岡にでも見られたらと思つた。そして変にあわてた。全く具合が悪いとはこの事だ。何も思いをかけた女でもない者と肩を濡らす様な小さな傘で相々傘とは、なんて何と私はこっけいな悲劇を演じているのだろうかと思つた。人が通りすぎるたびにその人と横の女生徒を見ては青くなったり赤くなったり、おまけに私はひどい背高ときているしまるで外からみたら安っぽい喜劇より、ずっとおもしろい物だろう。私は本当に恥しかった。彼女に一番優しいとして一番苦しい思いをさせられた。彼女が今まで私に抱いていたものの全ての報復だろうと思つた。私は全くみじめだった。こんな事で手も足も出ない様にあしらわれてしまふとは普段えらそうな事を吐いていた私が本当に衰えたとこれと言うのだろうか。しかし、それも私の邪推なのだろうか？ 彼女にはそんな気持ちは毛頭ないのであろう。それをおかしな方向へ持つて行く私がよほどひねくれている。ああ、世の馬鹿を一人で背負っている様な物だ。もう何も考える事はない。本当にみごとに彼女にしてやられた。彼女の涼しい声が私の横でした。

「いつもこんなに遅くなりますの？」

「ええ？…。いいえ、普段はもっと早く帰るんですけどね、今日は少し体の調子が良いものですから残っていたんですよ。」



「まあ、そうですね。でも二年生になられると大変ですわね。その次の年の事もありますでしょう。」

私は少しとまどった。つい調子に乗ってよいいな事まで喋りすぎた様だ。しかし、そう衰われっぽくも聞こえはしなかったであろう。彼女は来年の事を言った。私が三年生になったら彼女は二年生になる。何でもない。ごくあたり前の事ではないか。しかし、その言葉に私を強くおさえるものがあつた。私は弱つたこの身を来年まで持ち越す事は出来るのだろうかと思つた。いつ来るとも知れないあの苦しみ、私は最近あの苦しみの中でも私の死期が近づいたのだと思う様になった。彼女はそれを全く知らない。何も言う事は無いであらう。私はこういう自分がある意味で衰えな者のだと思ひ、浅ましいとも思つた。そして気がついてみると私はいつか彼女に乘せられていた。ともするとこうなるのが当然のたてまえの様に思える。私はその時、今までの自分が何と小さな者であつたろうと思わずにはいられなかつた。横にいる彼女はあい変わらず小鳥の様であつた。こうしている彼女は本当に純粋なのだと思うにはいられなかつた。そして今まで考えていた事は深く恥入るものがあつた。

「あ、もうすぐ駅ですわ。」

私が我に帰つたのはその時であつた。もう駅なのかと思つた。半分ホツとした。なるほど駅が目の前にあつた。彼女は傘をつぼめた。かなりの降りだつた。これ程長く感じられた時間はなかつた。改札口まで来ると私は後ろをふり返つた。彼女は少し残念そうな顔をした。

「私は貴方とは反対の方向です。」

私も少しふいを突かれた。少々残念だとは思つた。

ると思つてならなかつたからである。母は私がいつもになく明るいを見て驚きもしたくらいであつた。私はそんな幸福に浸つて居る時にはあんなに思ひは全くといい程忘れる事が出来た。私は自分の部屋に入るとまた何か楽しさが増してくる様であつた。明日は日曜日であるし勉強なんか暮くらえだ。私はカバンを放し出すとすぐベッドの上に横になつた。非常に楽しい時は私自身わかる。そして天井の木目を見ながらいろいろ考へていた。良い日には良い事が続くものだと思ふにはいられない。今日の朝からの事を思い出すと、楽しくてつい一人で笑わずにはいられないのだ。こうなつたら徹底的に楽しい事ばかり考へてやろうと思つた。朝の事でもいい、鏡に向かつていた事、それから学校の事、明るい日ざしでも良い、あの暖い日ざしには何か心が浮かれそうになるものがある。それから図書館の事、いささか恥入る事もあるが彼女は実に性質の良い人間ではないか。私とはまるで根本から違うのだ。彼女のあの柔らかい物腰や、声がまだ残つて居る様だつた。最初は何故あんな風にしか彼女を見る事が出来なかつたのかと思ふと不思議でもあつたし、馬鹿々々しい意地をはつていた私が妙に悲しい人間だと思ふにはいられなかつた。私の芯からねじけた心はいくら頑張つても自分では彼女を完全に圧倒したつもりであつても、結局寛大で素直な人間の足元にもおよばない事がわかつた。

彼女のあの優しい態度は私の愚かさを気づかせる手段にすぎなかつたのであらう。とすると同じ傘に入る事を決して拒まなかつた強さ、あるいは私の本当の弱さにはうなづけるところが多分にある。あの時自分を責める恥かしさ、彼女に対して怒りは抱いたがそれもみごとに崩されてしまつたではないか、何故か私は今まで持つ

「あ、そう、本当に有難う。おかげで……。」

「あら、そんなお札など仰つたなくても結構です。人の濡れている時くらい当然の事ですわ、じゃあ、私ここで失礼いたします。」

彼女はそう言うとき軽く頭を下げた。彼女が後ろを向こうとした時、何故かこのまま帰すのは惜しくなつた。

「君……。」

私は自分でも驚く程大きな声で呼び止めた。彼女はふり返つた。それはごくわずかの時間であつた。彼女はいぶかる様私を見た。

「何ででしょうか？」

「名前は何？」

「はい、高村淑子と申します。」

彼女はまっすぐ私の方に向かつて。それからしばらくの間沈黙があつた。そして少し微笑むとこう言つた。

「ご存じの事とは思いますが、一年C組です。」

彼女はこれだけ言うとき何かをふり切る様にしてホームに入った。私は向かいの彼女をじつと見ていた。すぐ電車はやって来た私はそれに乗り込むとすぐ窓の方へ立つた。これならホームにいる時よりずっとよく彼女が見える。彼女は私に気がつかなくなつたのか……と思つたが私を乗せた電車が発車し始めると窓のところにいる私がわかつたらしく丁寧に頭を下げた。

私は家に帰つても非常な幸福でいっぱいであつた。別に彼女とあんな風になつたのが大きな原因ではなかつたが、それも確かに理由の一つである事には違ひなかつた。それよりもっと大きな何かがある。今まで満たされなかつたほんの一部でも満足させてくれる様であ

ていになかつた物を彼女に見せつけられ、実にそれは辛い事だと痛切に感じるであつた。私はあの時もしそのまま濡れて帰つたらもう一生彼女に接する事はないだろうと思つた。彼女が私に来年の事を言つた時どうして煩つたこの身の事を考へたのだろう。もちろん恐怖感もない訳ではなかつた、死という最も抽象的でそして具体的な物の存在は否定したくてもそれは私にとってあまりにも不可能な事であつた。私は一心になつてこの恐ろしいものからのがれようとしていた。あがきはわかる。しかし、何故あの時そう思つたのであらう。濡れる者は……の気持ならそれはそれで良い。手にあるものがわからあろうと、木切れであらうに私には手にさえつかめればそれでよかったのである。それを握もうとする心によつてほんの一瞬でも死という概念から気持ちをそらせる事が出来れば私は何でも握んだであらう。とすると彼女はその物にすぎなかつたのであらうか。あの時の私をそうさせた気持ちの裏にはやはり私を奥へ奥へと引きこむ力がなほ働いていたからなのだろうか。しかし、これだけははっきりと言へる。あの時彼女が何でもよいから身を投げてもうすがりたいたとした事は決して彼女を邪堆したりする懸念はかけらなかつた。それだけは確心はもてる。それから私は別れる時、あのまま帰すのは惜しいと思つたのはむしろこついてもあつた。

それは決して悪い意味ではなくあんなまでして自分をそのまま出した私自身がむしろ可愛かつた。名前等聞いたところでどうなるというものではない。ただあれは自分の目の前にいる女をもう少しとどめておこうとする何か命令をしたのであらう。名前もごく普通の名前だ、しかしそれが何かまた魅力を持つて居るのだと思ひ直してみた。彼女はあの時変に恥づかしなかつたのだろうか、あの二



カ月前の事を深く気にしているらしかった。そうでなければわざわざ最後につけるはずはないし、しかしあの時後先を考えずあの様な下品な言葉を吐いた私自身が今となっては油汗のにじみ出る思いであった。彼女もあのひどい言葉を非難していたのであろう。彼女に對する全ては最初から私の敗北だった。それがわかったのは二カ月後であり、それをはっきりとわからせたのは彼女と私自身であった。しかしわずかの時間でそれが程んど切つて落された様に思える、思いがけない物を見つけた様な喜びであった。私は今まで考えてきた彼女は彼女を私とは全く異質の性を持った者として考えて来たものではなかった。そうではなくもつとそれを越した何かであった。実際に彼女の顔は少なくとも三回以上は見たはずである。その外観を賞賛はしたがその美しさや優しさは異性に對する憧れに達したのではなく、本当の人間らしい人間の本質に触れた喜びを与えてくれるものとしてその他のものは考える事はまだどうい出来なかつた。その日はその様にして終わってしまった。翌日は別にいつもとは変わりのない日曜日であった、母も私もそろって寝坊をしてそれから一日が始まり、ゆつくりとした気持ちで一日を過ごしてしまつた。有難い事にそれから一週間は何事も起こらず、そのため私はあい変わらず読書に熱中する事が出来た。

私はその一週間にすっかり恐い発作の事は忘れる事が出来た。学校をいやな思いをして早く引ける事もなくなつてすむのである。別にこれといった後悔もなかつた。高村淑子とはあれ以来ずっと顔を会わせていないが別に寂しい訳でもなかつた。ただ教員室へ行く時通る一年生の教室の前の廊下が馬鹿に短く感じられる様になった。本当に彼女に会いたくなつたらこちらから直接出向くらゐの度胸

のを待った。霧が晴ればあの女はやつて来る、今日こそ聞いてやろうと思つた。と思う間もなく霧が晴れて来た。女は横にいた。長い髪で程んど顔を隠していた。それでもはつきりしない今は顔を見る事は出来なかつた。彼女は腰を下ろすと私の方を向かず喋り出した。

——またいらしたのね。いついらつしやるかと思つたわ。

私はこの言葉に大いに反駁するものがあつた。

——今日こそここがどこか言ってくれるね？

——まだそんな事を言っているの？　もうとつとにわかつていると思つていたわ。

——いや少しも知っている理由なんかないね。君には全く会つた事もないし。

——私に会つた事がない？

彼女は叫ぶ様に言うと、ぱつと顔を上げた。今まで顔の前に垂れていた長い髪が後ろへなびいた。月の光に白く照らし出されたその顔を見て私は出かかつた言葉が喉につまつた。

——君は……高村淑子……そうだね。

彼女は笑つていた。私はしばらくその場にぼんやりとしていた。馬鹿な、見違ひだ。いくら何でもこんな所に彼女がいる訳がないじゃないか。そうは思つても彼女は明らかに高村淑子だった。

——そんなに驚かないで。もうだいたいの事はわかつたでしょ。何もかも言うわ。何も仰しやらないで聞いて頂だい。約束してよ。

そう言つて彼女は私を見上げた。ああ、その大きな目・唇の形・三日月形の眉・歯並び・声まで高村淑子そのものであつた。何故だろう。私は自分の目を疑わずにはいられなかつた。

——私を見てびっくりしたでしょう。私はこの前はこんな顔では

はない訳でもなかつたが、そんな事をしたら彼女の面子が悪くなるだろうと思つて、それだけはしなかつた。私は家に帰つて例の物見の窓から空を眺めていると不思議な安心感を持つ事が出来た。やはり私はもう先の長い体でない事がわかつたからなのだろうかと思う事もあつたが、そんな事は好き好んで考えるまでには至つてはいなかつた。

次の発作が私を襲つたのはそれから十一日後の夜だった。夜といつてもむしろ明け方が近かつた。それまでぐつすり寝つていた私は突然背から左脇へぬける様な激しい痛みにつき上げられて目をさました。そしてあの恐い物がやつて来た事がわかつた。全く息をする事は出来ないくらい苦しかった。左の胸を押さえ、まるではいずる様にしてやつとの思いでベッドを下りると、あえぎあえぎ机の引き出しまではつた。暗い中で手さぐりで引き出しに右手が触れた時は夢中になつて薬をつかみ出してた。薬を口に入れるとようやく発作はおさまつた。私はベッドには戻る事は出来ず床の上にそのまま倒れていた。するとすぐ寝りがやつて来た。夢とも現実とも見分けのつかない物が私の目に見えてきた。この前の様にまたあの音が耳に聞こえて来たのだ。私は自由にならない体を必死になつて動かして幾度も目をバチバチさせて、これから起こる事を見きわめておきたかつた。あの時は何もわけもわからず驚いてばかりで何も知らないうちに夢なのだ決めてしまつたが、今度はいくらか私は大胆になつてた。そしてじつと待つていた。

私がすっかり目の前が見える様になつたのはやはりあの草の野の中であつた。もう何も恐しがつたりする事はない。私は霧が晴れる

なかつたでしょ、この前は貴方のお母様の顔をしていたのよ。

それには気が付かなかつた様だけれど。私だけではないわ。いい事、ここのね、貴方がいつも心に描いている世界はのよ。きつと普段は気がついていないでしょうね。でもよく考えてみてごらんさい。この木なんか見覚えなくて？　それからこの霧の匂い。全てが貴方の子供の時から憶れて来たものが知らないうちに積まれて、こんな世界を作つてしまつたの。例えば私。

私はここで一人しかいないでしょ。それは貴方の心に一番大切に思っている人はいつでも一人だからなの。今までは貴方は心から信じていた人はお母様だけだつたでしょ。だから私は、この前は貴方のお母様の一番美しく見える顔をしていたのよ。

貴方はそれに気がつかなかつただけよ。私は今誰に見える？

言わなくてもわかるでしょ。私はこの世界に住むたつた一人の人間なのよ。つまり貴方の一番気に入つた人間の概念なの。今の貴方は自分の世界に完全につつまれてしまつてゐるのよ。誰でもこんな世界は持つてゐるのよ。ただそこに入る事は出来ないだけよ。何故貴方がここへ来る事が出来たか知らないけれど貴方はいつも、自分自身を引きこもつてゐるからよ。

私はまるで彼女の言葉を信じる事が出来なかつた。こんな事を聞かされて自分でも何と言つてよいのかわからない。しかしここが私だけの世界だとわかつた。不思議な感じが一杯になつた。そして今まで抱えていた不信感や疑惑は一べんにふぎ飛んだ。目の前が急に明るくなつた様だ。ここが私の世界なのかと思うと安心が私を浸していった。この広い野はきつと子供の頃憶れたのであろう。新鮮でさわやかな草の匂いを含んだ空気は、ひたすらに健康



を求めている心なのだろう。私は幸福であった。そして自分の本心がひたすらに健康な物に憧れていた事が、この身を通してわかり私はいれしなかった。そして私は横の女が高村淑子なのだとわかった、わけもなく顔がほころびて来るのが私自身よくわかった。そして私は何と単純な人間なのだろうかと思つた。ここが私の帰る所なのだ。もっとよく見てこの目におさめておきたかった。彼女は優しい目をして私を見上げていた。私も彼女を見た。これが私の作り上げた彼女なのだろうか？ 私はこの時初めて彼女を正面から見た。そして美しいと思つた。私は大きく息をした。彼女は立ち上つた。そして私を見て涼しい笑いを浮べた。

——もっと歩いてみましょうか？ 貴方の世界

私は黙って立ち上ると彼女の後ろからついて行つた。彼女は手をさし出した。私がお手を取ると彼女は静かに歩き出した。私は何も不思議に思う事はなかった。私はむしろ素直になつていた。もう彼女の前で氣どる事なんか毛頭ない。私は彼女にいろいろな所につれて行かれた。私は何を見るにつけその物がどうして私の心に残つていったのか思ひ出す事が出来た。そしてその物を見るたびに深い感動を覚えた。まるで胸が一杯になつた。さわやかな風が吹きつけると彼女の白い衣が時々私の腕のあたりまでうちかかつて来た。月の光の中に森があつた。森は寝てゐた、黒い木々が月の光に柔かい光を放つてゐた。泉があつた。そのそばに赤い花が咲いてゐた。彼女はそれを一つ摘み取ると長い髪にさした。私は何の花だろうかといふかつて見たが思ひ出す事は出来なかつた。私は出来るならいつまでもここにいたいと思つた。しかしその思いもみごと破られた。彼女は突然立ち止まつた。そしてふり返つた。

——もうお別れよ。貴方は帰らなくては。  
——どうして？

——もう夜が明けるわ。貴方の意識がもどるのよ。  
——この次はいつここに来るの？

彼女はその言葉を聞くと急にそわそわし始めた。

——さあ、わからないわ。とにかく今日はここでさようならを言  
うわ。これを持って行つて。

そう言つて彼女は髪にさしてあつた赤い花を私に渡した。私は何も  
言う暇はなかつた。

——その花でも見て思い出して頂だい……。

そう言うとき彼女の姿はかき消された。

私が目をさましたのは、翌日まだ未明の頃であつた。私はあの時からずっと床に倒れたままであつた。あの苦しい間の事はすっかり忘れてしまつてゐたが、私にはあの夢としか思われぬ事が頭の中にあつた。私はまだ半信半疑であつた。夢なのだと思う心と、あれは現実の物なのだと思う心が私の心に重なり合つてゐた。私はしばらくは自分自身が信じられなかつた。そして何か寒々とした寂しさが私を支配した。そして随分長い間座り込んで考へてゐた。私は少しも寒いとは思ひなかつた。あれが本当の事だとしたならば、私はいつたといふよ近くなつたのだと思はれるものがあつた。私は死期がいよいよ近くなつたのだと思はれるものがあった。私はそれはもう恐ろしくなかつた。何故ならあれが私だけの世界なら死後に行く私が生活する世界なのだと思つたから。そしていつの間にか、そう信じなくては行けないのだと思はれる何か私の隅に巣を作つ

てゐた。私はきつと朝まで寝る事はないと思つた。そしてあの苦し  
いものがやつて来る時、私は私自身の世界が身を引くのだと思つ  
た。私はようやくのろろ立ち上るともう一度ベッドへ行こうとし  
た。そして床に手をつこうとした時、私の左手がしっかりと握られ  
てゐる事に気がついた。今まで夢中で自分の手がどうなつてゐるか  
等いろいろ氣付いてゐる暇はなかつたのであろう。そつと手を開く  
と窓からのわずかな光が私に何かをつかんでゐた事を知らせた。何  
であらうといふばかり枕元のスタンドをつけると、その光が左手の手  
の平に半分しばみかけた赤黒い花を乗せてゐる事をわからせた。

私はすっかり気が転倒してゐた。一番氣にかかるのは、高村淑子  
の事であつた。私は物を順序だてて考へる事が出来なくなつてしま  
つた。私はそれから三日間ずっと学校を休んだ。その間ベッドの中  
で考へてゐた事はあの夢ともつかぬ私自身の世界の事であつた。し  
かし三日間が過ぎるとどうしても学校へ行かなくてはならないと思  
つた。そしていかなる方法をとつても高村淑子に会わなければなら  
ないと思つた。彼女に会えば、ただ姿を一目見るだけでよい、それ  
で何かが休まると思つた。私の体はそんな使命感によつて運ばれ  
てゐた。学校についてしまえば氣は楽であつた。しかし、今日は授  
業を受けるために来たのではない。授業中は勉強の事はまるで頭の中  
にはなかつた。私は身こそ教室にあつたが心はとうの昔に私自身  
の体から脱け出してゐた。そして放課後までは何も起こらずに終わ  
つた。私の心は極めて冷静であつた。自分でもそれが不思議なくら  
いであつた。しかし完全に授業が終わると流石に私も自分をおさえ  
てゐる事は出来なかつた。私は少し迷つた。そして、あの日の様に  
図書館へ行つてやろうと思つた。彼女が必ずやつて来るという確信

はなかつた。それなのに私は図書館へ行くのだと自分に言い聞かせ  
た。私はじつと待つてゐた。来ない事とはわかつてゐるのに私は待  
つてゐた。いつかは彼女がやつてくる。そして私の横に座るであら  
う。あの優しい声。全てが私の心を潤す事だろう、とそればかりを  
思つてゐた。私は寂しいとは思ひなかつた。図書館が閉まつ  
ても私は帰る路々満足であつた。それは、よく熟した木の落ち  
るのをじつと立つて見ている者の氣持であつた。その私は寂しさも  
憂いもない、ただ希望だけが私を木の下に立たせてゐるのに他なら  
ない。ともすると甘い希望はかえつて私一人で味わうのが当然の事  
の様に思えるのであつた。だから彼女に自分から出向かなかつたの  
だと思ふのである。

二日目も私は彼女の為に学校に行つた。あい変わらず六時間を何  
も考えず過ごしてしまつた。そして放課後は図書館へ足を向けた。  
彼女には会う事は出来なかつた。こうして三日・四日と訳もわから  
ない欲の為に学校に出ている私は、自分がおかしな事になつてゐる  
と氣がついたのは、やつと六日目の頃であつた。私は自分の行動に  
全く責任がない事に氣づいた。その原因をたどつて行くと他でも無  
く彼女であつた。結局私は一時の欲に溺れて盲目同然であつた。最  
初は彼女を頭から否定し、そしてほんの偶然に私は一変した。その  
延長が私を溺らせた。延長させたのは彼女ではない。私なのだ。私  
とはこんな弱い人間なのかと思はれるものがあった。外部に対して  
もそうであつた。

私はどうしても彼女に会うと決心したのはずっと後になつてから  
であつた。最初は私から直接行こうと思つたがいざ教室の前までや  
つて来ると足がすくんだ。皆が私の方を見つてゐる様に思える。ひと



く背中が熱くなって来る様に思える。そうして彼女の教室の前を二回往復しただけになってしまった。しかし、どうしても彼女に会うとする気持ちに勇気づけられ私は手紙を書く事にした。

#### 「前略」

とり急いでこんな手紙を貴女に渡すのは僕としても非常にやりきれない物があるが、どうしても書かずにはいられなかったからだ。

もう一度僕に会ってはくれないだろうか？ あまりの突然で貴女もさぞ驚かれるかも知れないが、僕はいつも図書館にいる。もし貴女が僕の申し出を承諾してくれるなら、図書館に来て欲しい。

#### 高村淑子様

私はこんな手紙を書くのは初めてであった。こんな手紙の書き方は心得ていたがいざ私自身の事になるとひどくこちなく思えるのであった。一気にこれだけ書くのはかなり苦痛であった。こんな手紙を彼女は初めて受け取るのかも知れない。出来ればそうであって欲しかった。彼女は何かと思うだろうか？ 幾度も読み返すと一つ一つの文字が私を責めだてている様であった。私には二度読み返す事とはとても絶えられない事だった。そしてこんな明け透けの文が私をいっそうみじめにさせた。私は手早くそれを折ると白い封筒に入れ封印した。こんなに恥ずかしいやり場のない気持ちになるのなら、いっせやめてしまえばいいと思わずにはいられない。それなのになお彼女にこれを渡そうとする気持ちは止められるものではなかった。きつとそれは私の、いや私に限った事ではない人間誰でも持ち

#### 不

得る「独占欲」の現われなのだと思った。そして彼女がこの種の手紙を受け取るのは、私の最初であって欲しいと願ったのは、ともすると私のないかと思わずにはいられなかった。そしてうぬぼれによるものではむしうにせつなくする何かを私を襲った。私は翌日彼女の教室に行くと一人の女生徒に頼んでそれを渡してもらう様に言った。彼女は少し不信そうな顔をした。

「あの……。お名前は？」

私は少しとまどった。しかし舌が先に動いた。

「いや 判っています。二年生の者だと……そう言って下さい。」

よくもこれだけのことをぬけぬけと言えた物だと私は自分でも驚いた。私は逃げる様にしてドアを離れる時、その女生徒が私の背後で彼女の名前を呼ぶのを聞いた。私は走り出した気持ちにかられた。

その日私は一日中私そわそわしていた。あれから彼女が手紙を受け取る時の事をいろいろ考えていた。きつと彼女は今ごろ読んでいるだろう。あの角ばった字。あの様な無礼きわまる文。あてつけがましい気遣い。彼女は何かと思うだろう。そう考えるだけで私はそこにじつと座って授業を受けているのはいたたまれなかった。

やつと授業が終わった。私は高鳴る胸をおさえて図書館に入った。楽しい夢を見る前にその夢の女主人公は待っていた。私を見るとパツと顔を輝せてこちらにやって来た。私は一瞬体が硬直するのではないかと思った。

「私待ちましたわ。」

彼女は少し声を高ぶらせていた、ごく小さな声であった。

「ここよりはあの丘に行きませんか？ あそこなら誰にも邪魔はさ

れませんわ。」

むしろ大胆なのは彼女の方であった。私はあまりの驚きで口もろくにきけなかった。私たちは丘までは一言も喋らなかった。前を軽く歩く彼女には今まで味わった事もない一種の恐ろしさがあった。こんな時にも女とは大胆なものかと私は驚かずにはいられなかった。いや彼女にとっても大した事でないからこんな事情を装っていられるのではないのだろうか？ 私はかすかな不安があった。

丘といつて大げさなものではない、校庭の隅が小高くなっている丈い短い草が生えていた。そこに登ると校庭は一目で見回せた。そこなら本当に誰はばかる事なく話も出来るのだろう、私はそう思った。

私たちはカバンを持つと走り登った。登ると彼女はカバンを放り出して荒い息の下で言った。

「私ねあのお手紙を拝見してすぐ貴方からだっていう事がわかりました。女の「感」なのかもしれませんわ。」

「驚かなかった？」

「いいえ。かえって嬉しいくらいでしたわ。初めてでしたもの。」彼女がこんな快活に喋るとは思わなかった。私たちは少し間をおいて座ると少し黙っていた。しかし口を開いたのは彼女であった。

「私もいつかは貴方にお会して話す事がありました。」

そして少し考えた様であった。私は幸福だった。彼女の様子には少しも気がついていなかった。

「話？」

「ええ。それよりずっと休んでいらしゃったそうですけれどお体の具合でも悪かったんでしょうか？ 心配でしたわ。」

私は少し黙っていた。彼女の言葉に疑いはもてなかった。しかし何かさぞらしいものが感じられてならなかった。確かにこうしている時、自分でも楽しいと思わなければならないのに、彼女を見ていると今まで彼女に描いていたものが少しずつこわされていく様な気持ちにかられた。

「ああ そうでしたわ。これお返ししなければ。」

そう言う彼女がカバンから白い物を出したそれは今朝私が胸をときめかせて渡した手紙だった。私は彼女が何故こんな事をするのかわからなかった。

「この様な手紙は、必ず返すものだ聞いています。それにとにかく私お返しします。」

彼女は急にあわて始めた。私は彼女のどうしても臆に落ちない態度にやっと気付いた。その様子は私に何も言わなくても欲しくない。まるでそう見えるのであった。

「私……あのう帰らなくてはなりませんわ。何故か貴方をだましているみたいに思えてなりませんの。じゃあ失礼いたします。」

貴方の申し出にに応じて、すぐいそいそと帰るなんて本当に失礼な事かもしれないけれど、でも仕方がないんです。」

彼女はこう言い捨てると私が止める間もなく逃げる様にして丘を降りてしまった。私は全く狐につままれた様な気持ちであった。しばらく自分に何が起ったのかわからず彼女の走り去った後を見ていた。そしていつか彼女は何を言おうとしていたのか全く理解する事はできなかった。私は腹を立てたり、悲しがりたりする余裕はなかった。その前に何か愕然とした物が心の中に渦を巻き感情の入るすきを与えてくれなかったからである。私はしばらくそうしていた



が何も考えず、何も言わず立ち上った。帰る路すがら私は夢を見ているのではないのかと思わずにはいられなかった。あれはまるで嘘の様だ。何とおかしな事があるのだろう、私はこんな時どうしてよいかわからなかった。この様な気持ちになるのは今が初めてであったから何を考えてよいのか、またあの高村淑子の全ての態度が何を意味するのかわからない事ばかりであった。

家へ帰り夕食を済ませてからすぐ部屋に引き下ると私は一瞬ハッとするとものがあった。あの時彼女が私に渡したあれの事であった。どうして私はあれにもっと早く気がつかなかったのだろう。そう思うやいなや私は、机の上のカバンを手荒く開くと、自分でもいつそれを二つに折ったかわからない封筒を引っぱり出した。やっぱり予想した通りであった。朝よりずっと厚く思えた。彼女からそれを受け取った時、そう感じなかった訳でもなかったのに。目の前のものにぼおとしてそれに気を配る事もなかったのだろう。私は封を切った。中から手紙が出て来た。最初は私の物だった。それから次に入っていたのはたして彼女からの物であった。私はためらう事なくそれを開いた。少しもあの感情は沸いてこない、私はそれを手にした瞬間一種の不快感に襲れた。

#### 「前略

今朝方貴方からの手紙は確かに私の手に落ちました。あれを受け取った時、私は言い様もない喜びに襲れ、そして自分のしている事が何と恐しい事なのだろうと思わずにはいられませんでした。もう今となつては貴方を傷つけずにこの様な手紙をさし上げる事はおそらく不可である事は痛い程わかっておりますが、でも今がとうとう本当の事を申し上げなければならぬ



りました。それが貴方をどうしても独占したいと思わせたのかと今になってそう思うのです。私はおぼつかない気持ちで貴方に近づく時を待ちました。まだその様な時には純粋な物が多少はありました。貴方に図書館でどの様にあしらわれるかぐらいは予想はしておりました。そうされればされる程私は自分を殺さなければと思いました。そして貴方の身の上の事を誰の口からとなく耳にいたしました。その時の私の何とも言えない勝利感——私の心の中に渦まいていたものが一ぺんに流れ出る様な気がいたしました。そして女の優しい残酷さが貴方の一番の弱みを幾度も奏しては歓喜の声をあげていました。そして私がいつか貴方に言われたあの呪わしい言葉以上の事を貴方に投げつけてやろうと思ひました。雨の降って来た時前を見ると貴方がいました。このまま雨に濡れてしまうのを見ている事は少し残念でした。その後ろ姿はひどく気の毒に思えたからなのです。しかしあの時は何とかして貴方をこっぴどく痛めつけてやろうとそう思い、貴方に声をかけました。貴方が私を見てひどく狼狽する姿は踊り上って歓喜の声をあげたい位でした。私は自分が何と恐しい女だと思わずにはいられない程自分がいやになつた事はまだありませんでした。傘の中に貴方を入れても私はわざと黙っておりまして、貴方の気持ちに手に取る様にわかるのでした。そして貴方が本当に言いくさうに詫げるのを聞くといささかすまない気持ちにもなりました。

貴方が駅で私を呼び止めた時、私は自分でもあれ程上手く芝居がうてるとは全く考えてもいませんでした。しかしとつさの時にはまだ私の純粋さがつい出てしまう事はわかっていました。

会がめぐつて来たと言う物でしょうか？

私は今までは全く他人の気持ち等考えた事が程んど無かつたと言つても決して過言ではありません。しかしいくらそれをたてにとつても貴方に対するほんの一時であつても抱いた気持ちは幼い心から脱した印だったのかも知れません。私は決して自分を殺してまで人に接するとう事出来ませんでしたし、それが誰であつても同じ事でした。とにかく私の貴方に抱いた憧れはその発出からしてみごと貴方に無視されてしまったのですから、もちろん貴方が悪いものではありません。見ず知らず私がおかしな事をするものだともお思ひになられた事でしよう。私としても自分をあくまで良い方に見立てるなら貴方に全く無視され、その上頭から馬鹿にされたという事で、いささか腹も立ちました。それには貴方に対しても、そして愚かだった自分に対してもそれは同じ事でした。私は幾度くやしさに泣いた事かわかりませんが、とにかくその激しい気持ちが過ぎるまではおそらく物事をあたり前に見る事は出来ませんでした。その時フト私の心に頭を持ち上げた物がありました。それは何であつたか言い表わす事は出来ませんが、ともすると今まで気がつかなかつた残酷心だったのかも知れません。貴方は存じてはなかつた事でしようが、私の組の女生徒の間ではかなり貴方の事がうわさにのぼつておりました。私も恥ずかしいながそのうちの一人でした。しかし私は貴方に全く無視されていると知った時、いかなる方法を得ても貴方に近づくかなければならないと思ひました。何故そう思つたのか知りません。しかし貴方をいくら憎んでも、貴方に抱いた気持を考えるとハッと思ひとどまる物があ

そして貴方の気持ちを完全に動かしてしまう事がわかつた時、私は満足でした。それは今まで私の憧れていた物を得た時の喜びではなく、もっと鈍欲な恐しい物が完全に貴方を押し倒してしまつた時の快感にも似た物でした。半分は興味もありました。たかが一人の小生意気な女生徒にあしらわれた男の方ってどんな風になるのか。でも貴方は私の考えていた方とは全く違つていました。もっと横暴な事を言い、そしてもっと私を低く見るかとそう思ひましたが貴方は意外にも純情な方でした。ひどく自分を責めたてていらつしやる事それは私の報復でした。それが一番貴方に向いた物でした。ところが今度は貴方が本当に私の方へ全てを向けようとした事は全く逆転いたしました、私が貴方に近づいた事もそれは決して純粋な気持ちからではなく、上部の美しさを着た不浄な物からでした。そして今日貴方からの手紙を見て、もうどうしてもお互いの為に本当の事を全て言わなければならぬ———そう心に念じておりました。今の私は本当に私自身に対して激しい物がこみ上げてどうする事も出来ません。貴方が私にめっちゃめっちゃに弄ばれている事も知らずに———そう思うとさすがに自分をとがめる物があるのです。それが良心というものでしょうか。もうこれ以上貴方を痛めつけるのはとても出来ませんし、それに気づいた今、私は自分が空しい物に見えてなりません。一時は本当に貴方に憧れた私です。それからそれを思えば貴方の事を考えると、とても辛いのです。決して私は後悔はしないつもりでした。それなのに、自分のした事を考え直すと私は決して良い心を持ったいいわる善人ではありませんでした。そして悪人にもなりきれない、いわば中途



な人間でした。貴方にあつては、私は決して心から溶け込む事はないだろうと思います。この様な事の全てを貴方はどの様にお取りなされるかと思うと、私は、あれは全て魔がさしたのだとしか言う事が出来ないのです。貴方が何を言われようと私はそれに耐えて行くは出来ても、私をこんなにまで変えた衝動が今さらの様に恨めしいのです。私たちの間には決して善はありませんでした。貴方も私も言うなれば共犯者なのです。ただそれをどちらかが気づいたというだけで何のかわりはないのだと思っています。私の様な女に感情を弄ばれた貴方は、気の毒に思えても私にはどうする事も出来ません。私もそれだけの事を書くのに幾度も迷い、自分を責める物に圧されてペンを取りました。これを貴方がどうお取りになれるか私は存じませんが、もし私の言う事の全てが間違っているならば、それは私の愚かさで自分をまたしても迷わしているのだと思うて欲しいのです。ですから私は貴方に再び会う事はないと思います。もともと他人であつた私たちが無理に自分を殺して交わろうとするから結局はそれが破滅への近道だつたのだしそれだけが私の一番心を痛める事なのです。貴方から今朝方受けた手紙は共に同封いたしました。ただ貴方からの心のこもつた物と一緒にする事が、ひどく氣に病まれてしかたがありません。

私は読み終わつても信じる事が出来なかつた。心の中には何とも言い知れない物があふれていた。これで全て私たちは終つたのだ。あの優しい姿や、声がこんな恐ろしい事を考えていたのだと思うと、私は何と馬鹿だつたのだらうと思わずにはいられなかつた。私は自

た。これで私たちの絆は完全に絶ち切られたのであつた。

それからしばらくの月日が過ぎた。もうあれから一カ月経つたのである。私は前と少しも変わりはなかつた。この一カ月間の苦しみはとも言い表わせる物ではなかつた。物は全く手につかなかつた。見る物が恨めしかつた。確かに失念は今まで敗北を知らなかつた。私にとつては随分の痛手であつた。しかしそれが去ると私に残されたものは、辛い物の後に勝ち得た解放感であつた。かすかながら希望はあつた。それがかえつて私を勇気づけたのかも知れない。しかし私は元比べずと口数が少なくなつた。それは昔の通りの傲慢さがもたらす沈黙ではなく、もっと寂しい物であつた。私は自分の存在にさえ疑いを持つた。ただ、その間学校でも彼女に会わなかつたのは辛いであつた。私は自分の気持ちをまぎらすため読書に熱中した。そうする他、方法はなかつたからである。

私の精神的な不安定がとうとう体にも影響を始めた。この四日間、夜明けになると必ず発作を起こした。そして苦しさに床をはい回るうちにあの幻覚を見るのであつた。

五日目に私は母に引っぱられる様にしかかりつけの医者の所へ連れていかれた。病室へ入るのはもう何百回としてきた事であつたのに私の年が増すにつれ、それは生理的な辛さを感じさせるのであつた。病室の匂いには慣れていた。診察を終えると私は外に出された。医者は全く表情を変えなかつた。私はそうたいした事ではないのかと少しはホツとした。「お大事に」と言われる決まつた文句も有つても無くても同じ事であつた。私が病室を出ると、今まで横に

分の哀れさが今さら心にくり返されるのであつた。私は気が転倒した。目がくらむのであつた。私はみごとに彼女にやられたのだ。彼女とは出会いから上手く行くものではなかつた。最初は私が彼女を欺き、そしてその次には彼女に一番恐ろしい方法で報復されたのだ。あの傘に入つた時の事が今さらの様に、いや私のうぬぼれからあんな下品な言葉を吐いて有頂点になつていた私が恨めしかつた。私がつつと物を純粋に見る事が出来たなら、もつと相手の気持ちを察してやれる気持ちがあつたなら、こんな結果にはならなかつたのだ。全て彼女が悪かつたのではない。私だ。全てを破滅に導いたのはこの私だつた。私が彼女に対する気持ちを変えた時彼女の報復はみことなされたのだつた。その点では彼女の方がずっと上手であつた。あの物静かな、丁寧な言葉の裏には恐ろしい刃があつたとは……。私は人間の業のすさまじさをこれほど知らされた事はなかつた。彼女を本当の天使だと思つた私がめっちゃめに弄ばれようとは……。私は今まで積み上げたものが全く空しく崩れた様な気持ちに襲れた。そして一番辛い物を味わされた。彼女に対する憎しみより自己嫌悪が先であつた。彼女の優しい声を再現するよりは手紙に書かれた文が飛び飛びに私の心に針の様に鋭くつき刺さつてくるのだつた。今となつてはあの私の手紙や全てが何だつたのだらうと思つた。この一週間前は日夜に彼女の事ばかりではなかつたか。それなのに……。私はかつてみながつた敗北を辛い位になめさせられた。よりもつてそれが思いをかけた一人の弱い女からであつた。彼女のあの美しい顔が恐ろしい物の仮衣だとは思ひに彼女を憎むより自分の人間的な貧しさに私はむしろ悲しかつた。私は幾度もそれを読み返した。しかしそこからは同じ事しか汲み取る事は出来なかつた。

いた母は薬を持って来るからと言つて病室へ入つたきりなかなか出てこなかつた。私はしばらく待つていたがとうとうしびれを切らして立ち上つた時、ドアがあいて出て来たのは母であつた。顔が青かつた。私が前に立つていたものだからギョツとした様に私を見上げた。そして小さな声で言つた。

「驚かないでね。今話を聞いてきた所よ。かなり悪くなつてい

んですつて。でも手術をすれば何ともないそうよ。」

私は驚いた。自分では予期していた事であつたがまさかこんなに早く告げられるとは思ひなかつた。体中の血がいつべんで腰の方へ落ちていく様であつた。母は何かふり切る様に後ろを向いた。私たちは黙つていた。私がそのままコートを着ようとすると手に何かが触れた。横目でそれを見ると白い手袋をした母の手だつた。私はあえて逆らわず母のなすままにしていた。母は私にコートの袖を通すと前に回つて今度はボタンをかけてくれた。母の姿は決して私を手離したくないとも言ふ様であつた。この十七年間私の為に生きてきた母の気持ちははかり知れない悲しさであつた。私の事を知つた母は、当人の私より気が転倒している事は確かであつた。私はそんな母を見るのは耐えられなかつた。そして衝動にかられてつい口をすべらせた。

「お母さん何も驚かなくてもいいんだよ。僕の事なだけけれど本

当はもう駄目なんじゃない？」

私は言つてしまつて後悔した。母はとつさに顔をあげた。

「何を言うの。あんたは。そんな馬鹿な事は……。」  
母は少し口ごもつた。あまりにも哀れな弁解に聞かされた。それがただ息子を取られたくないという弱い母の捕えようにも捕えられな



い大きな物への力一杯の抵抗であった。母は下を向いていた。もしかすると泣いているのではないかと思えてならなかった。母は無理にも自分をおさえていた。もう一人ならきつとこの細体を風に騒ぐ柳の様にふるわせ声をあげて泣き出したであらう。それなのに：「そう思うと私は自分より母があまりにも小さく哀れに思えた。そして母の足元に声をあげて泣き伏したい衝動にかられるのであった。」

その翌日私は学校を休んだ。母とは程んど口をきかなかった。というより互いに口をきいていない余裕はなかったからである。母は勤めを休みその日から私の入病の準備にとりかかっていた。そんな中で私一人が静止していた。昨日以来私は何か物につかれている様であった。母が何か言ってもまるでうわのそらであった。私は母があれこれと動き回るのをただ黙って見ている他はなかった。

私の入院日が決まっ事を母の口から聞かされた時は、不思議に気持ち落ちついてた。母は別にあわてたりはしてないかった。ちやうどそれは一週間前の目であった。

「今日お医者様の所へ行ったら日が決まったのよ。」

「そお……。でいつなの？」

「来週の今日よ、程んど準備は終わつたし後はおとなしく待つばかりね。」

私は少し安心したせいもあるであつた。日以來元氣を取り戻した。

「来週の今日か……。それなら僕も気持ち落ちつけなければならぬね。それに随分お母さんには手をやかせたし……。」

「何を言うのよ。親としてあたり前の事じゃないの。天にも地にまたった一人の子供なのよあんたは。つまらぬ心配はしなくて

もいいのよ。私が全てやってあげるのだから。」

私はこの時ようやく私が病院に入れられ、そして手術を受ける身なのだという事が実感として沸いてきた。そして次には私の目の裏に自分がどの様な体になって帰って来るかありありと浮かび上った。

「このあたりをこう切られるんだね。」

私は言うとはなしに左の肩甲骨の下から心臓のあたりまで右手を回わしてさわつてみた。自分に言いしかせる為であつたかもしれない。私はまだ子供の頃一度心臓の手術を受けた患者の体を見た事があつた。ちやうど左肩甲骨の下のあたりから深い傷が赤黒く走っていた。私はその痛々しい傷を見て子供ながらに何かを感じない訳にはいかなかった。私には分る、あと何日かしたら私の体があつた患者と同じ様に切り開かれるのを……。そしてその後には私はこうして今、手で触れた所を深い赤黒い傷が走るであらう。そう思うと体中が冷え冷えとして来るのを感じた。この体を切り開かれる事はもはやはっきりとした形で私に迫ってくるのであつた。私は正直なところ恐しかった。あの深い傷が残る事自体はそうでもなかった。しかし今となつては自分の体を傷つけたくないという本態が知らせた恐怖感、その様な明確なものが私の芯から動揺しているのであつた。そしてハッとして手を離さずにはいられなかった。それはほんのわずかの間であつた。私は初めは冗談のつもりで言っているつもりであつた。しかしその言葉は私にとってはとても冗談で言えるものではなかった。私はその途中で我に帰り、そして何となく氣まづなつた。母と視線が合った時は内心を見通された様にさえ思われた。私は無理に自分を殺し辛うじて笑つた。

「今は体の調子はどうなの？」

「どうつて？ そうだね少し目まいがする事もあるけれど 本当の事を言つてこの二・三日ずっと寝れないんだ。」

「それはよくないわ。でももう安心したでしょう。あともう少しで楽になれるわ。」

「そうだね。あと一週間で……。あと一週間で……。」

私の声は最後の方へ行くにつれ小さくなって行くのが自ら分つていった。

私はその夜は早く床についた。私はなかなか寝れなかった。やはりあの事が氣になつてた。この二・三日は就寝した事は程んどなかった。特に今夜はそれがひどかつた。ベッドがものすごく柔く感じられて、体中が沈みそうであつた。あと七日たてば私はこの部屋でこうして寝る事もなくなるだろうと思つた。そう思うと今までずっとこの部屋で寝ていた事はまるで嘘の様に思えた。私の目の前は、この深い闇と同じ様に真黒であつた。もうこの闇が永遠に消えないのではないのか、こうして私は黒の世界に犯されて行くのではないのかと思わずにはいられなかつた。そして病院からの事をじつと考へてた。まさかとは思つていたのにこんなに急に言われるとはいささか私もあるであつた。しかし今は何とも言えない不思議な気持ちであつた。ただ、今は黒い闇の中でじつと考へているだけであつた。きつとこの闇の中で活動しているのは私の神経のみなのであらう。あの時から私はいつも私だけの事を考へていた。優しい母も私の中にはもういなかった。私の為にあんなに動き回つた母は哀れでもありその反面、こんなに強いのかと思わずにはいられなかつた。病院ではきつと泣いていたのだらう。私を手離すまいと必死になつてい

母はこれこそ親が子供に与える愛情そのものであつた。それなのに私は全くそれらの事の意味が正直なところわからなかつた。実際にこうしている私自身さえ何とも言えない気持ちになつてた。考える事はもう決まつてあつた事であるからそれよりは私は思い出していたかつた。ただこうして思い出す事によつて何か恐しさから気持ちに離れればと、本当はそれだけで精一杯だったからである。不思議に私は未来を考へた事はなかつた。いつも過ぎ去つた過去の事ばかりであつた。私はいつも過去の悪夢に溺れていた様なものであつた。そうだ、私には永久に未来はないであらう。こうして考へている事がもう過去になつてしまつたではないか。私はそれなのに何をしていたか？ 私は目を閉じた。その中に鮮やかに浮かび上つたのは私自身であつた。そしてそのうち浅い寝りが私を包んだ、私は夢を見た。それは子供の頃からの夢であつた、父のない子として世間からは偏見の目を向けられた私自身が主人公だった。そしてその子が大きくなるといつの間にか長い路を歩いていた。月が出ていた。その冷たい光の中を私は何かに引かれる様にとぼと歩き続けた。悲しくもないし、寂くもなかつた、それどころか顔は何とも言えない安心感でいっぱいであつた、そのうち目の前に家があつた、何の為の家か、誰の家かは知らない、それなのに私はなおもその中に入つた。多くの扉があつた。私はためらう事なく次々と扉を開いて行つた、最後の扉を開いていた時私はハッとした。長い寝台の上に誰かが横たわつていた。私は恐しくはなかつた。ためらわずその人間の上にかけてあつた白い布を取り除いた。小さな窓から月の光さがし込んでいた、月の冷い光に照らし出されたその顔こそ、何と私の顔であつた。



私はハッとして目をさました。私の体は無意識のうちに上半身がベッドを離れていた。私はしばらくは愕然として少しの身動きもしなかった。それから夢だった事に気付くと急に安心が私を支配し、何度も息をついた。あれは幻覚ではなかったのだ。頭が激しく痛んだ。ともすると風邪をひきこんだのかもしれない。体中が何故かだるく、少しでも動かそうものなら節々に使い過ぎた後の様な感覚を覚えさせるのであった。私はだるい体をいたわる様そつとおお向けにしてそのまま、また身をベッドの中に埋めた、わずかの時間だったが腹中の筋力が急に緊張してぶるぶる震えていた。ベッドにはわずかのぬくもりがあった。その柔かさや暖みが恍惚感を感ず。今までの体の疲れが忘れられるくらい甘美なものだった。しかし、ちょっと肩を動かした時、私はひどく寝汗をかいているのに気づいた。それがわかると急に肩から背へかけて寒さを感じた。私はまた起き上ると肩を上下に動かし着ていた寝巻の上着のボタンをはずし手早くそれを脱ぐと、首から胸、それから背と手のとどく所をタオルを手さぐりで取って汗をふいた。それがすむと私は上半身は裸のままベッドにもぐりこんだ。大して寒くはなかった、それよりもかえって私の周りの空気が何とも言えない暖かみを持っていた。それが皮膚には快かったのであった。私は闇の一点をみつめたまま母に言った事を思い出した。いつかは私のこの左の肩甲骨の下から脇へかけて切り開かれるのである。私は何とはなしにその部分へ左手をやってみた。思いもよらず手が冷たかった。このあたりにあの恐ろしい傷跡が走るのであらう。私にはわかっていて。いつかはきつとこうして手術台の上に乗せられて運ばれるのを。その時私は何を考えるであらう。ちょうど指先があらば骨のあたりを上下してい

もない涙を流した。自分ではそれを止めようとしているのかえって止まりそうもなかった。そうなる今まで張りつめていた物が急にふれて、もうどうにもならない様な気持ちだった。深く息を吸うと咽から鼻にかけて何かがつき上げてくる様だった、私はそのまま子猫の様に背を丸めると声を上げて泣き出した、最初はどうして泣いたりするのだろうか自分かひどく腹立たしく、恥しかった。誰が見ている訳でもないし、聞いているはずがなかった。そう思うとますます嗚咽が激しくなった、そうしてしばらく感情のなすままにしていたが、いくらか涙が止まると、気が楽になった。目のあたりがいやにはれぼったく感じられた、頬が妙につばる様であった。私はようやく元の様になった、鼻がつまった様に息苦しかった。顔中がほてっていた。しかしどういふわけだか全く平静になれた、そして精神的なひもじさを感じられなくなった。私は大きく呼吸をすると、頭を動かした。そして単純にも何故泣いたりなんかしたのだらうと思った。しかしそれよりは何となく今まで心の中でもやややしていたものがいく分暗れていった様に思えた。そしてフト心の奥で、われとわが身の処置をつけようと言う考えが頭を持ち上げた。しかしすぐそれを否定するものがあるはずなのに自分でも全面的に否定する事は出来なかった。身の力の限りでその事を考えこまない様に努力したが実にその考えは根強かった。自殺だなんて馬鹿げた方法だと思っているのに一方では変に真険になっていた。そしてどうしても頭から脱けきらないのである。私は寝れば、じきにつまりらぬ誘惑は忘れるだろうと思った助かる人間が何故自ら命を縮める事があるのだろうかとひそかに考えもした、苦痛であったが、こんな悪循環のくり返しが続いたのではとても寝れそうもないだらう

た。その骨の間に動くものがあつた。それもごく弱々しく。いまわしい病をひきおこすそのものであつた。私はそう思うと、思わず手をひっこめずにはいられなかった。とてもこれ以上手を触れている事は出来なかったからである。別に痛いわけではなかった。正直な所、気味の悪さと恐ろしさであつた。

こうしているうちに私は明晰に物が考えられなくなつていった。何よりも恐ろしさが先に立つた。特に私には後に跡を残すには目をさむけたくなる様に嫌悪を感じていた。その物があと少ししたら私のこの体、こうして手に触れている皮膚の上に鮮かに跡を残すのである。もういくらあがいたとしてもそれからはのがれられないだらう、手術の恐ろしさより私にはあの不気味な紅黒色の肉の盛り上がりたままなかつた。もちろんいつかはこうなるのだと覚悟はしていたのに。それはあまりにも甘かつた。他人事の様にはかえなかつたからなのであらう。それなのにこうしてそれが迫つた今、私は思ひもよらない恐ろしさにおののいているのである。私にはもう何の望みもなかつた。昼間は母を前に何事も無い様に表をつくらつたのに……。そう思うと、自分がやけに空しかった。いやそうではない。あの時は多からずとも母を見ていたら、もう何でも無い様に思えたからであつた。私はこうして一人で闇の中に沈んでいくとむじょうに心細く、それがかえって恐ろしさをかきたてたのであつた。頭がぼんやりして、その次に心の中では同じ事がくり返されていた、そしてあの傷が鬼火の様にちらちらと目の前に見えてくるのであつた。私はすっかり気が転倒した。そして自分がこの先どうなるのかわからなかつた。何にもする事が出来ず私は一人なのだそう思うと考える間もなく目の下のあたりが急に熱くなつた。そして私は思つて

う。こんな事が続いてもう三日にもなるのに、やはり私のどこかでその事を思いつめているのだと今さらの様にわかつた。もはやこの事を考えないではいられなかつたのである。私はじつとさつき見た夢の事ばかり考え続けていた。あの中では私は死んでいた。とほとほと歩いていった私は死んだ私を見て何と驚いた事か、私にはわかつていた。止めようとしても一こうにおさまらない、この考えは。私はきつと死ぬであらう。だから、もうあの夢を信じまいとする気持ちは少しも起こらなくなつてしまつた。手術を受けたところで私の生命の活動はそこで止まつてしまふに違いないのだと考えた。自分ではきつとそれがわかつた。そうなれば何も悲しい事はなかつた。さつきまでは、どちらともわからずただ何というものはなく不安だつた。私は考え続けた。私の世界——あの唯一の世界は私を待っているであらう、死ぬというよりはもっと楽な形で私の頭の中に入ってくるのだつた。私はいつかは死ぬのであつた。それがただ私の場合早すぎた——それだけの事であつた。それを恐ろしがたりする理由など問題ではない。死んだ後の事が明らかにさえていければ何も恐怖感などは沸いてこなかつた。そしてその事を考え続けているうちに私の心はすっかり平静になつていた。

翌朝、私は早々と目をさました。といつてもあれから二・三時間寝入つただけであつた。カーテンの間から入ってくる陽が私にはひどくまぶしかつた。こんな気分の良い朝はあれから何日ぶりなのだらうか私は起き上りながら考えた。私の心は落ち着いていた。私はその日は学校を休んだ。母にはいろいろ身の回りを整理する為だと言つた。朝食の時も私は全く何事も無い様に極自然にふるま



った。しかしそうはいってもいろいろと私の事を気使ってくれる母を見るのはさすがの私もつらかった。八時半には母は出勤する仕度をしていた。いつもなら私から先に家を出るのに、今日は一人で私が家に留るのであった。玄関の所に先に行つてハイヒールをそろえて出しておくと、ひどく驚いた。母と私は門のところまで来ると新聞を取つて軽く目を通した、それから私にそれを手渡しながら言った。

「じゃあ 行つて来ますからね。しっかり留守番をしていてよ。」

いつもの通り五時半には歸つて来ますよ。」

「うん行つていらっしやい。」

母は押戸を開くと外に出た。私はそんな母を見て胸が痛んだ、ただ一人の子供がその日に何をしようとしているのか全く知らなかったのである。私はいつまでも後ろ姿を見送った。ここで取り乱しては何もかも終わりである。もうこうして母を見る事はないだろうと思つた。そして母の姿が見えなくなるとそれをふり切る様にして家の中に疾け込んだ。

私はまっすぐ部屋の中に入ると窓をあけて風を一杯に入れた。空がどこまでも碧く高く広がっていた。それから本棚から机から全てひっくり返していろいろなものや、余計な物はことごとく捨てた。本の一冊にしても何やら書きつけた紙きれの一枚にしても、私は何に使つたのか忘れてはいなかった。そして部屋中隅々まで清めると私は庭に出て手紙やその他の物を燃した。手紙は封筒から出して、一枚一枚丁寧に燃した。この紙切れが私を喜ばしたのもずっと昔の事のように思えた。数十枚の手紙も何もかもしばらくするとほんの少しの灰になつてしまつた。そして風に吹かれて何のあとも残さず飛び

散つていつてしまつた。

私は家に入ると一つ一つの部屋を見て回つた。別に別離をする等という行々しい物ではなかった。そんな事をするのは私はいやだつた。ただ見ておきたかつた——それだけである。居間も和室も廊下も全て物珍しいわけではなかった。そして洗面所に入ると手と顔を洗い、鏡を見ながら髪に念入りに櫛を入れた。それはどう見ても外出する時の仕度そのものであった。台所を通つて出る時入口の柱の傷を見て私は一瞬立ち止まつた。それは私の身長伸びた事を知るための傷であつた。随分多くつけられてあつた。知らぬ間にこんなに成長したのかと思うとやはり胸がしめつけられる様であつた。最後に母の部屋を見た。子供の頃はここの部屋の隅で一日を過ごした事もあつたが、あれから何年と入つた事はなかった。襖を開くとすぐ樟脳の香が鼻をついた。中へ入つていけないといわれてはいないのに、誰もいないこの部屋に足を入れるのはひどく悪い事の様に思われるがそれなのに入らないではいられなかった。子供の頃の思い出とは少しも変わっていない。ただ正面の三面鏡が閉じてあつた。あまり装飾の少ないせいか六畳間が広く見えた。たんすの上の置き時計が十一時半をさしていた。三面鏡のそばに行くとそれを開いた。三人の私が本物の私を見ていた。かなり異様な感じを受けた。すぐ前の小さな皿にはヘアピンが数本入つていた。私は簡単に囲りを見回すとすぐ部屋を出た。出る時ちょっと立ち止まつてそれから誰もいない部屋に向かつて言つた。

「それじゃあ お母さん僕は行きますからね。」

「私は部屋に入るとごく自然にしておこうと思つた。だからドアに鍵もかけなかったし、窓も少しあけて、カーテンは隅に寄せておいた。さつき整理した机の上には本を置いて適当に開いておいた。こうすれば少しの散歩ぐらいに見えるだろう。それからベッドをきちんと作つた。ここが私の休ませる唯一の場所であつた。そしてもう一度台所へつてコップを出した。水道の栓をひねるとそれになみなみと満ちた。そしてこぼすまいとそつと部屋まで戻つた。机の引き出しをあけるとかねて用意してあつた小びんを取り出した、それからいつも発作が起る時飲む薬を出す、ホッと息をついた。いくらか心を平静にしているつもりであつてもやはりいざとなると何か興奮せずにはいられなかった。私はごく普通に平常使用する薬を口に含むとコップをつかんで、一息にぐつと抑つた、そしてまた息をつくときどきどきしているのを感じた。だがもう一刻も、ためらう事なんかない。すつかり落ちついたのだという私自身の声にびんの口を開きまず半分を口に入れた少なくとも二十錠はあつただろう。ぞつとする様な感覚が舌の上を走つた。そして無意識のうちに水で咽に流し込んだ。ちょうど道食道のあたりを通過する時はぐつと重い固まりが落ちて行つたそしてそんな事を三回くりかえした。二びんを空にすると、一つをまた引き出しに戻した。後は頭がふらついて、しきり事が出来ず、すぐベッドに大の字になつてしまつた。まだはつきりとした効めはなさそうだったが、あとは何も考えずじつと目をつぶり時を待てばよいのであつた。

私はその時にいろいろの事が頭に浮かんで消えた。とうとう私はこんな事をしてしまつたのだ。何も後悔はしていない。昨夜私はこうし同じ床の中で決心したのである。私はそれまではつらかつ

た。あの恐い傷跡を思い浮かべるときに身の縮まる思いであつた。私は恐しかった。この体にあんな傷がつくのはいやだつた。それが恥かしかつた、体裁が悪いからでなく、私のこの体が病のために切り開かれるのがたまたま恐怖をそつたからだ。切り開かれれば直ると、わかつていた。少なくとも最初はそう信じていた。それなのにも思われてもしかたあるまい、私は身心共に健康ではなかった。実にもう人間だつたその恐いさを脱ける前に逃げたのだ。そう思われてもしかたはあるまい。しかし私が自らこの身を処置するのはそんな簡単な事からではなかった。少なくともよく考えこんな結論に至らせてしまつたのである。あの夜私は自分で手術を受けても死ぬのだと何かが知らせた。私はそれを信じた。そうだ。いかなる方法を得ても私は死ぬのであつた。不思議にそれが手術台の上で強いられるのはたまらなくいやであつた。この弱い肉体が切り開かれそして死ぬ事に激しい怒りを感じた。どうせ死ぬとわかつたこの身なら深い傷など作る前にこの手で処置をつけたかつた。自分自身が可愛かつた、可愛がりすぎて殺してしまつたのだ私のこの世における存在を考えた。私は生まれながらに陰を背負つた子供であつた。私はいつとなく外界から圧迫を受けた。理由は私が目陰の子であつたから。それ故私は物に感ずる見方、全ては他の人間とはちがつていた。そしてその上にいまわしい病がついて回つていた。私はその病に、圧迫に押しつぶされたのだつた。それは私があまりにも弱すぎたからであつた。私の全くの希望を持ったものは崩れて行つた。その廃虚に立つて、いや、私が自ら転落していったのだ。そして転落の後、立ち上る事も出来ず私の選らんだのは死であり、あの世界であつた。私は十七年間実に辛かつた。人の一生を、味わう事



のない辛さを子供の頃からなめていた、今思えばまるで十七年間に苦しみぬいて来た事が悪夢の様に思えるのであった。私は死を選んだ。それは決して逃避ではない。私は私自身をブラトニックなあの世界へ移す―それだけの事であった。だから何も罪悪めいた気おくれはなかった。こうして身を横たえている今、この安心感ほ十七年間に一度も知った事のない何物にも代えがたいものであった。結局私はこの社会では生存してはいけない人間だからだ。だから本当の自由を私自身に求めた。単なる快楽の為ではない。より良い物を求めたからの事である。あの世界だけが私の永遠の世界なのだ。何も心残りの事はない。私はこの空しさを知っていた。完全な物は何もなかった。外見のすばらしさについてふらふらした私は全く馬鹿であった。

あの世界には私を待っている人がいるのだ。それはこの世の人間ではなく善の意志が作り上げた最高の人間像なのだ。私は愚かな心から一人の女に迷った。あの美しい中にさまざまな見たのは、女の中にひそむ悪魔であった。何も知らず外見に踊った私を彼女は自ら選びそして捨てたのであった。彼女も結局は私の外見にひかれたのだ。馬鹿な女だと思ふのもやはり彼女はごく一介の女だったのだらう。それを高望みした私も私であった。私の素上を知って内心で笑ったのは、ずっと昔に私を父なしといつてなぶったあの雀たちによく似ていた。所詮は私たちは他人であった。それを愛とか信とかいうごく美しい物を着たエゴイズムが私たちを近づけただけであつた。その間には絶対と名のつくものは存在なんかあるはずはなかった。それはむしろ当然であつただらう。私は彼女の本心を知ってからはまるで廃人同様であつた。それが私をこんな風にする準備だつ

心臓は動きが序々に弱くなつて行くのがはつきりとわかる。しかしその心臓も、もはや私には何の必要もないのだ。何も恐しい物はない。ただ私には希望と憧れがあるだけだ。私にはわかる。あの世界が私を呼んでいる事が、あの世界が十七年間生きた私の最後に帰る唯一つの所なのだ。邪念も疑いもない。そしてあの中には私を待つ人がいる。私の作り上げた人間なのだ、それは母でもない。高村淑子でもない。私はその人のもとへ行こう。急に寒さが襲つて来た、そろそろ効めが現われてきたのだ。目はすでに見えなくなつた。頭がぼんやりとして物事を考える事はできなくなった。弱くなった心臓の動きが急に耳に聞こえた。しかしそれもまた潮が引いて行く様にしだいに遠くなった。体がずるずると地の中に引きこまれて行く様だ。そう思ううちに私の頭の中の考えがすうっと消えた。

私は気がつくとはんやりとあの世界に立っていた。とうとうここに來てしまったのだ、霧がかかっていた、一番最初と全く同じだ。私は初めて自由になったのだと思つた、こんな解放感に浸るのはおそらくこれが初めてだらう。私はこれからは何の気かぬも恐れもなくここにいらだらうと思つた。そして前を見ると一人の人間がやつて来た。私の作り上げたただ一人の女だった。しだいに近づいて来るとその顔がはつきりして来た。前まで見た人間には誰とも似てはいなかった。――これが私の憧れていた求めていた物なのだ――私は何とも言い様のない感動にも似たものを覚えた。女は私の方へやつて来ると両手をさしのべていた。黒い目に一杯涙をたたえた。

――あなたは馬鹿ね……。とうとう來たのね。

たのだらうか？ 今は何も考えず、悪人と裏切られ、ただ小川に自由を求め、死の床にひたすら憧れた。あの水車小屋の青春そのものであった。しかし今となつては高村淑子に対する憎しみも何もわからない。あれはあれでいいのだ。その後彼女がどうしようとするの知つた事ではない。もうみじめな気持ちも、空しさもなくなった。私は静かに待てばよいのである。ただ私を一生頼り、私の為に生きて来た母が氣にかつた私を失った母はいつたくなるだらう、今朝の事を考えると心は痛むのだった。不幸だった、ふとした事から私に生命を与えた父なる人を私はとうとう知らずに十七年というわずかな一生を終るのであった。母の事はいささか氣にかかるがそれよりも私には、あの世界に対する憧れの方が強かつた。そんな気持ちで全くの雑念を圧倒した。だが今さらどうというのではない。私は自ら選んだのだ。こんな安心感をどうして他で得ようか？ 今この広い地の隅で一人のいじけた人間がこの世を去つて行くのだつた。一瞬一瞬にまで私は持ち得る物を賭けた。実に短かつた日々であつた。いつも自分自身を精神的にも、肉体的にも圧迫し、そしてその末にこうなるのは、私に生まれながら持ち合わせた定めというものだらうか、もしこんな風にならなかつたら決して死などは選ばなかつたに違いない。しかし私の心は決まっていた。もはや未練などとは一つもない、私はこうしてじつとしていればよいのだ。私は今だかつて神の存在を信じた事はなかつた。それをしないうまま終わるのは心に残る物があるが、本当に神なるものがあるならばこれから一切はその者に預けよう。それが自ら命を断つ私の何よりの償いだと思ふのだ。もう少しで私の全ての生命活動は止まるであらう。神経も何もかも静かに止まって行くだらう。私を一生悩ました

五時半になると、母親が戻つて来た。程んど息子の入院の準備も出来ていくらか安心感もあるらしくホツとした様な顔つきであつた。玄関を入ると家の中が暗く人気がないので覚え、ちよつと眉を寄せた、きつとまだ息子は寝ているのだらうと思つて部屋には行かなかつた。そのまま自分の部屋に入つて着替えをすませると洗面所にいった。彼女はいいそと夕食の仕度を始めた。しかし一時間たつても息子が出てこないで不信に思つた。それから三十分たつてもいっこうに出てくる様子はなかつた。いく分いら立ちも手強い彼女はしびれを切らして息子を起しに行つた、戸口で少し止まつた。声をかけても返事がなかつた。また同じ事をした。彼女は戸をあけた。中は暗かつた。窓があいていていさか寒々としていた。明かりをつけると彼女は驚いた。寝ていると思つた息子はベッドにはいなかった。机を見ても本は読みかけた様に開かれてあつた。

――どこに行つたのかしら？

彼女は急いで窓をしめた。その時スリッパの先に小さなびんがころがっているのに気づいた。何げなく拾い上げそのラベルを見て彼女は顔色を変えた。

――まああの子は本当にどこに行つたのかしら？ 二・三日寝れないとか言つていたのに。こんな物を使つていたのね。可愛想に……。

彼女は体中の力が一べんにぬけた様な氣がした。大きく息をつくると急に自分自身が悲しくなつた。それよりも息子の事が心配だつた。そしてしばらく立っていたが力もなくくずれる様にその場に座ると哀れな母親は泣き出した。



## 随想 山崎君の「死」が持つ意味

手嶋 孝典

十月十七日。山崎博昭君の中央葬の式場のなかに僕はいた。山崎君とは直接に縁の無い筈の僕が、冷たい雨に打たれながら葬儀に参列したゆえんは何であったのか。葬儀に使用する角材が警備当局によって半分に切断され、さらに参列者の一人ひとり当局によって面通しを受けるといふ、異常なまでの弾圧を身をもって経験するなかで、僕はもう一度自問する。

十月八日。あくまで戦争に反対するが故に、佐藤首相の南ベトナム訪問にも反対であった僕は、何ひとつ有効な反対運動もできないまま、全学連の実力阻止行動に不安と期待の交錯した複雑な気持ちで、日曜日の午前中を過ごしていた。テレビの臨時ニュースで山崎君の死を知った時、僕は佐藤政府に対する怒りと、何も行動しなかった僕自身への謙虚の気持ちでいっぱいになった。さらに、その死因が学生の運転する装甲車による轢死であるとの報道と嘔然とすると同時に、何か釈然としないものを感じた。僕は六十年安保斗争のなかで倒れた権美智子さんの死因が、権力によって歪曲されたという事実を思い出さないわけにいかなかった。そして、それは山崎君の死因への大きな疑問として急速に拡がっていった。

翌朝の新聞は、全学連の斗争から一切の政治的本質を抜き去り、「狂気・暴力・無秩序」の「暴徒」の暴走として扱っていた。また、その日の夕刊では、警視庁公安部が撮影したと称する「運転学生の写真」を「バックする姿勢」、「ヘルメットの男」、「ひき殺し確

認」などという見出しを付けて掲載した。その記事と写真は、あたかも装甲車を運転している学生が山崎君をひき殺したかの印象を与えるに十分なものであった。洪水のように流される警察発表を一般市民が無批判的に受け入れる下地は、すでに整っていた。しかし、僕はそれらを全面的に信じる事ができなかった。僕は事実を知りたかった。

葬儀のなかで総評の弁護士、小長井良浩氏は死因調査の報告を行った。小長井氏によると、遺体が収容された牧田等二病院の院長は、死因は脳内出血であり、他にはさしたる外形的所見はないと確言したそうである。また、小長井氏は棺の蓋をあげ遺体を見たが、轢かれた跡のようなものは見あた

なかったとも証言している。さらには、死体を検死した監察医も、十月八日付の死体検案書で「脳挫滅、胸腹腔内（推定）損傷の疑い」として、外形的な異常のなかったことを認めているそうである。

これらの証言だけを考え合わせても、山崎君の死因があつた重い装甲車（自重九・四トン）によるものとは、とうてい考えられない。事実をまげた警視庁の発表と、それをそのまま流した商業報道機関の報道が、学生による轢殺流に世

僕は考える。

僕たちは日常の見せかけの平和が、ベトナム戦争と構造的に深くかわつているということを認識することによって、僕たち自身が「何をなすべきか」という問いかけを常に自らの発動の拠点としなければならぬと思う。そのような意味において山崎博昭君の死は、僕たち一人ひとりへの厳しい問いかけとして位置づけることができる。

論を固めるための悪意に満ちた政治的陰謀であつたことは、もはや明らかであろう。

権力とマスコミの世論操作によって仕立てあげられた全学連への非難は、かなり厳しかった。しかし、僕は「学生暴徒」、「赤いヤクザ」の「暴走」としての非難に同調するわけにはいかない。学生の暴力という一点に問題をしばりあげ、あの日他の誰もが果さなかった佐藤訪ベト阻止の行動をとった人々に「暴力分子」なる汚名をかぶせることにより、我が国のベトナム侵略戦争加担という本質を隠そうとする支配層の巧みな陰謀を見破り、それを粉碎しなくてはならないと考える。

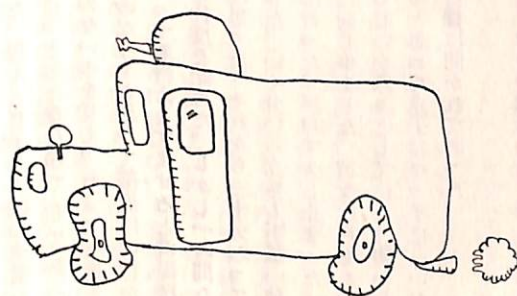
数千名の完全武装した機動体に対して、ヘルメットをかぶり、角材を振りまわし、石を投げた学生たちを「暴力」とし非難する時、五〇万のアメリカ軍がベトナム人民に対して、今なお昼夜の別なく加えている爆撃や砲撃が、完全な「大組織暴力」であることを僕は

ちは好都合にも忘れていたのではないだろうか。

アメリカ帝国主義の激しい爆撃にもかかわらず、英雄的な戦争を続けるベトナム人民をたたえることはやさしい。しかし、ベトナム全土を焼きつくす残酷な武器・弾薬の多くが日本で製造されているという一点をとっても、それは抜き差しならない問題を僕たちに突きつけている。ベトナム人民への「同情」や「支援」の立場は、自

らの厳しい責任を回避するごまかしに過ぎないと思う。

僕は十月八日の羽田斗争に参加しなかった痛恨をもって山崎君の葬儀に参列し、さらに羽田斗争の本質をとらえる作業を進めるなかで、少なくとも今まで述べたようなことを認識した。しかし、これらの認識が単なる認識としてとどまることは、絶対に許されないと





がらんどうの中の女の子

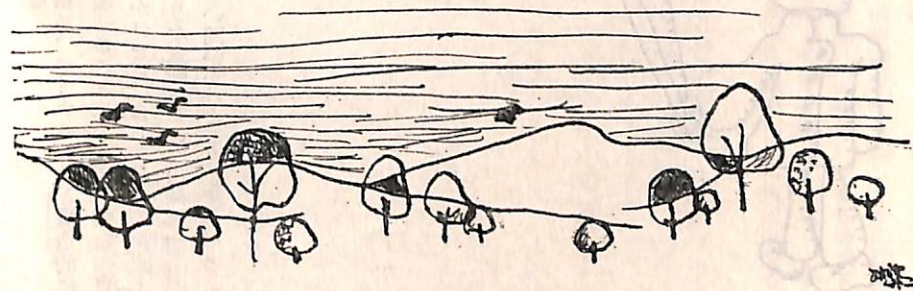
木田 伴子

「まち」それは大きながらんどうでした。  
「壮大な夕陽」を思わせる音楽と  
ざわめきがただひろがっていました。  
女の子は風の中の紙くずのように  
「まち」を通りぬけていきました。

春の風がほつたを傷つけた夕暮に  
むこうに消えてゆく後ろすがたを  
女の子はみつめていました。  
ほうっとくらくなっていく方へ  
消えてゆくすがた

「なぜ あなたは私にうしろすがたを  
みせて行ってしまうのでしょうか？」

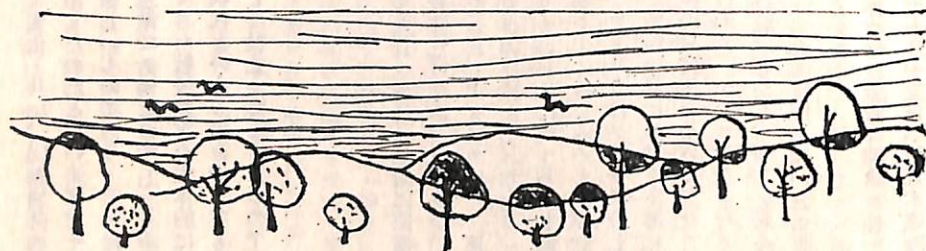
みんな終わってしまった時  
女の子の部屋をおとつれたのは  
闇でした。  
闇がほつたにふれた時は  
とてもやさしく思いました。  
女の子をなくさめてくれるのは



闇だけでしょうか？  
いいえ、銀の星がギンキラという  
ぐるぐるまわる音楽も  
なくさめてくれます。  
銀の星がまわっているがらんどうに  
はいついていけるでしょうか。

角山 正之

若者よぶつかれ  
苦難にぶつかれ  
苦難は我がままから来るノ  
それに直面した時こそ  
自分を鋭く反省する  
またとないチャンスなのだ  
若者よカバールをとれ  
うぬぼれを去れ  
素裸になるのだ  
ホラ もう道が開けている





## 戦後教育

## 序

戦後は、日本国民の虚脱と空白の内から始まった。しかし戦争のもとして、貧困と飢えと死の間を、苦難と悲しみを背にかついで、さまよった国民の大部分の平和への幻想は、より強いものとなって戦後現われた。その幻想と、支配者の意志との争いが、戦後日本の重要な歴史ではないかと私は思います。その意味に於いて、戦後の始まりにおける民主化というものを、ただ上からの、という考え方には同意しかねるのです。この幻想の力の重要な働きは、この現代になってもなお効力を発していると思うし、この力がもしなければ戦後日本は、今の形を成していないと考えます。

アメリカの日本占領は、旧来の「植民地従属国」とは異なった特徴をもつ新しい「占領による従属化」として始まった。日本占領下に於けるアメリカの政策は、二つの矛盾した側面を持ちながら、ある意味に於いては統一した働きを持っていました。そのある意味とは、即ち「従属化」ということであります。そして「二つの矛盾した側面」とは、アメリカに敵対する可能性をもつ日本軍国主義を崩壊させる意味の民主化政策と、日本の社会労働運動の、資本に対する勝利を防ぐ為の非民主化（弾圧）政策であります。この二つの政策は、戦後直後前者の意味においての政策が主流であったが、二、三年もすると、後者の優位が、より急激なものとなってあらわれて

「針」を公布した。この内容は、国体維持を基礎に、民主主義による平和的文化的道義国家の建設であった。それは同年十月二十二日公布されたGHQの「日本教育制度に関する管理政策」その主旨を符節を合わしている。文部省がなぜGHQに先だって方針を公布したのでしようか、この点にも政治の微妙な動きの重要性があります。問題が少し飛びますが、日本の官僚機構の点に、この動きの主要な意味がうかがえます。日本の官僚の特質に次の様な事があります。日本の官僚は、独占資本や地主の利益に奉仕するといっても、決してこれらの階級の機械となっていたわけではなく、その官僚自身が権力を持っていた。そして官僚支配における上からの極度な権力的な統合、上からの高度の政治化が、同時に下からの力を絶えず非政治化するといった関係を作り出していたのです。そしてそれらは天皇への忠誠の基に行なわれていました。

戦後、戦争責任を問われた他の主な勢力が、ともかく初期には、致命的な解体の打撃を受けているのに対し、官僚機構だけが、なぜ強靱に生き抜いて、現代の官僚制を作り上げているのでしょうか。その主な理由は、ボツダム宣言の実施が「間接統治」の形式をとったところから、当然、この政策を実行する担当者が、日本側に求められることになり、その唯一の責任者となったのが、官僚機構だったわけですね。ここでなぜ、GHQは、官僚制を利用しながら、彼らの戦争責任を追及しなかったのでしょうか。それは、前に述べたように、官僚は行政の技術機関ではなく、権力的支配の重要な政治的存在であったからです。官僚制の温存に役立ったものとして、国民の底流に、官僚機構の中立的性格に対する一種の信仰が根強いことも上げることができるのですが、この点は、機会を改めて書きま

きました。その変化は占領として変化と共に、国際情勢の変化というものがより重大な力として作用したのだと思います。それはアメリカが予期していたもの以上に激しいものであり、それに対処する為に、日本の存在価値の変化も急激であったでしょう。ここでは、そのような変化と共に歩んできた戦後教育を主体的に述べ、その変化をより具体的に認識し、現代というものを少しでも歴史的に認識する為の、何らかの方法として役立ってもらえるのではないかと思います。

## 本論

昭和二十九年八月六日、追って九日・広島・長崎に原爆投下。この原爆投下は、ただ日本降服の意味だけであつたろうか。同年二月四日・十一日にヤルタ会談が行なわれ、アメリカは、ソ連軍の対日参戦を望み、密約が行なわれた原爆の完成が七月六十日。十七日にボツダム会談が行なわれ、アメリカの日本に対する宥和政策の表面化。こんないきさつと、世界情勢をよくみてみると、原爆投下の意味の裏が理解ができる。それは、アメリカはソ連が参戦して日本が軍事的に破滅する前に降服させ、戦後世界における主導権を握るには、独力で日本を屈服させ、ソ連の発言権を小さくさせたいと考えたものと思える。この事は戦後日本の一つのカギともなる重大な事だと思ふ。そして八月十五日、終戦。しかし、新しい戦争はすでに始まっている。それは、俗に言う二大陣営間の戦いとも言つてよいだろう。そこには少し語弊があるのだが。

同年月二十日「時局ノ変転ニ伴フ学校教育ニ関スル件」次官通牒を地方長官と学校長へ発し、同年十月十五日「新日本建設の教育方

す。元に戻り、教育行政の問題に入ります。

いま書いたもので、ある程度当時の文部省が理解できていると思います。ですから次の様な結論が引き出されると思います。即ち文部省がGHQに先だって、方針を公布したというのは、GHQにとって日本の自主性を尊重し、GHQが解放軍であるかの如く、日本人民の目をくらまし、GHQの方針を受け入れさせやすくさせることです。それと同時に日本の支配者のとる摩擦を少なくすることもあります。このように、次第次第にGHQの基本政策をスムーズに受け入れる体制がつくられていったのです。GHQのいわゆる教育民主化政策は、同年十月二十二日から同年十二月三十一日までの四つの指令と、昭和二十一年三月初旬に來日した第一次アメリカ教育使節団の報告書などに基づいて行なわれ、昭和二十二年三月教育基本法・学校教育法の形となって表われた。昭和二十年十月二十二日の第一指令「日本教育制度に対する政府宛管理政策に関する件」。同年十月三十日の第二指令「教育及び教育関係官の調査除外・認可に関する件」。同年十二月十五日の第三指令「国家神道・神社に対する政府の保証・支援保全・監督に公布の廃止に関する件」。同年十二月三十一日の第四指令「修身・日本歴史及び地理停止に関する件」。この四つの指令は第一に軍国主義・超国家主義思想を排除し、第二に民主主義・平和国家の建設という主張が貫徹されていたが、積極的育に如何なる教を行ふべきかについては、何ら指令していないその点で消極的なものであった。次に第一次教育使節団にの事について述べますが、その前に日本側の教育関係の出来事について書きたい。昭和二十年十月、総司令部の指令とは関係なく文部省に、公民教育刷新委員会が作られた。この会の目的は、新しい教育の根幹となる



べき公民教育の方針や課程をつくることで、委員会は、東大教授戸田貞三を委員長とし、大河内一男・和辻哲郎らによって構成されており、代議政治・国際平和・個性の完成・正しい世界趨勢の認識などをどのように公民教育の課程としてとりあつかうかを明らかにした。この委員会が昭和二十年十二月二十二日に出した答申(二号)には、文化国家・平和愛好国家として道義の昂揚につとめるという方針とともに「普遍的にしてしかも個性豊かな文化を創造発展」して世界平和と人類の文化に貢献しなければならぬことがあげられている。この文章は、後の教育基本法の前文にも同じ形で掲載されています。もう一つ重要なものとして、昭和二十年の暮、GHQの民間情報局(CIE)の指示で、文部省が編成した教育委員会が作られました。この会は、昭和二十一年三月に来月する第一次アメリカ教育使節団と対応して日本の事情を述べ、意見を交換するために作られ、委員長は南原繁氏で総勢二十六・七名の会でありました。この会はただ使節団との意見交換だけでなく、新しい教育制度についての建議書を、秘密文書で文部大臣とストッダード使節団長だけに出したそうでありました。その内容は、戦前・教育勅語が教育の根本理念であり、中央集権的な教育行政制度であったものを、新しい教育理念のもとに地方分権的な教育制度にする、教育の民主化・機会均等を考える。といったようなものだったそうでありました。(南原繁の発言)

この二つの委員会の他にも、教員組合全国連盟が結成され、日本教育労働組合が結成され、教師連は自分独自の力を結集して教育の民主化へ全力をつぎこみました。

昭和二十一年三月、合衆国最高司令官の要請した「遣日合衆国教

「これら中央集権的な教育組織は、たとへば極端な国家主義の異にかかるとはなるとも、城壁をめぐらした官僚主義に伴う害悪のために危くされる。」との中央集権制を否定しています。又序文の所においても、「中央集権的な教育組織は、大衆に一つの形式の教育を与へ、そして少数の特権階級のためにはもう一つの異った形式のものを準備するという物である。」とも、欠点を明らかに表しています。

第二に画一的な学校組織であると批判し、「国民学校程度では不確定な所があった。それで国民学校の年限は六年に固定し、無月謝で且つ義務制であり、如なる意味の授業料を取ってはならない。」と現在の小学校を提案した。また国民学校の上に続く三カ年の「初級中等学校」が設けられ、これも無月謝で義務制又は十六才までとして男女共学となるよう提案した。また「初級中等学校」の上に無月謝で入学希望者には誰にでも開放された「上級中等学校」が設けられる事を提案しました。これが現在の高等学校ですが、ずい分違います。そして「教育の目的」と言う所では昔の試験制の教育を批判して次のようなことを言っています。「試験準備という事に支配されている教育制度は形式に随し常套に陥る。それは教師と生徒の側に書一化を助長するだけである。それは自由探求の精神を窒息させ、批判的に判断を加へるという態度を殺してしまう。それは社会全体の利益のためよりも、むしろ狭い官僚階級の利益とを計る権力者の操縦にたわいもなく自分をまかせてしまう。結局この教育制度は時にはごまかしや、背徳行為に誘ったり、あるいは不健全な自棄的行為に走りたてる変態的な競争心を生む。」と昔の試験制度の欠点を明確に表し、否定しています。

育使節団」が五・六日の両日に、来日しました。この一団はジョー・シリデ・ストッダード博士を団長とする総勢二、その他に、国語の改革・成人教育などの面までにわたっている。

これ以上に詳しい内容は、松原高校の図書室にこの報告書の日本語訳の本が置いてありますので読んでもらえれば、幸いです。この報告書は、アメリカ民主主義に基づかれた教育方針の分析であり、これは民主化の理想的真理といってもおかしくはない程、真意に満ちているものと思える。昭和二十年に出された四つの指令が消極的であったのに比べ、はるかに積極的であり、具体的である。しかし、アメリカデモクラシーの土壌は日本ではなく、アメリカである。日本の実情に即応しない部分も多くありうることは、まぬがれ得なかった。このような事情のもとでも、この報告書が日本の戦後教育方針となり、具体的に進められていった。しかしながら今の社会にとって権力の支持する教育理念ではなく、逆に反権力の求める教育理念へと変ったことへの危険性を充分に考えねばなるまい。十七名で、日本における教育の諸問題について、最高司令官や日本の教育者達と協議・助言を与えるために派遣された。この使節団は、四月七日に報告書を発表しました。この内容については二年前のル・クールの中でも述べてありますが、もう一度書いておきます。

第一にその当時までの日本の教育について「高度に中央集権化された教育制度である」と批判し、その実例として(イ)教師の職務上の自由を、訓令、教科書、試験、視学制度によっておかさされている。(ロ)文部省は日本の精神を支配していた人々にとってこれまで權威の座であった。(ハ)日本の教育では教科書は文部省の独占物であり、教師の意見を十分に入れていない。などの事を上げています。そして

その後米國使節団の報告も勘案して、いよいよ正式に日本の新しい教育を考えるについて、八月十日教育刷新委員会が閣内直屬して設けられました。この委員会では、教育理念・教育法制・教育行政の三つの問題を審議しました。昭和二十四年教育刷新審議会に改称されるまで、三十五もの建議を審議して、実質的に、教育改革の軸であったわけです。

戦前の教育勅語は、使節団により否定勧告をけ昭和二十三年六月衆参議院で失効の決議をうけ名実とも無効になり、それに変わって「教育基本法」が出たわけです。昭和二十一年教育刷新委員会「教育の理念及び教育基本法に関する建議が採択され、十二月総理大臣に出され、昭和二十二年三月、政府原案が通過し公布されました。これは天皇制教学とは全く違い、教育基本法という一つの思想をもった全法体系・全組織制度の基礎がおかれ、旧来の法制に代って代ったものであります。特に権力による教育を否定し、教育の自由を非常に尊重していますし、教育行政の独立制、と教育権の国家から追放を主要な目的としています。法律の解釈をめぐる問題はとて難解なものであるが、ともかく

A 図 (同法成立以前)



B 図 (同法成立以後)





も、使節団の報告書と日本の教育者達の意志とを調和させた教育理念としての法律であることは間違いないと思える。その教育基本法と一緒に公布された学校教育法は、六・三・三・四制を取り入れ、現代学制の形を作った法律です。これは確証のとれた事ではないが、教科書の固定は、その当時として、否定された内容を持って学校教育法は作られたことを、誰かの発言で記憶している。さて次に上げねばならないのは、昭和二十三年の教育委員会法であろう。これは教育の中央集権を防ぎ、教育権の独立という意味において重要なものであります。今では任名制という形をとっているが、この時は公選の形をとっていたことに注意を向けてほしいと思う。この問題は、後で詳しく述べることにします。この年の「教科書の発行に関する臨時措置法」に基づいて民間の手による検定教科書の編集が始まり、四十年余りもの長い固定教科書の時代から考えると、夢のようであったようですが、文部大臣の検定と、GHQの検定という二重の制限が加わり、四二七点教科書が出されこの検定にパスしたのは六二点という事でした。アメリカのいわゆる民主化政策は、せいぜいこの辺とまりであります。一方非民主化(弾圧)政策は、昭和二十一年頃から社会労働運動へ強い力となって現われてきましたし、日本の官僚政府も頭を急激にもたげてきました。昭和二十一年四月、第一次吉田茂内閣が成立したときの朝日の社説をみてみると、「吉田内閣は官僚と資本家、地方勢力とが結びついた内閣である。彼等は自分たちの安定と目的において統制強化を考えるであろう。既存の支配関係をそのまま保持しようとするのが保守勢力であるからだ。」と述べました。統制強化のため吉田内閣は「社会秩序保持に関する声明」を出し、社会労働運動をとりしめし、強権供出

七月総司令部顧問イールズ博士が新潟大学で共産主義教授を追放せよと演説したのが始めだと思えます。そして昭和二十五年九月第二次教育使節団が来日し、「極東において共産主義に対抗する最大の武器の一つは、日本の啓蒙された選挙民である。」と教育の方針を述べる。その来日前にレッドバーデが行なわれ、共産党員や進歩的分子一万余名が織場を追われ、文相は教職員の共産主義追放の実施を声明し、何でも目新しいことをやる者も追放された。そして文部省は国旗掲揚・君が代につき各学校に通達し、教育の中へ権力が、浸透していった。このような中で、日本政府官僚が国防としての愛国心の問題を始めにとり上げたのが、吉田首相で、健全なる愛国心の養成の急務について文教懇話会員と会談し、新聞協会で「現在わが国では独立精神と愛国心が欠けている。私は純正にして強固な愛国心の再興を文教政策の筆頭に掲げたい。」と述べている。そして昭和二十六年かの有名な「天野勅語」としての「国民道徳実践要領」が勝手に、全国の各校長に配布された。教育行政の中で「国防としての愛国心」が問題にされてきたのと同様に、政策面においても表面化してきた。昭和二十五年一月に行われた「年頭の声明」では、「戦争放棄をした日本国憲法は、高い道徳的理念に基いたものであるが、もし相手側から攻撃をうけた場合、これに対する自己防衛の権利を否定したものでない。」と自衛力保持を強調。七月マッカーサーは吉田首相あてに「日本警察力の増強に関する書簡」で国家警察予備隊の創設と、海上警備の増強を指令した。吉田内閣は八月十日に、警察予備隊を政令で公布し七万五千名の国家警察予備隊と、八千名の海上警備力の増強をはかった。

昭和二十七年八月、警察予備隊は保安隊に発展して、四月に海上

反対斗争を弾圧し、読売新聞の組合幹部の首切りをうながしたので。六月十二日六名の首切りに端を発した読売新聞第二次争議を契機にして、社会労働運動は高まり、国鉄・海員組合にたいする四万五千名大の量首切り通告は決定的闘いによって勝利し、東芝・全炭北海道・等々のストライキへと発展していき、昭和二十二年二月一日のゼネラルストライキへとひきつがれんとしていたが、GHQの圧力と、その指導の欠陥などより中止ということになり、より社会労働運動への弾圧はきびしくなっていたのである。この年四月の総選挙期間中占領軍と日本警察の共産党への露骨な選挙干渉をする。そして昭和二十三年には、戦後日本の存在の役割を、陸軍長官であるロイヤー氏により始めて、発表された。その内容は、「強力な日本政府を育成するにある。日本自身が自立できるだけではなく、今後、極東に起こるかも知れない新しい共産主義の脅威に対して、防壁の役目を果たすのに充分に強力な安定した民主主義を築き上げるにある。」というものである。この政策は、社会労働運動への弾圧の中で、日本軍事化・日本資本主義の確立という、具体的な積極的な方法が、成り立ってきたのです。このことから、逆行という言葉が出てきたのだと思いますが、アメリカにおいてはなにも逆行などというものでなく、全くプログラムにそった政策の変化だったのです。逆行という言葉は、日本の国民において、はじめての自立への出発点であり、アメリカ軍とその占領政策の真の姿を見出した時のものだと思います。いわゆる上からの戦後民主主義は、ここでもはや命が絶たれ、その形首をどうにか頼りに、日本国民の幻想から自立への真の始まりがあったのだと思います。

さて、教育においてそのような変化のあったのは、昭和二十四年

保安隊内に海上警備隊が設けられ、のちに隊内から分離して海上自衛隊となっていたのである。

昭和二十八年十月、MSA協定の会談(池田勇人・ロバートソン)の中で「占領八年にわたって、日本人はいかなることが起っても武器をとるべきではないという教育を最も強く受けたのは、防衛の任に先ずつかなければならない青少年であった」。「会談当事者は日本国民の防衛にたいする責任感を増大させるような日本の空気を助長することが最も重要であることに同意した。日本政府は、教育および広報によって、日本に愛国心と自衛のための自発的精神が成長するような空気を助長することに、第一の責任をもつものである。」と述べられています。そしてMSA体制が確定された昭和二十九年六月防衛庁設置法と自衛隊法が成立し、七月、ここに防衛庁・自衛隊が発足し、日本軍事化が、基本的に完成したのです。

このような防衛・愛国心・軍事の急速な発展は、昭和二十四年の中華人民共和国の成立、昭和二十五年の朝鮮戦争。そして全世界的な冷戦などというものが、契機となり、日本の軍事化が急がれたのです。そして昭和二十六年の九月に、対日平和条約・日米安全保障条約が調印されましたが、これは単なる日本の独立の問題だけではなく、講和によって日本軍事基地化・日本両軍備相互援助体制へ組み入れ(軍事的・経済的協力体制への編入)というアメリカの戦略的スケジュールは出発したのです。この第二段階としての再軍備の具体化がMSA協定です。軍備の増強充実力による平和という観念の下にその第八条で日本が自国の防衛力を自由世界の個別的及び集団的自衛力への全面的寄与でなければならないことも述べられています。その結果即ちMSA援助(軍事援助)によって日本の重要



基礎産業に構造的変化が生じ、かつアメリカの軍事化した資本に従属していった結果、日本の資本も軍事化していったのです。このように日本はバンデンバング決議の資格条項をみたすべく軍備を増強し、経済の発展と独占資本主義の復興などにより、アメリカの反共極東戦略構想の中に組み込まれていたのであります。このような背景のもとに、日本の教育の中央集権化が始められ、その基本的整備として現われたのが、昭和二十九年六月に公布された「教育公務員特例法の改正法」と「義務教育諸学校における教育の政治的中立確保に関する法」であると思います。この法律はいわゆる教育の中立確保のために計画された法律措置で、いかにも教育基本法にそった法律に見えそうですが、真の意味は、上かその政治化が、下からの政治力を、非政治化にするための行政的意味の役割が重大です。その一つの例として、日教組の再軍備反対をすぐに「一方的」「特定の政治思想鼓吹」と認定してしまうということです。中立は、現実的問題になると、より具体的になり、その中立というものが、日本再軍備に賛成というものでなければいけないようになったら、これこそ大変な問題です。私達ができる中立とは、憲法を基本的な判断とし、教育への権力の浸入を防ぎながら、教育の独立性を保ってゆくことであると思います。それと同時に、いかなる基本的人権を、すべて法律で制限することはできないということです。とくに学問においては、表現の自由を最大限に保証されてこそ、はじめて「不当な支配に服することなく」（教育基本法）その職務を執行できるのだと思います。

この後、中央集権化の整備と、経済体制と権力との関係など述べますが、これらは、すべて今までの流れの必然性の中で、作られて

いる。ということに注意しておいて下さい。  
教育中央集権化への整備

私は戦後教育史を昭和30年頃を境に二つに分ける。しかし教育史の歴史的な見れば、昭和30年以後は前半の整備として位しており、すでに戦後教育史は前半の10年間問題が出そろっていたのです。

朝鮮戦争の特需に影響されてか、この昭和二十八年以後の日本経済は着々と基礎を固め始めた。特にこの時期の大巾な設備投資は工業生産力を高度に発達させ、昭和三十年以降に見られる神武景気・岩戸景気と呼ばれるまでの高度の経済成長を遂げた。又日本の戦後処理の政策とやらで東南アジアへの経済進出の展望を可能ならしめた。こうした中で昭和二十九年に日経連は「当面の教育制度改善に関する要望」で職業専門大学の設置を文部省に要請し、経済政策の中に文政を巻き込みつつあった。翌年には教科書問題が大きく取り上げられ、編集は民間に委託し販売供給は国家が統制するという教科書「民編国照」案が考えられていた。そして当時の安藤文相は社会科改訂を発表し「天皇の地位」の明確化を指導要領に追加した。日本民主党は「憂うべき教科書問題」というパンフレットを発行し、現在教科書は日故組に近い学者グループの執筆であり、偏向している」と批判した。こうした著しい支配層の文教に対する介入は、教育三法の国会提出を強め、勤務評定、指導要領の改正学力テスト・能研テスト・へと次第にすみずみまで浸透していったのです。

#### 教育三法（昭和三十一年）

ここでいう三法とは「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」（地教行法）「教科書法の一部改正法案」「臨時教育制度審議会設置法案」の三つをさしますが、後者の二つは成立せずに終り、

がくずれた事。

#### ◎旧第五十条↑新四十八条

旧法では「文部大臣は、都道府県教育委員会又は地方教育委員会に報告書を提出させることが出来る」が「行政上、運営上の指揮監督をしてはならない」と明記し「文部省と都道府県教育委員会に対し技術的・専門的な助言を与える」と書いてある。新法においては「①……文部大臣は都道府県又は市町村に対し都道府県委員会は市町村に対し都道府県又は市町村の教育に関する事務の適正な処理を図るため、必要な指導、助言又は援助を行うものとする」と規定した。これは文部大臣の本来定められたわくを越える結果となり、地方団体の長や教育委員会にたいし教育事務に必要な措置を講ずべきことを求めることが出来るようになった。

この事を具体的に示す例として、教育課程編成権（学校教育法二〇条、三八条、四三条、地教行法二三条一項五号、教材採択権（義務教育無償措置法一〇一三条）、児童の成績評価権（学校教育法規則二二条の三）、教員の職務内容とくに宿日直問題（学校教育法二八条四項）、教委および校長の職務命令とその限界（地教行法三三）そして学力調査（学テ）地教行法五四条二項）、教科書検定（学校教育法二二条一項、文部省設置法五一条一項二号の二、八一条一三号の二、二七条）などに見られる重要な法律問題の拡大解釈による教育内容への介入。

（「日本における民主主義の状況」より）

又三十三年には、小中学校校長に管理職手当を支給する法案が成立し、校長の組合からの分離がはかられ、今日に至っては教頭までの管理学習が出来上った。

#### 勤務評定実施（昭和三十一年）

昭和三十一年愛媛県教育委員会は、勤務評定実施を言明した。そ

地教行法が六月の乱斗国会に於て成立しました。ただ教科書法案は清瀬文部大臣の「法案は流れても、この趣旨は行政措置で速やかに実施する」という発言の様に、検定の厳格化は具体的に運んでいった。（ここでは省略）地教行法を考える場合、最も重要なものとして同法の成立以前と以後の組織体制の変化を見なければならぬ。（図A・Bを参照）これを見れば明に、教育委員会法から地教行法への改正は地方分権から中央集権への大きな飛躍である事を、認めなければならぬ。

#### ◎旧第一条・二条↑新第一条

旧法には「教育が不当な支配に服することなく、国民全体に対し直接に責任を負って行なわれるべきであるという自覚のもとに公正な民意により、地方の実情に即した教育行政を行う為に教育委員会を設け」と挙げていたのに対し新法では「教育委員会の設置・学校その他の教育機関の職員の身分取扱いはその他地方公共団体が於ける教育行政の組織及び運営の基本を定める事を目的とする」とだけ書いてあり、教育委員会の本質論というものをすてにタナに上げ、組織形態としての影しかみられない。

#### ◎旧第三十三条（第三項）↑新第十二条（第三項）

旧法には「教育委員長は、教育委員会を主宰する」とあり、新法には「委員長は教育委員会の会議を主宰し、教育委員会を代表する」とあり委員長の権限が増大した事。

#### ◎旧第九条↑新第四条

旧法において委員はその地域選挙民の公選であったものが、新法において「地方公共団体の長が、議会の同意を得、任命する」と改められ住民が直接に教育をコントロールするという民主主義の原理



れ以後次第に各都道府県において実施された。この勤務評定というものは、三十二年十二月に都道府県教育長協議会が出した「教職員勤務評定試案」が原型となった。この方式とは一人の上司による一元評定で、本人に見せない秘密主義を原則としたもので、アメリカの勤務について見てみると、普通は品等注というもので、生徒・同僚教師・視学の三者を品等して、その相関を調べるやり方で、このようなやり方と比較すると評一定元というのがきわめて信頼度の少ない評定であるといえる。又日本の勤務大のきの特徴として秘密主義により、異議申し立て権が全くなく、教師の向上性というものが全くないという事。実際の項目の中にも問題が多い。「身体や服装が清潔であるか」「判断にかたよりのないか」「上司や有力者にへつらいとり入事がないか」「自説にこだわる事はないか」というほとんど主観にたよらなければならぬ点が多い。このような評定に対し教師の反発は極めて強く、勤務斗争は全国的規模で展開された、そして勤務の本質を「戦後一応解体された財閥に対してアメリカは朝鮮動乱の特需をきっかけにして、独占資本の再組織を始めた。それにともなう労働者階級の著しい生長は、資本家の存在をすらおびやかすほどになり、資本家側はそれに対する対策をたてねばならない状況になった。この対策として生産性向上運動があり、その教育版が勤務である。そして科学技術教育、道徳教育は教育内容面の生産性向上運動である」と具体的にこの実施に斗争が組まれていった。しかし次々と勤務評定が実施されてゆく中で、常に勤務斗争は、敗北的な結果しか生まず、それと同時に自らの斗争視点の誤りにおいて欠落したため、妥協へと進まざるを得なかった。

このように地教行法の成立とともに変化する教育行政組織の官僚

いてあり、昭和二十六年に改正された学習指導要領一般編を見ますと「教師が各学校において指導計画を立て教育課程を展開するため、教授の手引きとして、教師の仕事補助するものとして役立つものではないなければならない」と書いてある。

このような説明を見るなら当然、学校教育法施行規則第二十五条でいう「小学校の教育課程については学習指導要領の基準による」という規定は各学校の自主的に教育課程を編成するのが当たり前である。しかしこの幅のない基準は統治の性格によってはいろいろ変化し得るし、内容なりをも左右する役目をもっていたのだ。こうした欠点を残したままの要領はついに昭和三十三年を迎へ文部省の拡大解釈における日本支配層の思うがままの基準において改正されました。この改正の特徴を掲げると、

一、国家の基準を明示した事。

二、法的拘束力を持つ事。

三、国家主義的傾向があらわれた事。

四、生活学習より知識の系統的学習が重視されている事。

の四点をあげる事が出来る。特に一の国家の基準性の明示とは、道徳教育の強化、科学技術教育の振興、地歴学科の改善、中学において進路、特性に応じた教育の徹底、教育課程の最低基準の明示など。この新学習指導要領の従来と大きく異なる点は、教育の内容を具体的に示し、単に文部省の「試案」としてのものだったのが、改正によって、この通りにしなければならないという拘束力をもつようになり、教育内容に対する権力の介入が強くなった。ここで特に重要なものとして新しく加えられた「道徳」は、小学校の一年から六年まで毎週置かれることになり、価値体系における国家的基準と

機構化は、教育委員会―教育長―校長―教頭―教師へ次第に下りていき、ここで一様の整備がなされました。そして、この後からこの整備の目的である教育内容へとつ移っていきます。又激烈な国際競争の中での日本資本主義経済は生産向上の確保としてより科学的なより複雑な労働者を確保しなければならず、一般的、人間的な本位を变化させ、ある一定の労働部門にむける熟練と技能を習得させ、発達した独自の労働力を必要とし、そのためにはある一定の教育、または訓練が必要となった。このように官僚体制の完成した教育機関は日本政府にたくみに動かされながら、国民大衆の教育の実質的な均等といった振装された面をつけながら、計画的に要求に応じた人間を作り出す一つの経済的機関として、役目を担ったのだ。

#### 改訂学習指導要領（昭和三十年）

戦後の新教育に対する手直しは遂に教育の内容に及び、昭和三十年の小中学校の社会科学学習指導要領が改正され、礼祭日、天皇、などが強調された。そして三十三年には毎週一時間道徳教育の時間が特設され、同年一〇一日には、学習指導要領の全面的改正が行なわれた。

昭和二十二年の最初の学習指導要領は、その一般編に次の様な表現がのっている。「教育課程は、それぞれの学校でその地域社会の生活に即して教育の目標を吟味し、その地域の児童青年の生活を考へてこれを定めるべきである」「この書物は学習指導について述べるのが目的であるが、一つの動かすことのできない道をきめて、それを示そうというように作られたものではない」「教師自身が十分に研究していく手引として書かれたものである」と書

なり得た。ここでいう価値体系の国家的基準というものはいうまでもなく、GHQの支配から自立した日本配属の価値観、すなわち道徳とか、忠誠とか、国家観とかいうものです。しかしこの時の道徳には、世間が予期していた愛国心と親孝行に反して、親孝行という言葉は見当らず、愛国心という言葉が出る場合にも、「愛国心と国際理解」という、愛国心の独走を慎重にいましめていた。（「教育と教育政策」より）この様な世間の予想を外れるまでの慎重さは、何を物語るかは知らないが、静かに頭をもち上げた道徳教育は海老原治さんがいうように、

「道徳教育の中味はイデオロギーではなしに、中核は現代的な労働協調・反共・反社会主義イデオロギーをもって構成されてゆくだろう。」

という意見をも参考にしつつ考えていかねばなるまい。

#### 教育界への日経連の介入

昭和二十六年十一月の政令諮問委員会答申、「教育制度の改革に関する答申」にみられる産業資本の教育への介入の活発化は、その答申の前文に於て「戦後の教育改革は、外国の諸制度を範とし、徒らに理想を追うに急いで、我国の实情に即していいないと思われるので、これらの点に、十分検討を加え、我国の国力と、国情に即したものに改革する」「六・三・三制は原則的に維持する。しかし我が国の实情に即さない画一制度を改めて、実社会の要求に応ずることのできる弾力性を持った制度とする。普通教育を尊重する幣風を改め、職業教育を尊重強化し、教科内容の充実・合理化をはかる」とし、中・高・大学のそれぞれに具体的措置を提起した。そして翌年







ある「学問と教育は別物」に通じる。教育基本法前文及び第一条の「真理の教育」が、学問研究の成果の伝達ということと分けて考えられるであろうか。教育基本法第二条に学問の自由の尊重を戦後教育の基本方針のひとつとして明記してある通り、憲法第二十三条の学問の自由の保障は、大学だけではなく高校、中・小学校の教育にも及ぶと解釈するのが当然である。これはまた、小・中・高の教師が教育活動の上で使用する教材が公権力によって制限を加えられるものであるという点で、教師に保障されている教授の自由を侵害するものである。

また、検閲とは「公権力が外に発表されるべき思想の内容をあらかじめ審査し、不相当と認めるときは、その発表を禁止すること」(宮沢俊義「憲法Ⅱ」)とされているが、現在の教科書検定は、憲法第二十一条第二項で禁止している検閲に明きらかに該当する。

ところが文部省は、学校教育法第二十一条(小学校においては、文部大臣の検定を経た教科書図書……を使用しなければならぬ)により、不合格となった図書は教科書図書として採用されないだけであり、教科書の検定は当該図書の出版を禁止しているのではないから検定には該当しないといっている。しかしながら、文部大臣検定済の教科書でなければ学校では採用されず、採用されない(商品となり得ない)図書を営利企業である教科書会社が出版するはずがない。出版までは禁止していいとしても、検定不合格処分を受けることは、教科書としての出版禁止を実質的に意味することは明らかである。

さらに、彼らの詭弁の根底には、一般図書として出版可能にしてさえおけば、教科書に対していかに厳しい思想審査を加えても現行

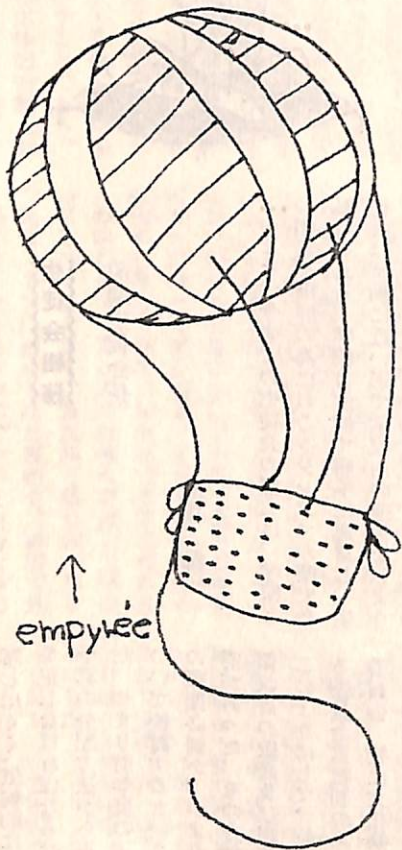
憲法のもとで許されるという考えがひそんでいる。これは極めて重要な問題である。しかも、文部省が検定は表現の自由(憲法第二十一条第一項)の制限とは無関係の制度であり、教科書としての出版が制約されるとしても、それは教育の機会均等、教育水準の向上をはかるための合理的な制限であると主張するに至っては、言語道断である。彼らは国家統制によってこそ教育が向上し、反動化・軍国主文化に向かうことが教育の向上であるともいいたいのであろうか。また、このことは憲法に適合する教育基本法、時に教育を権力的に統制、画一化することを教育に対する「不当な支配」として禁止している同法第一〇条第一項や、教育行政が教育の内容に権力的な介入をすることなく、その諸条件の整備確立にあたるように、その任務と限界を規定する同条第二項には違反している。

日本国憲法では「すべて国民は……ひとしく教育を受ける権利を有する」(第二十六条第一項)と規定しているところから、一般にその権利内容を教育における機会均等の保障として考えられている。しかし、教育を受けることが権利とされるに至ったことの理念と思想を追求するならば、同条は何よりも教育の権利性を宣言したものと考えるべきである。したがって、憲法第二十六条は、生徒が思想や学問的成果を自由に学び、それによってその能力を全面的に発達させる教育を受けることを権利として保障したものであり、教育基本法はこの権利内容を確認したものであろう。だから保護者は、子供の権利が行使できるように義務を負っている(同条第二項)のである。このような子供の権利を阻害(国家統制による教育の画一化、反動化・軍国主義化)している教科書検定は、明らかに憲法第二十六条及び教育基本法第三条(教育の機会均等)に違反する。

さらに、検定の基準・手続きにしても検定が公正に行なわれるための制度的手続き保障は皆無に等しく、言論・出版の自由をはじめとする国民の基本的権利が実体的にも手続的にも保障されるべきことを定めた憲法第三十一条に違反する。

しかも、本件における不合格決定の理由及び条件付合格の修正要求の内容は、憲法・教育基本法に反するばかりでなく、文部省自身が定めた検定基準・学習指導要領にすら適合していない例があるのは、検定がいかに恣意的かつ一方的に行なわれているかを証明するものである。

『新日本史』は三四か所について改訂の手続きをとったが、そのうち不合格となった六か所について、家永教授は昭和四二年六月二



三日、ふたたび国を相手とって訴訟をおこした。これらはいずれも、昭和三九年度検定の際に再度の修正要求で書きかえさせられたものをふたたび訂正前の原文に復活しようとしたものである。この訴訟は不合格処分取消請求訴訟であり、不合格処分の違憲・違法性をつくものである。このようにして、教科書検定訴訟は、損害賠償訴訟と行政訴訟の二方面から国家権力の違憲・違法を攻撃することになった。そして、これらの教科書検定違憲・違法の訴訟は、教科書検定が憲法・教育基本法のいくつかの個々の規定に違反するばかりでなく、憲法・教育基本法の精神と民主主義を踏みしにしているということに、極めて重大な意味を持っている。





## 生徒会 レポート

### 生徒会総務

#### 前期生徒会長

永井 保

およそ、今までの生徒会の歴史は、学校との相互理解の為に起こるジレンマの歴史と私は考える。学校は学校で勝手に運営し、生徒会は反動に近い形で学校内の運営をしようとする。このような状態では、良い学校、良い生徒会など生まれる訳がない。最低限教師と生徒が、互に自分の使用している言葉の意味程度の事は、相互共知らせ、知るべきである。

文化祭の日時の再編成。つまり、今まで体育祭を10月上旬文化祭を11月上旬に行なっていたが（過去においてもこれは問題であつたらしく、体育祭と文化祭を一緒にした学園祭とする形式もあった。）前期中は行事が非常に多く、行事に追われた生徒会といつても良い程である。その為に、文化祭を11月上旬にもっていく事で、前期の仕事の軽減を測っていたようであつた。―これでは三年生が出

席しにくく、気候的に条件も悪い為に、これを是正しなければならなかつた。その為には、予算の分配方法から再検討する必要があつた。つまり前年度のように、品目一個一個について検討するというのではなく、全体にどの程度必要か、つまり使用上の幅を拡げる必要があつた。その方針を通す為に、使用後の領収書の徹底及び調査の徹底を必要とした。このようにして、前期予算編成上の方針である委員会重視制の為にクラブ予算を削減し、委員会、特に文化祭執行、放送等、生徒会運営上必要な委員会に廻した。（過去において、生活委員会、評議会―前年度までは自治委員会―に、独立採算をとらない為に不合理があつたので、その是正の為に右の委員会に独立採算制をとった。）

又、前述の欠点の除去の為に文化祭を10月上旬に持つてくる為に、体育祭のウェイトを軽くする必要がでてきた。つまり、体育祭を六月に持つてくるべき方法がとれない為に、体育祭、文化祭が近接してしまふのである。

だが、その為に、体育祭が昨年を縮小したにすぎないという形で行なわれ、文化祭は、生徒会執行部分の文化祭に対する認識の浅さがたつた、ただ単に終わらせれば良いとい

う方向に走り、その為に生徒へのPR不足が出てしまった。やはり、一つの方針と文化祭に対する統一に近い見解を出して、文化祭をこのような方向へもっていくという事が必要なのではないだろうか。

前期の不祥事である弁論大会については、第一に生徒全体の動きが把握できずに、一部の動きによってしまった。第二に弁論大会というものを把握できなかった。第三に、生徒会の一部の人間のみの動きの為に、主体的方向へもっていけなかつたという理由で開催できなかった。学校との話し合いも、単に表面的なものであり、腹の内では互いに我を張るという状態が続いた。互いに信頼してという状態を作る必要があるのではないのか。総務の方針として、前述のジレンマの解消の為に、話し合いによる相互理解ということを目指したが、結局それができなかった。しかし、学校というものは、教師と生徒で創られていくものである。よって、互いに協力する必要があるのではないだろうか。

最後に、高校の自治―大学・社会・小中学校と全く異なる―があるということである。従って、そこにおける我々の主体的活動も他のものと異なってくる必要がある。

つまり、我々の独自性をのばす為の活動である。つまり我々の学園内の生活の確立が中心である。その為に、前述の教師との関係がでてくる。しかし主張すべき時ははっきり主張して、徹底的に討論し活動すべきであらう。もう一度くりかえしていうが、我々の活動は、主体性を確立し、自治を拡大することにありということである。

#### 後期生徒会長

斉藤 泉

会長に承認されてまず考えたのは、何をすべきか？という事であつた。体育祭も文化祭も前期の連中がすすめてしまつたし、ましてや規約改正などはとつての昔（でもないかな）にできあがっていることになっていくし、何もする事がない。それで自分の考えの甘さにはたとえが付き、もう一度生徒会の価値から考えてみた。しかし、そこはそれ凡人の悲しさで、まとまつた考えが浮かばない。しかたなく、悪友共と話し合つたり

、先輩（？）に勧められた書物や、書店で見つけた本を読みあさつて、やっと自分なりの

見解を出した。それは、生徒会は、生徒の学校生活に役だつて初めて価値がある。という単純明解な答えだ。後から考えたら馬鹿みたいなのでも、あまりにもあたりまえ過ぎて、つい忘れてしまつていたらしい。そこで次に考えたのは、それに沿つて何をやるか？ということだ。これにもはたと困つた。何がいったい学校生活に役立つのか。全然わからない。そこでしかたなく自分の一年半の高校生活を振り返つて見た。そうして、まずピンときたのが、今までの生徒会の首脳（？）達がやれ政治だ、やれ経済だ、と難解な事ばかり口走つていたので、色々身近な問題を提案しにくかつた事と、身近な問題なのに「関係ないや」という一般的風潮に悩まされた事だつた。そこでこの両者を一べんに解決する方法がないかな？と考えると、その結果出たのが、話し合いの機会を増やして、執行部と一般生徒（？）との間のみに橋をかけるという事だつた。そのためには大きな会合では話し合いができないので、小さな会合を色々な機会に色々な機関を通してやることにした。

しかし、いざ実際の仕事をする段になるとなかなかうまく行かない。初めは10月下旬に



予定していた生徒総会も伸びに伸びて11月末になってしまったし、議長会をやっても「生徒会内のH・Rを認識してもらおう」という初期の目的を達するに至らなかったし、公聴会をやっても話しにまとまりがなくなり本末顛倒の結果しかでてこなし……等々。考えて見たら失敗ばかりだった。これらの失敗の原因は私達生徒会総務の「仕事の意識・方法」に対する思考の乏しさや、計画性の無さ、時間の概念がルーズな事などがあげられると思う。これから残された半期間、「意義や方法」をずっとみんなで徹底的に考え、綿密な計画を立て、時間的なルーズをなくすような方向に持って行きたい。最後に、来期の役員が我々と同じ失敗をくりかえさないように願いながら、ペンを置くことにする。

### 評議会 (前記)

私は、この評議会の議長という任務に半年の間ついて、私なりに色々プラスになったと思っています。ただ残念なのは、その任務に専念出来なかったということです。私は、元来移り気だということを悟ったのも、大きなプラスの一つですが。

ここで、一言皆様に言っておきたいことは、なぜ私のような移り気な男が、評議会の議長という大任をなさねばならなかったか、ということ。この理由としては、第一に、私は我が松原高校の生徒会々員である皆様の生徒会活動への無関心さをあげたいと思います。これは決して、責任をおしつけるのではなく、自他共にみとめる事実ではないでしょうか？

例えば、評議会に一度出席なさってみて下さい。その実情が一目で解ります。

このような無関心さは、社会一般の風潮といつてしまえばそれまでですが、あまりにもひどすぎると思います。

なかには、『おれはみんなとは違うぞ。』とおっしゃる方もいるでしょうが、では一つ質問します。現在の我が松原高校の生徒会役員の名前を、全部あげられる人が何人いるでしょうか？ まず五十人といないでしょう。

決してむずかしいことではないと思います。皆様の勉強への熱心さの、十分の一を注いで下されば良いのです。

今期の生徒会役員は、熱心な人ばかりです。ので、必ず納得のいくような生徒会にしたいだけだと思います。

では最後に、生徒会役員も普通の人間となら変わった所もない同じ人間です。今まで通り、付き合ってやって下さい。

### 評議会 (後期)

生徒会員とは、生徒会の中で国民に相当する人々である。そして、国民の声を聞き、それを内閣(総務)の行政(活動)の上で反映させるのが、国会(評議会)の任務である。そして、主権は国民(会員)にある。

後期の評議会は、前期からほとんど進歩せず、足踏み状態を続けてしまった。なぜ進む事が出来なかったのか、その原因は二つ考えられる。一つは、役員の経験不足である。後期の評議会役員は全員今期始めて役員となった者ばかりであった。その結果、前期の役員が通った道——評議会とは何か、その仕事は、権限は等々——をもう一度考えなければならぬハメとなった。これが後期の評議会の発展に大きな支障となったことは確かである。もう一つの原因は、役員及び議員の怠慢である。役員について言えば、経験不足と言うことはあったが、その態度が受動的で、常に総務の後へ廻ってしまったと言うことで

ある。その為に本来の評議会の力が発揮できなかった。しかし、その責任をすべて役員に押しつけるのは、出来ない相談である。というのは、議員の怠慢さ、出席率の悪さである。私は、前回からの評議会の傾向である議場の雰囲気(の堅さ)——これが議員の発言しようとする意志をそねる大きな原因となっていると考えたのだが——を取り除く為に努力したが、余り成果は上がらなかった。議員の発言のない評議会は、全く力を持たないのである。そこで私は、評議会の中の小委員会をもっと利用することを考え、小委員会の中の委員の発言を期待した。しかし、小委員会でも委員の出席率の悪さは変わらず、足踏み状態は変らなかった。

次期の評議会には、今期の失敗を生かして、もっと充実したものを作ってくれる事を期待する。それには先ず、議長には、絶対に経験者が必要で、今期の評議会役員から出てもう事を考えている。又、議員についても出来るだけ、経験を揃え、優秀な人材を揃える事を、各クラスに呼びかけるつもりである。

以上あげた事が、現在の評議会の現状であり、又、最も根本的な問題であり、最も根本

的な解決策である。しかし、ここで諸君に考えてもらいたい事がある。それは文頭にも掲げた事だが、現在の評議会の不活発さ、あるいは、総務、各委員会、各ホーム・ルール、各クラブつまり生徒会全般の不活発さは、すべて、主権在民(会員)を忘れた現在の松高生気風に源を発しているのではないかということである。そこで諸君に、なぜこのような不活発な生徒会でも必要であるのか、又、どうすれば現状を打破する事が出来るのか、広い視野で考えてくれることを望む。

### 文化委員会

規約の改正によって従来の文化委員会が、文化祭関係を司る文化祭執行委員会と、ル・クルの編集に当たる生徒会誌編集委員会と、その他の文化活動をあつかう文化委員会に分かれました。そして、それぞれがそれまでの文化委員会の特色を生かして生徒会の中に、ユニークな存在として、位置しています。この三つの委員会の中で最も立場の不安定なのは文化委員会です。常任委員会規則の第十五条の三項にも文化的活動とありますが、文化的活動とは何でしょうか？

今期の文化委員会は、その点まで深く考えて活動しているようです。

### 図書委員会

図書委員会の仕事は、実に地味なものだ。しかし、その中にも積極的態度が欲しいものだと思う。自分も含めての事だが、まったく積極さが無い。アドバイザー的存在であるはずの先生に、まったくたよっている感じだ。図書新聞にしろ、その取材範囲はおのずから定型づけられている。もっと、自主的態度に図書委員会全体がある必要があるのでないだろうか。一般生徒の図書に対する関心も生徒会のそれと全く同様、無に等しい。だから、委員会ばかりが悪いとは言えない。もっと一人一人が多少の関心を抱かなくてはならない。ここでは前委員長として図書のことについて話したが、H・Rのことや、選挙のことについても生徒の無関心があげられる。このように松高生徒が生徒会に対して無関心であり、かつ非協力的であるということは、今わかったことではない。生徒会は、関心を持ってくれるようにと機会のあるたびに生徒に叫んでいるようだが、一向にラチがあかない



のはどういふことなのだろうか。せっかく生徒会活動を行なうことを許されているのだから、大いに活用すれば、考えられないほどの充実した高校生活がおくれるのではないのか。自己のすることにだけで満足してはいけない。そして、他人にまかせっぱなしでもいけない。生徒会活動は好きでやっている人もいだろうが、多くの人は、ある程度の犠牲を承知でやっているのである。その人達も一般生徒と同じように無責任な態度をとりたいたいだろう。しかし、それを我慢してやっているのは何故かを考えて欲しい。いつかのうちに、だれも選挙に立候補しなくなれば、おのずからどういふことになるかわかるだろう。しかし、その事に対する一般生徒の気持は、実に楽天的なものである。何べん叫んでみても生徒の関心が湧かないのなら、生徒会の存在の有無を知るためになくしてはどうだろう。反対する人もいだろうが、一般生徒だけと考えればつぶしてみることにも大きな意義があると思う。

### 生活委員会

私達は、内部を風紀委員会とH・R研究委

いてしまった。規約の上での委員会の内容をいうと一番目に「……調査統計。」これには考えれば仕事の内容はほとんどでてくるし、やろうと思えば出来た。しかしいろいろな問題があった。人数不足ということである。これは委員長自身の責任であり、かつ委員の責任でもあり、委員長自身の安易な考えが多分にひびいたことは言うまでもない。人数が集まらなければ自然進行がおそくなり、仕事も進まないわけである。これにはどの委員会にもいえることなので、早急に何かをしなればいけないのではないか。それとも生徒の良心にまかすか。二番目としては「健康的環境の整備」これはしなかった。というより整備委員会の仕事になってしまふのではなからうか。三番目として「身体検査に関する事」これについてはやれたと思う。切り傷ややけどなどの応急処置に関しては学期の最初の委員会では保健委員に対して永友先生自ら御指導願ったので、以前のようにただ怪我人を連れてくるだけで先生がいなかったら何も出来なかったなどというようなことがわりと少なかつたと思う。出来るならば一般生徒に對してもこのような保健に関する講習をやりたい。ねんざや肉ばなれなど、生徒の為になること

員会との二つにわけて活動したので、ここでも二つにわけて反省していきたい。

まず風紀委員会の活動はほとんどが、先生方の御支持による取りしまりだったので、最初の目標の容姿服装規定に関する研究は、ほとんど行なわれなかったのだが、私個人としては「帽子」の問題をもう少し考えていきたいかった。

又、H・Rの研究でも表面的には活動しなかったように見えたかもしれないが、実際にはH・Rの目的意義等に対する考え方の上で、かなり進歩があったと思われる。たとえば、非常に単純なことではあるが、「話し合いの場・人間形成の場をH・Rにだけ求めるべきでなく、コンパ等の場を今まで以上に作ることに生活委員会自身が努力しなければならぬ。」ということに気がついたことだけでも、前期行なった大きな成果と自信をもっていえると思う。

しかし、私達がH・Rの目的等を考えているうちに、松高のH・Rは前進したのだろうか。前期の初期弁論大会をH・Rで使わせるかどうかを考えた時に、私達は「その価値なし」と私達自身でそれに決定を下した。ところが現在はどうだろう、先日来の文化委員会

は随分あると思う。身体検査については委員だけがもっているリボンを悪用した人などおり、リボンについても反省させられる点がある。すなわち並びもしないのに途中から入ること自体おかしいと思う。衛生検査などにもいえることだが整列している時ガヤガヤ騒いでうるさく授業中の先生におこられるようなこともあった。これも生徒自身自重してもらいたいものだ。他には対外活動として高保連というものがあるが、将来性がなく目的もはっきりしないしかつ実行もしないので僕の方針としては脱退のみであった。内部からやらなければだめだと思ふし、この近辺の学校の状態との連帯もあるからだ。以上がこの委員会の全望だが後には大きな行事をつくりそれを目標に計画して、委員会の充実をはかりたいものだ。この委員会のマンネリ化を防ぐために。

### 整美委員会

前期の反省として、まず委員長である自分にしつかりした計画性がなかったということが上げられる。その為、任期中にこれといったことが何も出来なかった。主なやったこと

の活動と、職員会の動きから感じたことだが、H・Rの使用法を決定する権利は完全に生徒の手から奪われ、職員会が決定するというものになってしまっている。教育基本法に目を通し、さらに高等学校指導要領に目を通して、その運営その他の権利は各クラスの生徒とその担任にのみ認められているはずであるし、そこには、さらに生徒の自主性を最大限尊重するということも書かれているはずである。

ところが現実には「職員会」というH・Rとは無関係に等しい機関によって、その利用法を規制され、生徒の権利などは忘れられてしまっている。このように考えてくると私達の活動は今あげた面以外の事では意義深いものだったと満足しているが、最後にただ一つ最も重要な「意義」を置き忘れてしまったように、非常に残念に思っている。

### 保健委員会

保健委員会「いったい何をやっているのだ。」これはこの委員会のための言葉みたいである。

規約の意味もわからず委員長自身、まごつ

といえば花壇に花を植えたことと、大掃除ぐらいなものである。あと各ホームの修理箇所を調べて学校側に修理を申請した。これは後期に受け継いでもらった。

第二に、前期の反省と関連して、学校側からの仕事の要請による大掃除などに時間をとられ過ぎ、委員会としての活動が思うように出来なかった。むろん大掃除の実施も大事な計画だが、少々時間をとり過ぎたと思う。

最後に、委員会の出席率が少ないということである。その理由には、委員長からの伝達の仕方が悪いということもあるが、出席する人達にあまりやる気がないからだと思う。クラス委員となったからは、やはりその責任だけは果してもらいたいと思う。やはり委員長として自分はいまよりしたいことをしないで終ってしまったと反省している。

### 体育委員会

前期の主な活動は、球技大会と体育祭であった。まず、球技大会は、中間試験をはさんで、五月の下旬と六月の上旬に行なわれた。日程の点で五月上旬はほとんど出来ず、ひじょうに苦労した。種目では、男子がバレー、



野球、女子がバレー、バスケットと決まった。またルールの点で少々もめた。ルールは決まっていたので、委員がクラスに確実に伝えられていればそのようなことはなかったと思う。

体育祭は毎年十月一日に行なっているのに今年は、文化祭が他の日にどうしても出来ないうし、今年は総務の方針で文化祭に多少比重がかかっていたので、去年よりも一週間短くなったが、役員の人が良く働いてくれたのでたすかった。種目の選び方が、資料が少なかったためか、去年とあまり変わらなくなっていたのが残念だった。来年はもっと前から資料を集めて、おもしろい競技をふやしてもらいたい。予算も去年と同じだったので、あまりはでに出来なかったのが残念だった。前期はこれくらいしか出来なかった。委員は、委員会には良く出てくれたが、役割が徹底しなかったせいか、本番の時にもっと働いてほしかった。今後の活動の成果も委員長・委員の人達の協力にかかっていると思う。

## クラブ委員会

もでなかったではないかノ委員長に就任した時に自分の目標として「報道番組を徹底する。」「一年生の技術指導を徹底する。」「委員会内のチーム・ワークを確立する。」「行事などの連絡を徹底する。等」掲げたが、私はこれらすべて失敗してしまっただけ。これらの失敗の原因を掲げることによって私の反省としたいと思う。

まず第一点である。報道活動は規則上、我々の義務となっている。そこで私はこれを第一の目標とした。私はこの目標を達成するために、二年生と一年生とを二人一組にして各委員会に割り当ててみた。しかし、いざふたをあけてみると、なんだかんだと理由をつけて取材に行かない。そこでしかたなく割り当てをくずして、ひまそうな人に取材に行ってもらったという方向に変えてしまった。それがまた、まずくて、その場で割り当てなければ誰も取材に行かなくなってしまった。

次に技術指導の問題である。これは例年のごとく講習と言う形で行なったが、やはり何んだかんだと理由をつけて出てこない。そこで出て来た人間だけに講習をする。一人にやっけて他にやらない、と言うわけにいかないからまた彼にのみ講習する。結局、同じことを

## 「反省」

○不活発なクラブがあったが、つぶすことができなかった。

○委員の集まりが少なかった。もっと各委員は委員会の重要性を知ってほしかった。

○僕自身、クラブに入っていたので、総務とクラブの両立がうまく行かなかった。

## 報道委員会

### 新聞委員会

停滞を続けてきた我が委員会に於いて、予算減は向上させようと思いついていた委員の気力を少なかりしとも削り取り、その活動に支障が少々ではあるが起ったのは事実である。

活動が不活発だから予算を減らすという考え方はどうだろうか？もちろん、それはある意味では正統であろう。しかし、それにより増々、活動の低下に拍車をかけるのではないか、ということも考えて欲しい。つまり、ガリ版印刷ではアビール度が活版印刷に比べて、非常に落ちるということである。ガリ版では内容が軽薄に考えられ、その記事のもつ

バリエーションが低下する。まして、その切り方、字形、印刷により現在のところ、我々の苦勞にもかかわらず、喜んで読んでもらえない状態である。

高校新聞は商業新聞と異なって、全くの素人ばかりで作るのであり、その価値の重要さに変わりはないとも、発行までにはかなりの苦勞がある。現在の問題に、活動している委員が少ないことがある。任期一年と規約改正でなつたことは、活動するに於いてやり易くなつたという点が良いのだが、まだ一部の委員を除いてあまり積極的でないのが現状である。また、発行回数だけで活発、不活発を言われるのは我々にとつてつらいことである。新聞発行に秘められた我々の苦勞、努力というものの心の片隅に置いて欲しいのである。発行回数増加を目標に、この重要な委員会をよりよくし、親しまれる新聞を作るよう、後退することなく進みたいと考えている。

## 放送委員会

四月の初めに委員長に就任してから、瞬く間に半年過ぎてしまった。委員長を止めた今、半年間に何ができたか考えて見たら、何

## 特別委員会

### 選挙管理委員会

選管をやって一番苦勞したことは、立候補者がなかなか出なかったことである。ポスターなどを掲示しても、はがされることが二度あった。そして皆は、生徒会に対して無関心であった。どうして立候補しないのか、それには、二つの点があると思う。まず勉強との両立と生徒会など不必要であるという点であると思う。前者のことは、不可能なことではないと思う。しかし、後者のほうは、僕自身、立候補者をつのつていても、あまりにも、一般生徒が無関心なので、生徒会など不必要なのではないかと思つたこともあった。しかし、生徒会とは、生徒の自治活動のあらわれである。それゆえ行事も、生徒の意向にそつているものである。生徒会は、必要である。これが選挙管理委員長をやつて感じたことである。



## 専門委員会

### 文化祭執行委員会

委員長になる時私はいささかとまどいました。今まで、すべて行動は二年生(今の三年生)に言われた事をしていたのです。今度は人に行う事を言わなければなりません。委員長の責任とはなんだろうか。全体の責任を負う、それが委員長の仕事。今まで人に言われた事だけを為て来た私にとっては委員長の仕事はバケモノでした。だがいくら全責任を負うといっても小さな事を一つ一つかまっていたら全体の仕事は出来ません。ですが、自主的活動というものを行なわなかった私にとって、なにか大きな仕事で、どれが小さな仕事か見分ける事ができませんでした。そして、それが一番大切な文化祭の一年間のスケジュールを組むという事を、おろそかにさせました。今になって、この事が強く感じられます。自主的な活動。それは人におぶさってはい分るものではありません。一人一人が責任を持って仕事をする必要性。多くの人が観念的には分かっている事です。しかし、実際の仕

事にとり組んだ時にはどうでしょうか。自分のすべき仕事を見極めようとするだけで、仕事にうつるほどの時間がないのではないのでしょうか。短時間にその仕事をマスターするという事は難しい事です。もし、自分の次に同じ様な仕事をする者がいたら、今行っている人は責任が大きいでしょう。その後の人が一歩から始めるのであれば、いつまでも進歩がありません。いつまでも同じ仕事のくりかえしでは、私達にとってその仕事は大きな意味をもちません。今仕事をしている人は、次の人が一から始めるのではなく、仕事の続きを行なうようにしなければなりません。仕事の内容を知る。それは言葉ではなく、体験によらなければならぬのではないのでしょうか。私は、文化祭の執行を自分の手でやってみました。しかし、それをどうやって次の者に教えたらいのでしょうか。言葉には限界があります。

仕事を一人で言う事は不可能です。一人で行なえば、一つ一つ、ものをこまかく行なう事ができなくなります。また逆に、一つ一つをこまかく行えば全体を見失いがちです。委員長が全体の仕事を統一しようとすれば、小さな一つ一つの仕事を見る人が必要です。

### 生徒会誌編集委員会

私達学生は、現在の自分というものを満足して生きているのであろうか。ただ自分のからにとじこもってあくせくしているのではないだろうか。

現代の若者はよく「夢がない。」と言われている。目先のものしか考えない人間になっているのではないだろうか。

自分というものを見つけないといけない。「ホーム・ルーム」の時間、誰かが話してくれるだろう。自分には関係ないと安易にかたづけしてしまっているのが現状のようである。

る。

生徒総会にしても本当に松高の為に聞いている人間が何人いるのだろうか。

決して私は松高を嫌いなわけではない。いやむしろ私は愛しているのである。だからこそ松高の生徒ががゆいのである。

「前号十五号」では「ホーム・ルーム」という題をかかげてみたが結局、無関心のものが多いという結論がでてしまった。悲しむべきことである。

## 文化部

### 英語部

私達、英語部は大多数女子です。英語と言うとなぜかたいていの人が、敬遠しますが、私は、それほどむずかしく考えなくても良いと思います。もっと気楽に考えてもいいのではないのでしょうか。

活動内容として、英会話・英語に関するゲーム・実用英語検定試験に臨むための練習問題などがあげられます。英検の勉強に、あまり力はいれなかったが、受けた人は、ほとん

今回の「ル・クール」では、皆さんに読んでもらう為に努力しましたが、急にそんなことが出来るわけではない。前号より一人だけでも多く読んでもらうことが出来たならば、それで今回は満足です。

今年度の特集には「学生の権利と義務」という題を掲げてみましたが、果して何人の松高生に読んでもらうことが出来るでしょうか。生徒会誌と聞いただけで内容が固苦しくて、面白くないと思う人がいますが、「ル・

ど受かりました。又、英会話を通して日常、役立つようにしています。始めはまごころですが、慣れてくれば楽しいものです。ゲームは単語を少しづつ覚えるようにしていくものと。その他、生の英語を学ぶために映画を観賞しました。「日本語を、見なくても理解できたなあ。」と思うこともありました。

文化祭では、研究発表をし、展示とクイズを主に行ないました。うまくいったと思いますが、他校の人には入りにくかったようでした。

現在の英語部は、以上のような状態です。が、もっと充実した活動にしていきたいと思っています。そうすることによってどこかに、成

クール」に関しては、特集にしても、クラブ委員会の報告にしても、内容が充実して固苦しさなどは全くありません。編集委員のメンバーを見ても、少し前までは生徒会誌には関心のなかった一般の生徒と変わらない人達が集まって、一生懸命努力して一冊の雑誌として編集したのです。

「ル・クール」は編集委員が作り上げたのではなく、松高の生徒全員で作ったものです。ですから皆さんも読んでください。

果が現われてくるのではないのでしょうか。ルーズな面もあるかもしれませんが、やればできる人が多いのです。

今後の目標として、まず活発にする、そして、楽しい雰囲気を持つクラブにしていきたいと思っています。そのためにはチームワークを固めなければなりません。前進のみです。

### 演劇部

私は偉そうな事を言って前期部長をつとめ、どうしようもなくなって後期部長を交りました。と言うのは、部長というのは責任・責



任でまったくおもしろくない役まわりだからです。己の言論の責任でさえ息を切らせて一生懸命取っている私には、とっても重荷に思えたのです。もっとも他人はそれぞれその大役をこなしているのですから、私が努力をしなかったことは、おのずとわかることです……。それにくわえて、私の忘れっぽさは日増しに強くなり、まったくあきれるほどでした。

まあ部長の私がこれですから、部の活動は言うに及ばずでありながら、それ以上におったまげるのは、その私以上に演劇に情熱をもっている者が幾人といなかったことです。

……まったく……。

話しはわかりまして私達の上演した「エスキュリアル」……まったく私自身自信のないお芝居でしたので御観覧の皆様には解釈の点に多大な御苦労があったと思います。まことにあいすみませんでした。しかし後期の演劇部、また本年度の演劇部には大脇さんが居ります。私に似て、ちょっとばかし、愚で鈍であります。彼女が自分で解釈の出来るような芝居をやると申しております。——乞うご期待です。まことに支離滅裂ながらここで筆を置かせて頂きます。

## 化学部

一九六七年度の化学部の活動は、四月から六月まで一年生を対象とする基礎実験を行なったが、一年生が少ないのであまり行なわなかった。七月から夏休みにかけて、文化祭の準備、九月に入ると文化祭の日程がはっきりしたので、部員一同はりきった。しかし体育祭の一週間後とあって、時間的に苦しかった。

文化祭の当日は、アトラクションとして行なったビニールフーセンに人が集まり、二日で千五百人位化学室に來たと推定される。

僕は化学室に入ってから人に、真の実験というものを、もっとよく見てもらいたかった。

今年には部則の改正が行なわれた。又今年は二年の出席率が悪いのでこまった。

このクラブは化学を通し、相互の協力を深め、且、自分で実験を行なおうということにより本でよんだり、他人から聞いたりしたことを一つ一つ自分で納得するという、一種の自己満足達成するのによいクラブである。

又このクラブでは、年に一、二度レクリエーションとしてハイキングのようなものを行

なっている。

このクラブの部員は、いたって変わった人間が多いのが特色、よく言えば個性が強い人間によって形成されており、なんともいえない味がある。

来年は、今年の失敗を生かし、よりよいムードの化学部というクラブを作って行きたい。

## 華道部

皆さんは華道というといつていい程「花嫁修業」を思い浮べるでしょう。でも私達は一クラブとして活動を行なっています。

週一回の少ない活動日数でも花を生けながら少しずつでも講師の方から生け花の基本はもちろん、歴史などを教わり、精神修養のためにも役立てています。ある先輩は「自分で花が自由に生けられることに對して満足している。」と話してくれました。皆さんも一度試みてははいかがでしょう。こんな活動内容の中で欠点の一つだけあります。それは部会がないことなのです。華道部では部会を開いて相談する機会がありませんので、こうなってしまうようですが、今年度からは、で

きるだけ多く話し合いの場を持ち、部員相互の親睦を図りたいと思います。又、文化祭において、花の展示だけでなく、花に関した色々なものを合わせて皆さんに見ていただこうと思っています。

## 合唱部

「聞かせる合唱」それを目標に我々総員二十余名は、地道な活動を続けている。

その合唱部の練習中の一面を、ちょっと公開してみよう。

「雪の降る町を／＼思い出だけが……へへへ……」「何がおかしいんだ?」「だって音まちがえちゃったんだもん。」「じゃあもう一度。」てな具合に、実にのんきで、練習中でも笑いが絶えることなく、終始明るい雰囲気につつまれている。

去年の文化祭が無事におわるとすぐ、我々は来年の文化祭に向かって新しいスタートをきった。今はそれに対する基礎練習の段階とでもいっておこうか。「どこかで春が・赤とんぼ・トロイカ」など童謡を中心に、いろいろな曲を練習している。

のんきで腹の底まで明るい我々が、まじめ

な顔をして童謡を歌い、たまにどこからか出るひょうきんな声と、それに供なう笑い声、これによって、我々の第一の大きな目標である「音楽を通じて部員間の和を計る。」というものは、序々に完成していくだろう。

これからの課題は、「聞かせる合唱」の完成である。これまでのことから、「合唱部はやる気のない奴が多いのではないか?」と思う人もいるのではないか。しかしそれは、単なる印象にすぎないのである。実際は、多少練習と遊びを混同する気来はあるが、やはり本当に音楽を愛している人間が集まっているので、歌う時はまじめそのものである。

いずれにせよ我々の願いは、この松高の一角にひっそりと形をなしているこのクラブを、人に喜んで聞いてもらえるようなクラブに育て上げることである。

## 社会科学研究部

苦しい! 苦しい!  
何もみえないこの荒野。

ここからみると霧また霧……  
しかし歩かねばならぬ。  
ときにはかけ足さえも。

だが、まだ見えぬ。

霧の中に悪がいる。

悪魔は濃霧の中に何をしかけたらう。

何故歩かねばならぬのか。

いつぞ……。

いや、やっぱり歩こう。

苦しいよ!

手がかりをくれ!

天使の手を!

そら走れ、かけ足だ

(M)

「学生服を着ている。」「高校生である。」

という理由だけで、何故我々は「高校生として」というワクにはめこまれ、社会から隔絶されなければならぬのか。我々は隔絶された高校生社会に、一すじの光を求める者である。

現在、松高の多くの生徒はベトナム戦争には反対であろう。しかし、我々の多くは戦争をやめさせる術を知らない。ここで問題になってくるのは、我々の主体性ということではないだろうか。羽田事件のさい、デモを批判した人間は多いであろう。しかし批判した人間は戦争反対のためになにをしているのであろう。自分なりの戦争への主体性を持っているのなら、他の行動への批判も許されるだろ



うが、口だけで言って、批判するだけというのは、ひどくナンセンスではなからうか。勿論、これは戦争反対を考えている人間を前提とした場合であるが。ともかく、ベトナム戦争をやめさせるには、まず個人が主体性を回復し、自分自身の問題としてとらえることが第一歩であろう。

手がかりを、天使の手を求める諸君、我々とともに前進しよう。

## 写真部

いい部長とは言えなかった。一年の時、あまり活動できなかったのに、行き成り部長をやれと言われても、何をやらいいのか解からないのは当り前だろう。そのうえ、私は統率力に欠けている。だから、部員全部をうまく引っ張っていくことが出来なかった。そのため、部会もろくに開けず、文化祭以外の発表会も出来ず、又、夏休みにやることを考えていた撮影会もやらずじまいになってしまった。

そして、クラブとして、たった一つの大きな活動の文化祭も、まぎわになるまで準備が始められず、文化祭の前夜、校門を出たのが

その日の一番最後の人間になってしまった。そして、まだまだ写真のことをよく知らない部員が大勢いて、そのため、経費と時間の無駄使いをかなりしてしまった。

文化祭の内容も、ただの作品発表と、今年の主題が「ポートレート」であったため、スタジオを作ったポートレートを撮影をした事以外に、研究発表が出来なかった。そのスタジオで撮ったポートレートも、二期が終わりうというのに、まだ本人に渡していない。

これらの事は私自身の怠慢であり、私自身そのことを自覚している。だが、写真は個人個人の技術である。だから、たとえ部長がしかりしなくとも、自分で研究し、良い技術を身につけてもらうことを、元(旧)部長として、部員一同に期待する。そして、新部長には、計画を早く立て、それを着々と実行することを期待する。

最後に生徒会総務にお願いしたいことがある。それは、四十三年度のクラブ予算をもっと増してもらいたい。なぜなら、写真部の引き伸ばし機が壊れてしまった。そのため、新しい引き伸ばし機を買いたい。だから予算を増してもらいたい。

## 手芸部

手芸部の活動の中心は、二期に行なわれる文化祭にあります。全部員も文化祭のために一生懸命に一年間の手芸部の活動のたまものを、皆さんに見ていただき、批評を受け、参考にして今後の手芸部の発展に役立てます。今年の部員は例年以上少人数でした。作品も少なめでした。バザーは文化祭二日目に開き、第一日目は展示だけでした。バザーの一日店員さん達は、慣れない事なので転てこ舞いをしました。皆さんにも多少ご迷惑をかけました。また作品も少なかったため、すぐ売り切れる始末。せっかく買いにきてくださった方々に、失礼いたしました。

現在、手芸部は、三年生と一年生の女子だけで、部員の数も少なく、講習会など開いて大いにPRしているのですが、生徒の皆さんが、なかなか気に入ってくださいません。入部に誘っても、私なんか無器用だからなど、とことわられてしまいます。器用、無器用は問題ではありません。根気よく一つの作品を仕上げた時にこそ楽しさがあります。また、手芸部の目的は、ただ単に作品を作るだけで

はなく、上級生と下級生、他のクラスの人達が集まって、互いの交流を深めることも、重要な目的であります。作品を作るだけならば、わざわざクラブを作らなくても自分の家ででも作れるでしょう。互いに、いろいろなモチーフを交換して作る。自分で作った作品がバザーで皆さんに喜んで買ってもらいたく楽しさ、自分で作って自分で使用するのもまたいいものです。

これからの手芸部は、部員不足のため、事業もやりにくい事が多々あると思います。この難問を切り抜けるためには、第一に部員を多くしなければなりません。手芸部の発展に努力したいものです。

どうぞ、皆さんお誘いの上御入部ください。大歓迎いたします。

## 食物部

今年の文化祭は、まずまず成功だったと言えよう。

部員をはじめ、手つだってくれた人、ウェイトレスをやってくれた人、みんな一生懸命やってくれた。おかげでたいした支障もなく、スムーズにいった。食券があまり早く売り切

## 書道部

本年度の活動内容は、よく言えば例年どおり、悪く言えばマンネリ化の見本のようなものだった。生徒の皆さんには、私達のクラブではどんな事やっているのかおわかりではないでしょう。それほど地味なクラブなので、では、クラブの内容をおり込んで本年度の活動や反省をちょっと紹介しましょう。

年に一度の校内発表である文化祭には、製作作品の一部を出品して、活動内容を数少ない中で見ていただきました。しかし少し準備がおくれ、作品の種類が少なかったのが残念です。来年からは、もっと皆さんが興味をもたれるような変わったものを作りたいと思います。また、活動の多くを費している校外の展覧会には五回くらい出品し、技術の向上を計るよう努力しました。

## 生物部

「生物部って文化祭の時だけね」などと言われます。全くこのようにことばに対して、返すことばはありません。今までにしてきた



ことという、夏の合宿と文化祭のための研究用品整理、それに部園に種をまいたくらいです。過去の生物部に比べこんなに活動が沈滞してきたこと、悔み改めたいと思っています。今は、二年に一度出すことになっている部誌の製作にとりかかっています。これは今年中(四十二年)に仕上げる予定です。

これからの方針としては、グループ研究や野外活動などをして部員の親密を増し、部員ひとりひとりが部員としての自覚、責任を持って各々の研究を進めていきたいと思っています。

## 美術部

一年間の思いはいつも同じ、何と不活発な我クラブ、何と部員の少ない事。団体的にける活動内容の乏し、存在が不確実なのだ。ということは、部員同志の横のつながりが薄い。文化祭の時等、共同作品を作る楽しい時もあるが、一人かけると試合の出来ない、運動チームのようなつながりはない。責任感がないものだから、すぐなまけてしまう。という訳で、活動に参加する人がだんだん少なくなる。

## 物理部

僕は、週に一回部員全員で実験を行なってきました。初めのうちは、準備に手こずったりして、うまくできませんでした。でも皆で実験の前に調べたりして、楽しく実験をしました。

物理部は、あまり目立たない活動をしてい

今年のはのんびりとした雰囲気が強すぎた。それに一年生がまるつきりはいって来ようとしないうのだから、どうしようもない。昨年は最初の内部員も多く先輩もきびしかった。悪いデッサン等、どんどん消して書き直させられた。そのころはにくらしいと思ったが、良い先輩、良いクラブであった。充実した時があったのだろう。こんな状態にしてしまつて非常にはずかしくてならない。

設備は良い。画板、石こう、カルトン、階級、バレット、筆、等。ほとんど、そろっている。あとは使うばかり。部員も明るい。気があれば、いくらでも良くしていくるのだが、皆さん、一緒に活動しましょう。下手の横ずき大にけっこう、楽しくやりましょう。

るので、目につくことも少ないと思います。が、その一つに中庭の上空といつても屋根より低いんですが、一本の銅線が張ってあります。これは、アマチュア無線用のアンテナです。このアンテナは、全長二十メートルで外国からの電波や、日本全国からの電波を受けとる電波の玄関です。

わが松原高校物理部、アマチュア無線クラブの無線局「JAIYGI」は、このアンテナを利用して、日本全国の学校などと通信を行なっております。

又、皆さんが、一度は見たことがある物理部力作のゴーカート、これは自動車班が作り上げました。自動車は、自分で作ると一層構造がわかり、あんな簡単に見えるのを作るのでも、大変苦労しました。

天文班は、星が見えるのが夜で、学校ではあまり観測ができません。でも一・二回観測をしようと思いましたが、曇ったりしてあまりうまくいきませんでした。この班はそんなわけで、文件上の研究を主に行なっております。物理部の一年間をふり返って、実験がうまくいかず、実験の数、種類が多くできなかった。班の活動が活発化できなかった。

## プラスバンド部

今までプラスバンドと合唱を合わせて音楽部と称していましたが、今年度、各々クラブとして独立しました。真正銘のプラスバンドとなったわけです。

今年意外だったのは新入部員の殆んどが楽器を吹ける人達だったことです。そのため、全員吹けるようになるまで時間がかかりかかるのですが、今年はわりと楽でした。

目新しいこととしては夏季合宿があります。初めての試みだったのでいろいろと心配ごとがありましたが、なんとか無事に済みました。技術向上というよりも部員たちの親密感という点で収穫があったようです。これからも毎年続けていきたいと思っています。

今年は体育祭、文化祭ともに去年よりも早く行なわれました。そのため練習日程が随分きつくなりましたが、みんな良くやりました。直前まで演奏曲目が決まらず、今年に変化の乏しいプログラムになってしまいました。これは僕の責任であり全く申し訳ありません。そのかわり演奏という面で、いくらかカバーできたと思っています(当然のこ

ととしてミスはありました。)

結局、いろいろなことがあったが今年の特徴は、木管楽器が充実したこととその反面、金管楽器が大幅に減少したことです(質の低下という意味ではありません)そのため文化祭の演奏では、荒々しさがなくなりこじんまりとまとまった、ちょっとひん弱な印象を受けられた方が多いと思います。ですから、これからは部員の増員(特に金管)に重点をおいていきたいと思っています。

演奏外のことについて言えば、今年もまた「のん気」にあけて「のん気」にくれたと言えます。まあ、これがプラスバンドのカラーでもありましょう。僕はそれでもいいと思っています。「のん気」もまた一面においては大事なことです。

## 文芸部

文芸部と言っても、「文芸部？」と聞き返す人が多いのではないのでしょうか。文芸部はそれ程知られていないし、関心も持たれていない、又、事実活動らしきものもしていないクラブである。一昨年(昭和41年)からつぶれそうだと噂されているクラブでもある。そん

な文芸部が今まで解散せずにやってこれたのは、やはり先輩のおかげであろう。去年は卒業間近の三年生に私達以上に活動していた。とてもありがたかったと思つてゐる。先輩に恵まれた私達であるが、先輩を尊敬しても少しも見習って活動を活発にしようとはせず、後期生徒会の第一回生徒総会でつるし上げをくってしまった。このままで行くと、私達三年生(部員の大部分を占めている)が卒業してしまつたと自然消滅するであろう。それも仕方がないと思つている私達である。臆甲斐ない私達であった。しかし、今にきつと文芸部をりっぱにしてみせるという有志が現われるということを信じています。

## 灯サークル

重症心身障害児、皆さんも近頃、よく耳にすることはだと思つています。「重症心身障害児」がマスコミに取り上げられ、騒がれ始めたのは四年前のことです。ちょうどその頃は「灯サークル」ができたのです。今の日本では「重症心身障害児」問題を考える人は、しだいにふえています。しかし、まだまだ、日本の中には、重症児に対する偏見があり、私



たちが受けてる苦しみ比べたら、もつともっと、多くの人が、この問題を考えていくべきだと思えます。その偏見のために重症児は、もちろんの事その家族も肩身の狭い思いをしながら毎日を暮らしているのが現状です。また、去年も『重症児問題』の悲惨さを象徴的に示すように『安楽死事件』が起つてしまいました。安楽死とは、簡単にいえば、生活に疲れた重症児の親が、わが子を殺す事なのです。今の日本では重症児を育てる事は、普通の子どもを育てるよりも二倍も三倍もたいへんなのです。まして、年老いた親には、なおの事だったのでしょう。わが子を殺した親を殺人犯として裁く法律があっても、この親子を守る法律は、今の日本にはないのです。いや、あっても実際には、それらの法律は単なる『努力目標』しかも、かつこ付きのいわゆる『努力目標』として、かたづけられています。これでよいものなのでしょうか。私たち高校生に今できる事は何なのでしょう。この灯サークルでは、私たちのできる事は私たち自身が、現状を知る事、そして、もっと多くの人々に現状を知らせる事だと思っています。現状を知らせる事により、社会の偏見というものは、しだいになくなっていくので

はないでしょうか。そして、このサークルは『重症児問題』を通して、自己を形成していく一つの手段なのです。皆さんが将来、この問題に出くわした時、もう一度、よく考えてください。『重症児も自分と同じ人間なのだ』ということ。

## 運動部

### 剣道部

我が剣道部は活動が体育館の一隅にとどまり、あまりめだたない存在であると思う。しかし試合に出れば、はなばなしくやって、他校に劣るということは絶対ない。部員も男女合わせて十七名をかぞえ、三年二名・二年五名・一年十名がいる。有段者の数は他校と比べてひけをとらず、二段が二名・初段が九名とまじえて勝利をおさめた実力者も、三・四名いる。

今困っていることとしては、部員の数に比べて練習できる範囲が小さいことと、防具が少ないことである。この点については、剣道

部に割りあてられる生徒会費を多くしてもらわなければ、どうにもならない。一年生は一般に試合経験が浅いので、いざという時にあがってしまい、本当の実力を見せずじまいで終わってしまう。これは、試合の時に人数が限定されることや、いろいろな理由によって出場する人がかたよってしまうのである。だから、他校との合同練習や練習試合などをとしどしやって、一年生に十分試合経験を身につけて腕をあげてもらいたいと思う。

剣道試合といえば世田谷区だけでも三つ、国体予選(個人)・都大会などがあり毎年記録を更新している。

### 蹴球部

サッカー部は、昨年の四月に、同好会からクラブになったばかりです。その夏には、高体連に加名し、公式試合に出場できるようになり、部員も意気軒昂としていました。

活動は、週に四日間ありますが、そのうち三日間は早朝練習です。部員は、早朝練習に参加するために、まだ静寂を保っている道を通学しなければなりません。チーム力では、まだ伝統のある他校には及びませんが、練習

で得た技術・体力・知恵をぶつけて、悔いのない試合をしたいと思っています。また、部員相互の理解を深め、一層高度なクラブを目標にして、前進していきたいと思っています。

## 山岳部

山岳部。『恐しいクラブ』そう思われがちなクラブである。シゴキ・岩登り・冬山登山これらが『恐しいクラブ』と連想させる犯人であろう。シゴキは大学山岳部などでは行なわれているであろうが、わが松高山岳部では行なわれたことはない。登山というスポーツは、チームワークが大切なスポーツである。シゴキなどはチームワークをみだすだけである。岩登り・冬山登山は過去においては、行なわれていたが、現在はまったく行なわれていない。このように山岳部は『恐しいクラブ』ではないのである。

山岳部。『登山という遊びのクラブ』とも思われがちである。登山は遊びではないのである。立派なスポーツである。中には遊びのための山登りもある。しかし、わが松高山岳部が行なっている登山はれっきとしたスポーツである。

さて今年度、春と秋に丹沢へ二回。夏に北アルプスへ一回南アルプスへ一回。晩秋に奥秩父へ一回それぞれ山行を行った。また二月に丹沢。春休みに奥秩父へ行く計画を、たてている。他の活動は、週二回のトレーニング・文化祭の参加・部誌「T U R M」の作製などであった。

今年度で山岳部は創立十周年を迎えたわけであるが、いろいろな問題点はある。部員不足・活動内容などがそれであるが、来年度はこれらの問題点を一つでも解決をつけ、充実した山岳部を作っていきたい。

風が草の葉をわたって吹く。ひく陰がさびしい。山深くなるので寂しいような悲しいような気が迫る。鬱気である。人生の道連れをつくづくそのとき私たちは思わねばならぬ。

## 柔道部

我々柔道部は、部員数二七名、その中で八人が有段者である。今学年の前半は直接練習に出て来る部員が少なく、非能率的、無計画な練習が多かった。しかし、最近ほとんど

の部員が出て来るようになり、練習も大変充実してきた。練習内容は、始めは柔道の基礎である受身をやって、まず体を柔軟にしておから打ち込みをする。これは受と取に分れて、取が、自分の得意とする技を何回も繰返し受にかける。続いて乱取をやりますが、ここにはもう先輩も後輩もありません。技と技の戦いです。最後に寝技をやります。柔道のすべてにすばやい動きが必要ですが、この場合は特に重要になってきます。最後に礼をして練習が終了します。日常の生活でも礼は必要ですが、柔道に於ては特にそれが重んじられるのです。

柔道は、一歩間違えば大きな怪我をします。でも、それは受身ができて、練習をまじめにやれば防止できるのです。それゆえに、柔道をするとは肉体的だけでなく、精神的な向上も見られるのであります。柔道は、日本の代表的な武道であるのにもかかわらず、柔道人口はあまり多くない。それは、オリンピックの無差別級で、ヘーシンクに敗退したことにもあらわれているのではないかと思います。これからの柔道界をしょうとて立とうという若者、そこまではいかないとしても、精神的、肉体的に鍛えられたいという人は柔道部へ来



なさい。

我々は、これからも柔道を通して心身ともに鍛えられた人間に成る事を目標として、頑張っていきたいと思っています。

## ソフト部

今年度は、試合数を増やして試合の雰囲気慣れるというのが目標だったにもかかわらず、主大会三、練習試合一という低調な活動内容であった。人数も一年生六名、二年生七名とさっぱりで、練習が満足に出来ないこともあった。

しかし、狭いながらも楽しい我が家？ 女子だけということもあってか、クラブの雰囲気は明るく、そして気軽である。変に気どらず地のままで友達と接することが出来るのもこのクラブの特長であろう。しかし時にはそれが原因で衝突することもあるが。

夏休みの合宿では、一・二年生九名、それに三年生、OGの方が応援に来て下さり、皆一体となって元気いっぱい練習することが出来た。しかしなにぶん人数が少ないので、三年生にも現役と同じ練習をしていただき、私達のプレーをじっくり見てフォームを直して

いただくことが出来なかったということは考えなければならぬと思う。合宿に、そして今なおクラブに出て来て下さる先輩に今年度の私達のいたるなさを申し訳なく思います。

松高ソフト部が創設されて十数年・部員数は年々増えつつあるが、近頃は皆クラブというものを敬遠して入ったがらない。よしんば入ったとしても二年も後半となるとほとんどやめていってしまう。私達のクラブも例外ではない。初めは二年生だけでも十四名いたものが、現在半分に減って七名というさみしさ。しかし勉強だけしか出来ないカタワモノにならないためにもスポーツは必要ですよ。

来年度はやはり試合数を多くし、それを少しづつものにしていきたいと思います。そして毎日毎日歯が抜けているような状態ではなく、全員無遅刻、無欠席となるような状態まで引き上げ、増々良いクラブにしていきたいと思っています。……そういうわけですから、新入生の皆さま、クラブを選ぶならソフト部へどうぞ。女子大歓迎です。(男子は野球部の方へどうぞ)

## 卓球部

コート上の白球に全神経を集中し、一球一球全力で、全技術を傾け、柔軟な動きで相手を打ち破る……。これこそ日本が世界に誇る卓球そのもののなのである。先にストックホルムで行なわれた、世界選手権大会でも、日本は男女七種目中六種目に優勝し、日本の卓球が中共とともに世界のトップ・レベルにあることが実証された。従ってこれからの日本の卓球は我々若い層に大きな期待がかけられているのである。

我々松高卓球部も、ここぞとばかり奮気し、前進あるのみである。部員も四十人余りを数えるが、どういうわけか女子部員が約七割を占めている。男子部員も人数こそ女子に劣るが、カッコいい野郎が集まり、先が期待される。日頃の練習も、毎日が自分との戦いの連続で、少しでも油断をすると、仲間から追越されてしまい、毎日が激しい競争なのである。しかしその苦しい練習の中で真の友情が生まれてくる。とかく個人プレーになりがちな卓球は、チームワークの結果こそ重大であり、卓球部はこの輝やかしいチームワーク

によって支えられている。常にこのチームワークの中で自分自身を磨き上げていくのである。

それに今年は実力ある先輩達を中心となつて活躍して下さったおかげで、念願の五校対抗試合(松原・千武・明正・千武・玉川)においての対抗試合)に男女六種目中四種目優勝という実に輝かしい記録を残すことができた。しかしこの優勝というに名あまんじていたら進歩は望めない。たゆまぬ努力こそ一番大事なことで、これは何事に関しても言えると思う。この様に自己の持つ力を最大限に発揮し、努力している姿こそ卓球をやる者の美しさであり、スポーツの美しさであると思う。(S・U記)

## 庭球部

〔反省〕  
○去年にくらべて男子は、成績(試合の)がさえないかった。もっと部員が団結していれば、もう少しさえたのではないか。

○しかし今年の一年は、技術も良い方だし、割合団結しているようだから、来年はもっとばな成績があげられるだろう。

○OBとうまくいかなかった。お互いもっと信頼すべきであった。

○テニス部は男女合同のクラブにもかかわらず、何となく別れている感じだった。

〔クラブ紹介〕

○テニスを通じて、男女仲良くできる。

○全日本出場をはこる伝統あるクラブ。

○毎年、マラソン大会でのすばらしい成績。

○すばらしい先輩陣。

○一面のコートにもかかわらず、充実した練習。

以上松高テニス部は松高きっての素晴らしいクラブです。

〔今年一年の感想〕

今年の四月に入部してきた一年生は、男女共に今までの我々(先輩も含めて)とは性格的な何かが違っているようなので、これまでは別な面での新鮮なクラブになるであろうことが期待される。同じ部員の中でも個性の強い人が多く、自分自身のテニスとして楽しんでいるような気配がうけとられる。が、同好会ではないのだから、来年の新入生の入部になえて、部員相互の理解をさらに深め、技術の向上をはかると共に、一致団結を

信条としてわき目をふらずに前進して欲しい。

りっぱなO・Bの方々も多勢いらつしやるし、男女いっしょのクラブであるという強みからも、コートが一面というハンディを克服し、クラブというものの意義を深く考えて欲しい。周囲から見れば、だいぶきびしいクラブのように思われているらしいが、まだまだ諸先輩、テニス、に対する礼儀も不完全であるから、ミーティングを増やしていろいろな面での知識も深めて欲しい。

## バレー部

今年の合宿の第三日目のことである。我々は夏の強い日光が降り注ぐコートに一列に並ばされて、あるコートから、「おまえたちは何の目的でバレーをやっているのか」と聞かれたことがあった。我々は即座に、「試合に勝つためです」と答えたかった。しかし、そのとき、我々はそう答えることができなかった。なぜなら、我々はその「勝つために」という言葉のすぐ後に、非常に苦しい練習が待っているということを知っていたからだ。我々はその苦しい練習が恐ろしくて、そう答える



ことができなかったのである。コーチが去ったあと、我々は苦しい練習を恐れて、我々がいつもバレーをやる目的としている「勝つために」という言葉を口にだすことができなかったというくやしさが胸がいっぱいになった。そして、何かを思いっきり握りつぶしてやりたかった。しかし、それと同時に、二度とこんなくやしさは味わうまいと心に決めた。

それ以来、我々は体力向上、あるいは技術の向上というよりは、むしろ苦しい練習を恐れず、それに正面からぶつかっていきける強い精神力を身につけようと努力するようになった。そうして努力してきた現在、もし、誰かが我々に、再びあのとき、あそこでした質問をしたら、我々は即座に、そして堂々と「試合に勝つためです。」と答えるだろう。たとえ、その後にきびしい練習が待っているように。

現在、我々は「日本一のチーム、無敵のチームになる」ということを目標にして毎日の練習に励んでいる。もちろん、そこへの到達の道は、我々が以前まで恐れていたきびしい練習という一本の道しかない。その一本の道を我々は毎日多くと前進している。

我々は挑戦したのだ。バレーボールをやっているすべての高校生に。

## 野 球 部

今年の野球部は、一番野球部として大切なチームワークがあまりにも欠けていた。一人一人の個人プレーなどよりも、心から仲間を信頼し、又信頼に応えられるように自分も努力していった。松高野球部が対校から強敵と恐れられる時が来るのである。一年生は今の状態に甘んじず十人一人が自覚を持って、部長を助け、まとまった部を作ってもらいたい。又クラブに入っていない諸君、これから入ろうとする諸君、君たちの中で「松原にもクラブ活動があったのかと思われるようなクラブを一つ作ろう」なんて思っているそんな諸君に伝えらるようなクラブにしていってくださるだろうから、期待して入部してもらいたい。

## ラグビー部

ラグビーに於て最も必要な事はチームワークである。それは一人／＼では到達できない。

年の力強いエネルギーな体と体をぶつけ、若者の満ち満ちたエネルギーを発散することが出来る唯一のスポーツであると信じている。今私達は関東大会を目ざして毎日毎日練習に励んでいます、唯一の悔みは我がクラブには伝統はあるが、部室に電灯がないことです。

## 陸 上 部

陸上部の真の姿を紹介します。昨年は、四月の東京大会と十月の東京新人戦の二つの大会に出場しました。参加全種目とも予選で失格しましたが、部員の大部分は自己記録を延ばしました。これは一昨年より部員が増し、大会前には一応全員がそろって練習をしたからです。しかし、もっともっと練習ができたのですが、部員それぞれが都合のいい理由で練習をさぼってしまったのです。陸上部の練習が単調なため、意欲に欠ける者には長続きしないのです。強い者が一人でもいれば、部員もやる気が出てくるだろうけれども、中学程度の実力から進歩せず、大会でいつもうしろの方にはやる気はでません。その点、松高の体育祭なんかは陸上部の活躍の場で

い点を十五人の心からの信頼と協力をして理解によって力を合わせ、統一体として動くことによって克服しようとするものである。だから我々一人の技術的な名プレーヤーよりも、チーム中のプレーヤーとして自分の任務を確実にやり通す人間を望む。ラグビーほど技と力が必要とするスポーツはない、力だけが強くても、技術だけを持ってしてもラグビーはできない。闘士、戦法、技術、体力、スピードそして人間の魂が必要だ。試合は自分のベストを尽せば敗けてもかまわない。しかしベストを尽すには、一日一日の練習がたいせつである。一日一日の努力がゲームにおいて、ベストを出すことにつながるのだ。ベストを尽せば敗けても良いというが、人情として勝たれたいと思うのは自然である。しかし勝つには正々堂々と勝ちたい。ここから他チームよりもいっその研究と努力とチームワークに対する各人の精進が生まれるのである。練習は、競技が体をぶつけあうという激しい性質上、激しく、苦しいものです。しかも、気を抜くと、ケガをしやす。練習。試合が激しく苦しいものであるため、終った時の満足感、充実感も他にくらべるものがないほど大きい。前にも述べたが、ラグビーは、青

## 籠 球 部

松高の運動部は大学受験準備などのために三年生のクラブ参加が著しく減少する。我がバスケット部も例外ではない。そこで、毎年六月頃に行なわれるインター・ハイではなく、十一月に行なわれる新人戦に目標を置いた。

コーチの指導により体力づくりから練習は計画的にはじまった。夏休み、合宿ときびしい、たえない練習が続いたが、一年生も良くなってきてくれた。又、それでなくても、体育館を利用できる日数が少ないのに体育館修理のために外でやったり、小学校の体育館を借りて練習をしたこともあった。しかし、大会において、一・二回戦は順調に勝ち進んだが、都大会出場権を得ることのできる三回戦目で破れてしまった。一方女子も二回戦で破れてしまった。やっとたどりついた、最大の山場、目的はやはり試合であり、またその勝利という一言につけるといえるが、同時に敗北を味あわなければ、さみしい、くやしい、目にはみえない気持ちもわからないのだ。目標は果たされなかった。が、去年とは違った収穫があった。それは練習中に悪いプレー



ーがあれば、一年、二年の差なく注意し合ったことである。あたりまえなことであるようだが、下級生が上級生に注意するというのはバスケットならではの光景ではないだろうか。このように今年は一年生のバスケットに対する積極的な態度が目立ち、来年を期待している。だが、他校に比べ小柄なチームであるのをどう補っていくかが、今年を通じて来年の課題となりそうである。

## ワンダーフォーゲル部

今年は、前年に立てた計画を実行することはできたが、全部員の気力が欠けていたためにあまり活発ではなかった。約月一回のワンデリング、部誌の発行、文化祭参加という活動はあったが、前年までの活動内容をくり返したにすぎなかったように思われる。これはワンダーフォーゲル部の活動が一方だけに片寄っていて、湖、平野、山と広範囲に活動しなかったことが最大の原因であったと思う。

我々松原ワンダーフォーゲル部は「協力し合って、自然の中で生活し、そこから自分達を成長させていく」このことを目標に進んで

きた。週二回のトレーニングにより、体力と精神力を養い、週一回のミーティングで地図・天気図・その他の諸知識を身につけ、ワンデリングする。このことは普通の体力のある人ならだれでもできることです。今年のワンデリングで、最も長く、苦しく、楽しかったのは、七月後半から八月にかけて、苗場山附近で行なった合宿です。青く澄んだ空の下で、大きなザックを背負い、野山を歩き回り、予定の地点でキャンプする、テントをた

て、食事の時間ともしなければあたりも薄暗くなる。夜になると、無数の星が輝く中で歌を唄う。こんな風に、六日間を計画に従って過ごした。これは参加した部員に有意義なものとなったであろう。

来年の目標は、行動範囲を大きくし、ワンデリングの回数をふやす。そのために、トレーニングを強化し、ミーティングで多くの知識を吸収、また装備を充実していきたいと思っています。



## 「拝啓委員長殿」

### 生徒会誌編集委員会

昨年、皆さんに書いていただいたアンケートより、各委員長に質問状を作成しました。「長いこと、委員長に聞いてみたいことが、いっぱいあって、まとめるこちらにも汗を書きました」なんて、ここに書いてみたいなあと思っていました。案の定、アンケートに書かれていた質問は以たりよったりの……

「おまえら、何やってんだー」でも考えようによっては、それだけ、松高の委員会はこの政府と違って、霧も薄いということかもしれません。

## 評議会

①「何をやっているのかわからない」という声には、どう考えるのか？ これから

どうするか？

——確かにP・R不足でやっていること自体わかってもらえないと思うけど。今やっていることを言うとは総務小委員会が今度、規約改正、会費値上げの件をやっていますけど。それと総務小委員会と財務小委員会とあと議会の委員会があるんだけれど、まー議員は別としても財務小委員会と総務小委員で相談して予算を決めているわけです。評議会というのは元々規約にもあるように「助言と承認」をするもので、まして活動していいのじゃないかといわれるのもしようがないと思うけど、こちらでは活発にやっているつもりですけど。

「——どういう考えですか？」

そういっても答えようがないのですけど。でもアンケートなどをやってP・Rしたいと思っています。これからは規約のことなど、ミーティングでやりたいと思っています。

## 文化委員会

①「これからの弁論大会の方針は」……

——今までとまるつきり同じようにやるつもりです。授業をつぶして、体育館で強制参加をさせる。

②「今後の活動計画は」……

——来年度は、映画会を中心にやりたい。その映画は芸術的作品を多くする。そして、六回位やるつもりです。その他は、弁論大会を一回、討論会もやるかもしれない。

③「反省としては」……

——委員の出席率が大変悪かったことと、横のつながりがまったくないのでこれから、各クラスで話し合いのできるようにしたいと思っています。

## 図書委員会

①「生徒の読みたい本を買って下さい」という声に対して……

——図書室にある新刊購入希望アンケートに記入すれば買えます。しかし予算ですがPTAなどから出ますが少ないので希望どおりに買えるかどうかかわかりません。

②「当番はなるべく早くきてください」と



いう声に対して……

——出来るだけ早く来ます。



## 生活委員会

①「最近、風紀が乱れている」という声に  
対する考えは？

——きびしくします。

②「議論しているけど、実行しない」とい  
う声に対する考えは？

——委員が出て来ないので活動しようが  
ない。

③「何をやっているのか、わからない」と  
いう声には……。

——ホーム・ルーム研究委員会では

ホーム・ルームの統一をどうしたらよい  
かということを討議中。風紀委員会では  
いま風紀がみだれているので幅子とサン

ダルとトックリのセータを厳しく取り締  
まることを決めました。それと調査をし  
っかりやること。それから今後の方針は  
今まで通り。それから他校訪問をしたの  
ですけど成果があったと思います。

## 整美委員会

①「活動状況がわからない」という声に対  
して……。

——活動状況は生徒ホールの前の花壇に  
春、秋に球根を植える。大掃除のとき道  
具の数をそろえるということですか？

②「先生の指導要領はどんなことですか  
？」

——大掃除のとき、道具の数や種類を指  
定してくるというようなことです。

③問題点は？

——委員の出席が少ないこと。



## 保健委員会

①「校舎内の保健衛生に気をつけろ」とい  
う声に対して……。

——できるだけやりたい。

②「何をやっているかわからない」という  
声に対して……。

——何もやっていないが、ドブ掃除くら  
いこれからやるつもりです。



## 体育委員会

①「委員会としての考え、主張を入れたら  
どうか？」……。

——まあ、できることならそのようにし  
たいと思いますが、先生などの指示が多  
いので、思うようにいかないところで

す。

②「体育祭・マラソン大会の時以外は、何  
をやっているのですか？」……。

——行事としては、球技大会などがあつ  
て他には別に活動をやっていません。し  
かし体育祭や球技大会は準備がたくさん  
あつてとってもいそがしい。

③「これからどうしますか？」

——もっと活発にしていきたいと思いま  
す。

対して……

——今のところ講習を主にやっていま  
す。

②「もっと予算を平等にしろ？」……

——平等といっても活動が盛んなところ  
とあまり活動していないところがあるの  
だから仕方がない。だから完全に平等に  
はいかないと思います。

③「グラウンドの使用が不平等のような気  
がするが、そういうことを公善として、  
行なわれているのを、黙ってみているの  
か？」……

——そういつても橋本先生の権力は強い  
し、ばくらで勝手に決めるわけにいきま  
せん。

④「クラブをやめる、やめたいは個人の自  
由の筈なのに、周囲から圧力がかかる  
というのはどういうことか？」……

——あまり良くないことと思いますが、  
いまのところ何もやっていません。

⑤「O・Bという地位に関する考えを説明  
して下さい」

——ぼくはO・Bというものを知らない  
のでお答えできません。

※その他に『要望』として

各クラブの問題点を学校側とよく連絡し  
合い、話し合って、少しでも悪いところ  
を改善して下さい。

## 新聞委員会

①「内容を充実させろ！」という声に対し  
て……。

——委員会としては勿論努力しているわ  
けです。ただそれはみんなの見方で違  
うわけです。委員会としては今ちょっと停  
滞ぎみなので、それをもう少しがんばる  
ために委員の根本と基礎からはじめて  
いるわけです。だからこれから良くなっ  
ていくと思います。

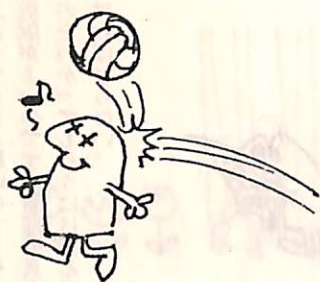
②「先生と記事の内容でぶつかったり、意  
見がわかれたりした時どうしますか？」

——今のところそういうことはありません。

③今後の活動は？

——新聞はやはり活版で出すほうが良い  
と思います。いくら予算が少なくても活  
版でやりたいのです。どうしてかとい  
うとカリ版ではアビールの度合が違いま  
す。活版であるといくら内容が悪くて

## クラブ委員会



①「何をやっているのかい？」という声に



も、まず読んでくれるでしょう。ガリ版だと読んでくれない人が多いわけです。みんなが読んでくれることによってみんなの意見が沢山くるので内容もそのために上がってくると思います。そのためにも活版がよいのです。新聞委員会というものをわかってもらうには読んでもらわなければならない。



#### 放送委員会

- ①「M・B・Sとの関係を明らかにせよ」という声に対して……。  
やっています。  
「全部委員ですか？」  
——そうです。去年の三月に規程改正で

同好会と委員と協同でやっていたのが完全に一本にまとめられ全部委員会という形でやっています。

②「いつでも放送を受けて欲しい」という声に対して……。  
——あまりに私的なこと以外は受け付けることにしています。やはりある程度の線で切らないと一人がだれかを呼びたいためにそういうことをされるといわれる私用になってしまうのです。やはりある程度の線でくぎってそれに時間も三時半に終わっているのだけれど、生徒会で緊急の時にやっていますが、それ以外でやっています。それ以外でやると時間をきめて流さないと効果が薄れるわけです。そうしないとやる時に全部聞いてもらわないといつでもやっているとなくなってしまうとなると聞き流してしま



うので一度にやると聞いてくれるので一つにしているのです。

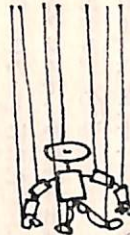
③今後の活動方針は？  
——いまのところ自主的な音楽番組だけしかできない状態です。今後はできれば生徒会の学校ニュースみたいなものをどんどん流していきたいと思っていますね。なかなか基礎がないんで僕らもやりづらいのですけど。

#### 選挙管理委員会

- ①「候補者が数多くするような状態を作る努力はどのようにしたらよいか」  
——それはもう各クラスの選管委員がみんなに働きかけるということです。  
「他に……」  
——みんなが立候補してくればそれにこしたことはない。  
②「立場をはっきりさせろ？」という声に対して……。  
——不答——

#### 文化祭執行委員会

- ①「文化祭の後は活動が見られないが……」  
——と言う声。  
——まったく賛成です。いまは来年のスケジュールなど一年に任せています。ときおり一年生の活動を見に行く程度にしています。その他には問題点の反省などを行っています。



#### ル・クール編集委員会

- ①「進行状態を知らせた方がよい」という

のに対して……」

——各委員会と同じように、次のショウトホームルームに来年から発表しようと思います。

②「一般の寄稿をもっと多くするべきだ」というのに対して……。

——生徒会の機関雑誌だからそれで良いと思います。

——多くした方がよいというのですけど。

——集まらないのですから……。

委員長があんな答えを、しゃべったからって、おこる相手がちがいます。なんでこんなフスケの生徒会になったのでしょうか。考えてみたら、みんな他人を批判することなんてできないんですよ。そうでしょ？



## 弁論大会

今年度の文化委員会は学生の自治活動と先生の指導との対立から生じて起きたと言える弁論大会を中心に行なってきた。では弁論大会について詳しく説明いたします。

六月九日 文化委員会で弁論大会についてこのように決定した。

一、各クラスで、弁論大会出場者を一名提出する。

二、日時は六月二十一日(水)体育館で行なう。

「H・Rを使って行なう。だから、全生徒が聞かねばならない。」

そして、文化委員会は顧問の先生に、六月二十一日弁論大会を開きたいと提案をしました。

そして、顧問の先生は、その案を臨時職員会議を開いて可決してくれました。その時の条件として、今までの弁論大会と同じく、「原稿は各担人に提出する」という事で可決されています。

それが、開催直前にして中止になった。

その理由は、ある三年の弁士が、そのクラスの担人の先生に呼び出され、弁論大会の事について話された。そして話し合いがつかず、その担任の先生は、指導を受けなければ退学してもらうと言いい、校長や教頭の所でも一度話そうとおっしゃって、教務室に一緒に行った事、校長も教頭も学校にいなかった。で、学年主任の先生をまじえて話し合った。そこでその三年の弁士たちは、原稿を担任に提出することに承知した。だが次の日、その三年の弁士たちは、原稿を提出する事を拒んだ。

その理由は「文化部の先生から原稿を提出するように言われ、その理由を問うと『政治的なことはまずい。』という答えだった。そして原稿を提出するのを拒むと『学校の指導を受けないのなら退学してもらう。』と言われた。そして学校側は親心による指導と言うが、このように強制によって——退学してもらう——行なうことができるなら、この原稿提出は明白な検閲である」という。このような理由により当初、十一名いた出場予定者のうち七名が出場を辞退したため、文化委員会は弁論大会を中止と決定した。

しかし、問題は全然かたづけいたわけではない。先生は「政治的発言はまずいと言っていない。私は極端な政治的発言はまずいと言った」と言っております。このように、学校内において、言論の自由があるのか、また僕たち高校生が思想・言論の自由を持っているのだろうか、という疑問も出てくる「T・S・ミルは思想・言論の自由は、真理の発見のために欠くことのできないものであると言っている」そして、弁士の意見と先生の意見との違いをなくすために、文化委員会は、学校側と出場辞退者との間で

○原稿提出は検閲ではないのか。

○政治的発言はなぜいけないのか。

○両者の意見のちがいを明白にする為。この三点で話し合いがなされた。

その話し合いの内容を概略的にのべると、『教師が、政治的、思想的なものはいけないという考えを持ち、生徒を指導しようとする意図を持って、原稿提出をさせるのなら、それは憲法において禁止されている検閲にかならない。思想の自由は言論の自由——憲法ではその制限を禁じている——を含み、それは自分の考えを發表する自由である。そして権威に反対する自由として保障されなく

てはならない。たとえ、表現の自由が是認される場合でも、それは事後になされるべきである。学校側は我々の弁論内容が、一・二年生に悪い影響を与えると考えているらしい。このようにどれが良いか悪いかを一方的に決められ、その影響を行使するのを妨げられるのは全く受けいられない。

又、先生の言う指導の範囲がわからない。『指導者という立場で、文字や語句の使用の誤りを直すという目的で検閲しているのなら良いと思う』と弁士が言ったのに対し、先生側はこのように答えてくれた。『概略』

『弁論大会は自由討議の場ではなく、訓練の場である。そして今まで論旨に対して、意見・批評は述べてきたが、訂正はしていない。検閲したところで、いったい何になるのか。出場辞退者の原稿提出の拒否は、学校の指導の拒否と認めざるを得ない。学生、生徒は教養として、高い政治的な考えを知る必要がある。研究もかまわないと思う。』

弁論大会の本来の目的は「弁論技術を身につける」ということで、最近の風潮は「自由討議」であって訓練にはなっていない。訓練だから指導が必要なのであって、最近のような弁論大会なら、本校では認めるわけにはい

かない」と。

しかし、弁士も先生も対立したままで、全然決着がつかなかった。以前が一応前期の文化委員の行なった事である。

そして、後期の文化委員会10月5日の行事予定作成の時は、後期文化委員会は弁論大会を行なわないことに決定した。しかし、もう少し深く考えて見ると、このような変な状態にある弁論大会を放っておく事はできない。

又、文化委員会の主旨である文化問題その中に入る、高校内においての、政治的な事について、又、高校生の思想・言論の自由などについての問題をあつかう必要と松高において、研究発表や自分の考え、意見を持っている人がいても、何も言えなくなる事は大変悲しい事であると思いい、臨時に後期文化委員会は後期に弁論大会を開催する事を決定した。

一、H・Rを使って弁論大会を行なう。  
二、弁論大会についてのアピール委員を作る。  
三、弁論大会についてのアンケートをとる。

四、検閲といわれる問題が起きた時、文化委員会を開き、そこを仲立ちとして弁士と先生に話し合ってもらって、それに付

いてどうすべきかを、文化委員に判断させる。

このように決定いたしましたして、文化委員会の顧問の先生に提出した所、

一、弁論大会は後期行なう事は不可能である「できない」

二、アンケートは、三点変な点がある。そしてその3点を省く骨ぬきになるから、出す必要はない。  
と言う返事が帰って来た。

そこで、文化委員会は顧問の先生となぜ後期弁論大会を行なう事ができないか、又なぜアンケートの三点が変なのかについて話し合った。

### 弁論大会について

一、なぜ弁論大会が二学期行なわれるようになったのか理由がわからない。  
二、行事が簡単にとれなくなった。  
三、文化祭、体育祭を早めた先生たちの気持ちが無視した。

四、冬なので時期的に適當ではない。

### アンケートについて

一、『後期の文化委員会は、弁論大会をH



・Rを使ってやる事にしましたが、「それに賛成反対か。」この文に対して、「H・Rを使ってやる」というのは、「生活委員会から予定が提出しているの、使われるのは困る」と生活委員会の顧問の先生から言われた。

二、学校内の検閲について、あなたはどうか考えますか？

① 文章が削除されたり、訂正されたりする事。

② 見る人に削除したり訂正したりする意志があれば検閲と見る。

③ 文章を見る事したい検閲と見る。

④ 学校内であるので、文章を削除したり訂正しても検閲とみなさない。

この文について、検閲とは戦前高等警察が事前に見たりする、又、出版を禁止する、事であって、学校は教育する場所であるので原稿を提出するのは指導であって、検閲とは言わない。だから、この質問はおかしい。又、生徒がこのような検閲の概念を知らないから。

三、あなたは、学校内において圧力がかったと思いますか。[はい・いいえ]

この文については、学校では圧力はかけた事

がないので書くことはおかしい。

このような理由で弁論大会もアンケートも中止と言う形になった。しかし名文化委員はあきらめず、先生方と3回も対話をした結果、このように決定いたしました。

一、後期に、文化委員会主催の弁論大会を行なう。[放課後自由参加の形で行なう]

二、原稿は文化委員会が集める。又、各弁士に四百字詰の原稿用紙一枚に詳しい要項を書いてもらう。そしてその要項を文化部の先生に提出する。

三、アンケートは、弁論大会を行なったあとでその本質についてアンケートをとる予定である。

そして文化委員会としては、放課後に行なう弁論大会を成功させようと、みんな一生懸命やろうと思っています。

その後生徒総会により、弁論大会に関する問題点(一般の人の意見を聞くため・検閲・弁論大会についての建設的な意見を求めるため・このように決まった過程を説明するために)をあきらかにするために公聴会を開催した。そこで出た意見をまとめて述べて見よう。

過程説明があった。

話し合っていて、先生側は最後には生徒の自由を認めてくれるのか。

### 先生側

一、学校は教育の場である。又、教育基本法第8条により、特別な政党を支持してはいけない。

二、指導要項に常に教師の適切な教育が必要である。だから指導が必要である。

三、学校の自治と生徒の自治は協同体であって、権力ではない。

四、スピーチの練習の場であり、聴者を考へなければならぬ。

五、教師は、生徒に対する責任と学園に対する責任もある、だから行事でもなんでもいけないことがある止めさせる責任がある。

六、生徒が何を考えているかわからないから原稿を提出してもらいたい。

七、政治的問題はとにかく広い、だから生徒の狭い見方では、どうも心もとない。

又、学生が政治に関心を持つことは必要であるが一方的な攻撃のように思える。八、かたよった考えを述べることはいけない。

このように公聴会により意見が出た。  
△私の意見▽

このように現状を述べて来たが、ではなぜ文化委員会は、問題を起こしてまで弁論大会をやろうとするのか、そこにおいては、弁論大会が始められた頃の「弁論術を学ぶ」というものよりも、それを含めて、松高内において、自分の研究発表なり自分の意見・考えを発表する。またそれを聞いて、より多くの人間に今まで学校生活では経験できなかったことや、色々な人の考え方などを自分の頭の中に入れて、少しは自分の進むべき道についての「助言」としてもらいたいわけであります。だが、私たちのこういう考えも、現在統けられている弁論大会では討論形式を好むこの頃の人々に対してあわなくなってきたのではないかと思われる。

しかし、今年度の弁論大会は自由参加という形で行なうのは、少しでも討論会形式という形にしかたなくんだように思える。

ところで、前回の事にもどるが、私は先生と生徒の間には、信頼により強く結びつかねばならないのに、もはやその信頼感というものが、先生は生徒に対し、又、生徒は先生に對しなくなってしまったのではないかと思

一、原稿提出を拒否したわけではない。すべての責任は、文化委員会と総務にあると思う。

二、弁論大会は、文化面の創造はあくまで生徒側が主体であるべきだ。

そして、一般生徒は批判の自由[選択が認められる]があるので、一方的な原稿削除はおかしい。

三、政治的とはどんな意味を持つのか。

四、先生側同志にも意見のくい違いがあるのではない。

五、弁論大会に指導は必要はあるか。

六、弁論大会はスピーチの場である、だから、内容は十分考慮してあるはずだ。又高校生なのであるから、社会的政治的にも目がひらけてくるので言ってもいいではないか。

七、今の弁論大会の現状は、今の我々にはあっていないと思う。むしろ討論形式があっているのではない。

八、原稿を提出した時、何を基準としてどう判断するのか。



九、今まで先生と生徒との誤解があった。

う。私はこの点が、この前回弁論大会が中止になった一番重要な事ではないかと思う。だからそれにより、意見のくい違いという事が生じるのではないか。だから信頼という点を少しづつ現状よりよくしようとするのなら、もっと話し合いをするべきだと思います。故に弁論大会について言うと、弁論大会をやるという目的の為に両者が徹底的に話し合えば、大きな収穫が得られるだろうと思います。ところで、自由と言う事がよくとりあげられているので。

自由っていったい何んだらう!!

・我々は自由である。しかし、我々は自分で責任がとれないので、その自由には範囲がある。

・極端な発言はやめさせる。

自由に範囲があるという事は解かりますが、その範囲とは一体どこまでなのだろうか？ 極端な発言はいけなさと先生はおっしゃるけど、それでは我々は常識内の事しか言えないのだろうか。それじゃまったく弁論大会などやる意味なしと思う。常識が正しいとは限らないし、たとえそれが全く非常識きわ



まりない発言でも百年後、千年後にはどうなるか解かったもんじゃない。

その発言が極端だの悪いだの正しいなどという事は、歴史によって証明されるのであって我々にはそんな事をいう権利はないと思ふ。

それに責任をウンスンされますが誰に對しての責任なのだろうか。たとえば弁論大会という場において、生徒が特定の政党を支持したからあの学校は偏向教育をしている、と即座に決めてしまうような人に対してなら、まったく無意味だと思う。

### 体育祭(体育委員会)

一、日程 九月二十四日

去年通り十月一日に行ないたかったのですが、文化祭の日程がとれなくなるため一週間早めた。

二、予算

予算 四万七千八百円  
支出 三万六千六百三十二円  
残金 三千三百六十八円

三、役員

昨年と同じく、運動部中心にやってもら

った。

四、種目

いろいろな競技をやリたかったが、期間の関係などで、団体種目が多少変わったのであった。

五、おもな反省

①放送委員との連絡が徹底していなかった。

②応援合戦の時間を取りすぎて競技時間が延びしまった。

③体育委員の仕事が不徹底であった。

### 文化祭

専門委員会文化祭執行委員会は、四十一年度生徒会によって行なわれた規約改正により生徒会誌編集委員会(つまりこの雑誌ル・クールを作った委員会)と一緒に独立しました。昨年は文化委員会の附属の委員会として、それ以前は文化委員会が文化祭を執行しました。文化祭は過去十数回行なわれましたが、正確な回数がつかめません。ところが、今年のプログラムには十七回と印刷してしまいました。これは、本校が創立十七周年であることから、第十七回文化祭と感違いしてし

まったのです。ところで、四十二年度の文化祭は執行委員会が独立して初めての文化祭でしたので本来なら、今までの経験と、独立した強みでもって今まで行なわれたどの文化祭より充実したものとなるはずでした。しかし、実際と考える事とはかなりズレが出来、思ったほどの成果はあがりませんでした。

#### 資料1

|    |                |
|----|----------------|
| 四月 | 年間スケジュール       |
|    | 役員選出           |
|    | 役員決定           |
| 五月 | 執行形式原案製作       |
|    | 執行予算決定         |
|    | プログラム製作開始      |
|    | 執行形式決定         |
| 六月 | 縦割グループ設置       |
| 七月 | 広告の取極          |
| 九月 | クラブ・グループ催し物決定  |
|    | プログラム印刷        |
|    | 執行費分配          |
|    | 体育館備品点検        |
|    | 体育館練習(文化祭一週間前) |
|    | 二九日 飾付         |
|    | リハーサル          |
| 十月 | 三十日 文化祭第一日目    |
|    | 一日 文化祭第二日目     |

制をと、提案してみた。すでにH・Rの計画は変えられないとして実行はされなかった)以上のような事から、統一テーマ制は廃案となり縦割制を行なうようになった。

五月からプログラムの製作は始められた。と言っても、一番最初は広告を取りに行ったのである。大ざっぱな目標金額を決め、次にどこへ行くかを決めた。広料の金額を決めた時、最低プログラムの製作費は出したいと考え、目標を四万五千円から五万円ぐらいを見積った。なぜこんなに早くから広告などを取るかと言うと、大手の会社はプログラムにのせる広告を八月ころまでで切ってしまうのである。そこで五月ころから始めたというしい。ところが、五月には校内球技大会があるため委員が出て来る事が出さず、本格的に広告を取り出したのは六月以後であった。

プログラムの編集は、六月ころに原本作りから始まった。原本を作る事によって、頁数・内容・レイアウトを考えるのである。プログラムの頁数は印刷機械の関係から六の倍数という事になる。次に六の倍数のページの中で、参加するグループの原稿の枚数を割り出す。その原稿の数を各グループに依頼する

役員の出退の終わった後、新役員を中心に今年の執行方針を検討した。学校内の生徒同志の間を親密にするという事から、クラス単位を中心として文化祭を進めたいと考えた。そこで原案はクラスを中心とした統一テーマ制と、マンネリ化はしているが比較的危険性の少ない(悪く言えば、あたらずさわらず)縦割制の二通りの執行形式を作った。委員会の意とした形式はもちろん前者の統一テーマ制であった。それでは、意とした新の統一テーマ制とはなにか。過去の記録を調べても、これといった具体的な説明はない。統一テーマ制が結びつけられているものは文化祭とH・Rであった。この中で考えられる事は、いままでの自由制(どうも最近自由じゃなく、行き当りである)を發展させるために、一つの目標を作るものなのである。昨年もこの方法が考えられたらしい。執行委員会としては、今まで發展が見られなかった文化祭をいかにしたら、生徒のものとして發展するかを考えた。もし、今回大きく動くならば、今までの方式を変えなければいけない。そして、文化祭が持っている役割をはっきりしようと考えた。文化祭を使って松高の中に満ちている、冷笑主義、孤立主義(新造語)を無くそ

うと考えた。一番各人に近いグループであるH・Rを最小単位として、目標を作り、それに向かつて行動するようにしたい。その目標に向かつて進む間のH・Rの中の活動によって、連帯感を作り出そうとした。この時、協力が必要である生活委員会へもこの事を話した。しかし、この計画は下積の研究がなかったため、多くの人に理解されなかった。クラス中心にした時、まず反対したのがクラブであった。クラブは一年間の研究を文化祭の時に発表するわけである。おまけに、その場で適当に作られたクラスなどと一緒にされるのは困るという。また、先生方の中にも文化祭は文化クラブの発表の時、体育祭は体育クラブの発表の時と考えておられるようだ。委員会としては、常に生徒中心と考え、どのようにしたらより多くの生徒の文化祭り、生徒にプラスになるかという立場で文化祭を執行する。各クラスへのP・R不足から、統一テーマを行なった際自分達のやりたい事を押えられると考え、反対がかなりあったように思う。

(執行委員会から生活委員会へ、どうせ統一テーマを行なうならH・Rのやり方も統一



わけだ。ところが六月では、クラブは別としても、縦割グループなどでは催物が決まっていけないので、原稿が出てくるのは夏休み過ぎだった。その間に委員会の方では、印刷屋へ行き、プログラムの製作方法・値段の取りきめなどを行なった。この時の見積りの値段は四万二千円ほどだった。夏休みも過ぎると、プログラムを印刷する日もせまっているのが、原稿が半分ほどしか集まっていなかったが、ゲラ刷に回し、残りは途中で入れてゆく事にした。表紙は夏休み前に美術部に依頼した。原画は、藍色の地に白で文化祭と書いてあるものだった。しかし、白く字を印刷する事は出来ず、また、字の部分だけ色をぬくのは値段が高くなる。そこで、青の地に、黒の線で書いたプログラムが出来たわけである。原稿を入れながらゲラ刷りは合計三回行なった。しかし、時間的にかなり押迫まっていたので、文章の更正までは出来なかった。

文化祭前で起きた問題の一つ、エレキ・グループの問題があった。文化祭の有志参加を募った時何組かのフォーク・ロックのグループが出場を希望した。委員会としては別に禁止というような事は出さなかった。先生にその事を報告したが、先生方としては学校内で

行うという事に賛成されなかった。そこで文化祭などの元締を行なっている。文化部の先生方がフォーク・ロックのグループへ対する条件を設けて職員会議に提出して、職員会議の賛否を取った。

フォーク・ロック・グループへの条件

●顧問の先生がいる。

●スタジオで練習する。

●校内で練習を行なうのを禁止。

●父兄の諒会を取る。

●文化祭後は解散。

以上が文化部より出た条件

しかし、職員会議はスタジオでの練習などの校外の事までの責任を負うのは難かしい。また学校などでエレキギターなどを使って演奏を行なうのはどうか、などの事から禁止という事になった。

九月に入ると、本格的に文化祭の支度が始まった。しかし、九月に入ってから全部のグループを活動させるわけにはいかなかった。縦割グループの中には、九月に入っても催物さえ決っていないグループがあった。そこで、一週間というものは動きたくても動けなかった。他方では定時制と最後の話し合をし。運悪く、今年の文化祭は定時制の修学旅

行と重なった。本当なら、松原高校の文化祭なのだから全定が一緒にやらなければならぬのだが。そこで、せめて演劇部だけでも考えたが、前に書いたような理由で、演劇部も出る事が出来なくなった。

体育館の練習に入る前に、体育館で使用する備品を点検しなければならなかった。体育館で使用する備品といっても、暗幕と照明だけなのだが、けっこう手間取る。さて、暗幕も張り、照明の準備も良かったのだが、練習するグループがいない。いささか、あてがはずれた感じがした。体育館の練習も遅れたが、前にも書いたように、九月に入っても、原稿は半分も集まらなかった。一回目のゲラ刷りを見てみると、かなり白い頁が目につく。もっとも、催物が決まらなければ原稿は書けない。しかし、催物が決まらないという事は、他方でも多くの影響を出した。原稿の遅れ、体育館練習の不可能、放送用原稿の遅れ、事務的な遅れ、やたらに遅れたたわけだ。そんな間を縫って他校の文化祭の見学も行った。しかし、他校の文化祭を見て、自分の学校の文化祭の青写真を考えても、実際の現場を見ると、青写真通り行なう事の難かしい事を感じた。

文化祭も一週間前に迫って来ると、どんなにやらないグループでも、文化祭の支度を始める。グループの中がバラバラでまとめようのないグループの責任者は、普通のグループが終って、皆帰ってしまった支度に追われていた。縦割グループなどでは、考えの違う、一年から三年までを集めたので、ほとんどバラバラに近かった。そのため練習したり、支度をしたりするのが遅れていくのがめだった。それが一番よく表れたのが大道具だった。多くのグループが大道具を提出したのは、文化祭の二日前だった。それもかなり難なため移動不可能に近いものもあった。

さて、動かない大道具を動かし、原稿のない疑音を流して、二十九日のリハーサルを行なった。この日は午前中で授業を終え、午後から、飾付けと、舞台練習を行った。だが半日で飾り付けを終えるのは難しく、時間の八時を過ぎるまでかかった所が多かった。まして体育館の練習が終ったのは十一時であった。

九月三十日 (文化祭第一日)

六時。自分のグループの教室の飾り付けの終っていないグループが来て、仕事を始める。委員が来て、最終的な点検を終らせる。

十月一日 (文化祭第二日)

前日の失敗した点は、すべて直して、二日目の執行を行なった。それでは問題がなかったかという。午後になってから社研が入口に、ベニヤ板四枚分の大きなポスター(?)を作った。このポスター(?)は、委員長の許可を受けて表に出した。ところが委員長がうかつにも大きさを聞いて内容を見ずに許可した。そこへ社研の顧問の先生から、発表物は室内に入れるとの注意があった。しかし部員はポスターだと主張したため、本部で委員会と話し合を行った。しかし、結果が出ないまま閉会となってしまった。

二日目の夜は慣例の後夜祭が行なわれるはずだった。しかし、夕方ごろから雨がふり出し、後夜祭の時間には、外で行うのが不可能になった。そこで後夜祭を体育館で行なう事にした。全校生徒が体育館に入るとかなり込み合った。初めに、全体をまとめるためにフォークダンスを踊った。しかし、全員が踊るためには、体育館は狭かった。フォーク・グループが歌を歌ったが選曲が悪かったため全員が歌えるような歌ではなかった。結局前後三十分づつ短かくされて、七時に後夜祭は終った。



今年の文化祭はどこにポイントを置くどのような形式にするか。ポイントを置く。今年は全員の参加を促した。それは、多くの人の参加によって、生徒同志の意志の交流を計った。しかし、量によってはその事は行なわれなかった。やはり内容、つまり過程が重要だった。文化祭の目的とは、生徒同志の交流を深めるためにあると考える。具体的な例で言えば、催物へ対するクラス内でのディスカッション。展示物の製作、芸術的なものの練習。その中における協力。まあ、そのようなものか。

ではどのような形で行なうか。私達は、もう一度統一テーマととり組でみるつもりだ。今年の計画性に欠けていたという点を補ない、もっと多くの人に理解してもらう。その事に力をそそぐと考えた。またマンネリ化した縦割制をクラス中心に行う。もっとH・Rというものを考えたい。(すみませんが、クラブの方は、来年の文化祭は、H・Rが中心になると考えて協力して下さい)

## マラソン大会 (体育委員会)

『マラソン大会』。体育委員会として、行なわなければならない大切な行事の一つである。前期の場合、球技大会、体育祭と二つ行事が組まれているが、後期の場合、『マラソン大会だけ。』といっても、過言ではない。委員長を引きついだ時、『半年間に大きな行事は一つだから……』という安心感と、その反面、『一つゆえ、絶対に失敗は許されななんだ。』という緊張感が、心の中で入り乱れていた。今こうして、ペンを取りながらふり返ると、一見無事に終わったマラソン大会も、色々な面で反省しなければならない点があった。これから、その反省すべき点の例として、いくつかの恥を混ぜながら、その経過を公開しよう。

先づ『準備の段階においては、全体に少し取りかかるのが、遅すぎた感があった。十二月五日と日時が決ってから、当月まで約一ヵ月。準備期間として、十分すぎるくらいだった。しかし、『まだ〇日ある』という考えが心の中にあつたのが、そもそも遅れた原因だったと反省する、それを、いくら期間があつ

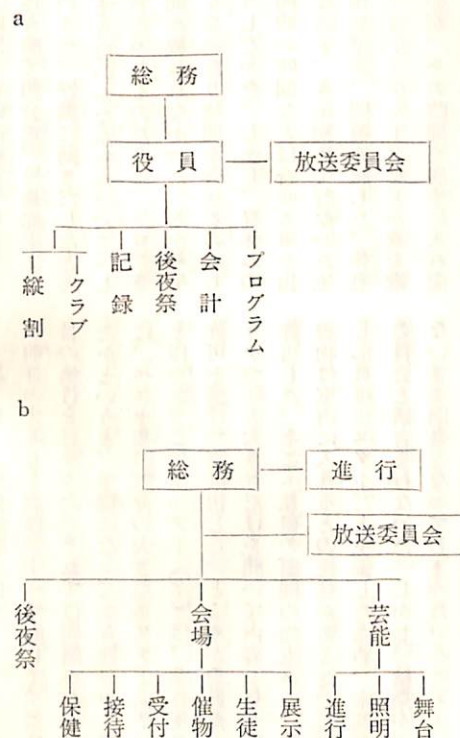
## 資料 2

### 42年度決算

|        |          |  |
|--------|----------|--|
| 収入     |          |  |
| 生徒会    | 120,000円 |  |
| P T A  | 39,030円  |  |
| 広告料    | 43,530円  |  |
| 計      | 202,530円 |  |
| 支出     |          |  |
| 執行委員会  | 35,683円  |  |
| プログラム代 | 47,000円  |  |
| 放送委員会  | 10,000円  |  |
| 新聞委員会  | 1,000円   |  |
| クラブ補助  | 58,419円  |  |
| 縦割グループ | 32,039円  |  |
| 計      | 184,141円 |  |

## 資料 3

### 委員会組織図



ても、一もう〇日しかない』と思っていたならナ……とはあとの祭り。

その一つの例として、ゴールの際手渡した順位カードがある。最初は、二・三年生使用していたカードを今度も拝借するつもりだった。が探せども探せども、影も形も見当らない。『まあ、もっと早く調べておいたら……』と思えどカードが現われるわけでもなし。しかたなくボール紙を駆使して、九百枚一年を揃えたのが、当日三日前という、何とも試験勉強の一夜漬を思い出す機なカード製作だった。一見笑い話ですませられそうだが、これがもっとスケールの大きいものであったならば、失敗に終わっていたかも知れない。

しかし、そんなどうなわゆる準備の中にあつても、スムーズに運べた点もあった。その例として、体育委員や途中審判を、集めて開いた、『マラソン大会役員会』がある。何といっても役員全員となると、人数も多い。又、それだけエスケープする人も多しと心配していた。しかし実際に表いて見ると驚いたことに、必要な人数は全部揃っているではないか。そして、一番心配だった三年生も、六クラス揃っていた。今度のマラソン大会ある線まで持つて行く事が出来たのも、

この役員会による影響が大きいと思う。

しかし、何とか準備が出来ても、肝心の本番で失敗してはそれこそ水の泡と化してしまう。そのいい例が、ゴールの際の、カード受け渡しの不徹底だ。『今年こそは、一人の渡し、れも出すまい』と思い、万全を料したが、やはり、一時に団体で入ってこれたのは、人間の目を信じる他仕様がなない。来年こそは、徹底してやってもらいたい。その他、スタート、ゴールの不徹底など、良い所など、雀の涙程しかなかったマラソン大会も、どこをどう違えたのか、無事終了した。しかし、決して満足はしていない。むしろ不満だらけだ。

最後に、来年度からの委員会に、もっと余裕と確実性を持って行動してもらいたい事と、役員全員が集まって驚く様な、そんな委員会にはしてもらいたくない。全員が集まって当然だと感じる様になる事、この二つを強く希望する。



## 読書会 (図書委員会)

図書委員会の活動のひとつとして開かれる読書会は、私知っているかぎりではいままで開かれぬのときでも、出席者はいつも六・七人程度の人しか集まりません。ピーアールのしかた。選んだ本にも問題があるのかもしれませんが、放課後の一時間ぐらいいです。ぜひ一度出席してください。あなたがた過去に読んだ本、感動を受けた本を身近な友とばかりでなく色々な人たちとも話し合いませんか。またこの機会に自分だけで読書を楽しむのではなく、みんなに自分がいとおもった本を教えたり教えてもらったりするのもよいと思います。もっと気軽にこの会が開けるようにと読書会用の二十冊ほど揃った本も幾種類があります。また各クラスでもH・Rの時間にも開けるようにと貸し出しもいたします。各クラスでも大いに活用してもらいたいと思います。書名は伊豆の踊子・走れメロス・高瀬舟・山椒魚です。貸りたい人はぜひ各クラスの図書委員まで申してください。

さて図書委員会主催で十一月二十八日に山椒魚(井伏鱒二)の読書会が開かれました。

出席者は六名でしたが出席者が少ないわりに活発に開けました。まず各人にこの小説の第一印象をたずねたところ、あまりおもしろくなかったというところでした。それに読んでいううちに自然に引こまれるということもなかつたそうです。しかし何度か読むうちに山椒魚の気持ちが短い会話の一文章ごとによりとうかがえて、これほど会話文ひとつひとつに無駄がなくすべてが要所をしめている小説はめずらしいとのことでした。人物描写がなただけにそれに変る大事な役目をしていていると思います。

まず始めに、岩屋に入っていた山椒魚が大きく成長しすぎて出られなくなった時に、「いよいよ出られないというならば、俺にも相当な考えがあるんだ」という実際は何一つとして策がないにもかかわらずバカな意地をはったりする誰にでもありそうな心を山椒魚に変えて言っているように思えるとの意見も出ました。どんな人間でもこのような状態におかれると誰もが持つだろうと思われる。相手を自分以下の状態において喜ぶよくない性質を山椒魚も持ち始めた。それは蛙が迷い込んだのを幸に蛙も自分と同じあるいはそれ以上に相手をとじこめることで苦しみを与える



## 編集委員会のページ



### 今後のル・クールについて

生徒会誌編集委員会

はじめに……………

前号でおなじみのように、誰によって命名

された名前なのか、まったくわかりませんが、別に悪意ある名前ではないし、カッコ悪いものでもないの、この名前を受け継ぐことになりました。難を言えばこの名前、正しいつづりがはつきりせず、毎号「まちがいだらけで、編集委員の形式模倣主義の徹底さには、毛沢東もカブトをぬぐでしょう。」

ところで……………

何年も前に、この学校に籍を置いて勉学に励んでいらした先輩方から、古いふるーいル・クールをいただきました。今では、生徒会室の我々の木製倉庫(?)の中に保管されています。五十ページあまりの二号・四号をは



じめ、七号・十一号・十三号と、文芸雑誌的な編集を成されている各誌を、ル・クルールの歴史として大切に保管していきたいと思っています。

前記に記したように、十三号まで生徒個人の研究発表や、創作によって成立していたル・クルールは、十四号から内容を一新して、あらたな生徒会誌として再スタートしたのです。

十五号の編集委員会は、十四号と同じに文化委員会内にル・クルール編集委員会を設け、一部文化委員と一般の有志によって組織されました。その際に、生徒会誌の定義と言うものを十四号と同じに、『生徒総会を最高機関とする生徒会の雑誌』と判断し、新学期より編集を始めたのです。ところが、文化委員会は年間のしごとも多いくせに、資金難で且つ、働く委員が少いという苦難にぶつかり、その苦難の程度は、委員会内部の者でなければ想像もつかない程だったのです。そのうえ、新しい試みとしての『特集』を加えたことによって、委員の負担は倍増し、委員長は病いに倒れて交代せざるを得なくなり、委員は全員冬期の試験休み・冬休みを登校し、なお且つ三学期に入っては、自宅に持って帰っ

なりかけていた編集委員の冬休み登校も、今年には自宅で、それぞれの割り当てられた仕事をするということで済みました。

しかし三学期になると、そんなのきなこととは言ってもらえません。旧年中に各団体へ依頼しておいた原稿集め等が、例年のごとく遅れに遅れてギリギリまで延ばしたり、表紙の印刷がうまくいかないという事で書き直してもらったり、まあ、とにかくいそがしいのです。

このあいだに、総勢二十七名であった委員会も、十名程にその行動範囲が狭まり、一人一人にかかる負担も昨年以上にきびしかったことは、事実です。

それで……………

それで昨年度、前記のような理由で一本立ちすることになった我々が今ここで、こんなことを書き記さなければならぬことを恥ずかしいとさえ思っています。文化委員会があまりにも仕事が多すぎるという事で三分化された我々ではあります、委員会を一つにまとめていくことは極度に困難なことなのです。まして、生徒の自主的な態度で選出され

て仕事をかたづけられるようになってしまったのです。皆さんが、スキーにいったり、スケートに行ったり、大そうじしたり、忘年会やったり、クリスマスパーティーで遊んだり、年賀状を書いたりしている時に、委員は狭い生徒会室で一日中、窮屈な思いをしながら仕事を進めなければならなかったのです。

以上のことをもって、今年度よりル・クルール編集委員会は一本立ちした特別委員会として発足しました。

じつは……………

四月になって活動を開始した委員会は、すぐに壁にぶつかってしまいました。第一回の委員会の時、一年生の委員からこんなことが発言されたのです。「僕は好きで委員をやるのではありません。先生が天下り式に僕を委員にしまして……僕が中学時代に新聞部の部長だったのでさうです。だから一年間の間、やっていけるかどうかわかりません。」これには一同少からずショックを受けました。そして第一の壁の前で我々は、ハタと立ち止ったまま、動くことができなかったのです。本を作る情熱のない、何かを追求するこ

と委員ではなく、いわばイヤイヤに責任だけを背負っている人々にとって一年間はあまりに長すぎるのです。そしてついには、本を作ること・一つの物を追求する、その重要さを知ることなしに、責任の重さにへばり、背を向け、沈黙し、逃避して行くのです。残された人々こそいい迷惑で、何人分かの仕事を一人でやらねばならないことになるのです。そういう時に、心から本を作ることに情熱をたむけられる幸福な人は数少ない奇人(?)と相なる次第ですか、お恥づかしいことに、今年度はその奇人もみあたらず、ただただ、責任を全うするだけに終ったといっても過言ではないと思う程なのです。こんな状態で本ができるのでしょうか。ル・クルールができるのでしょうか。ほんとうのル・クルールが、偽りの生徒会誌、心のこもらない生徒会誌に、皆さんが会費を払うことにはないのです。それよりも、ル・クルールにあてられる管の多額な資金を、資金難に苦しんでいるといわれる新聞委員会やその他の委員会にまわし、真の活動に使われたほうが、よほど生徒会のためになると思うのです。今、我々が行なっていることも、新聞委員会がやればやれることであるし、一般の公募とて、あのように少いのであ

とのできない、ただただ毎日を平穏無事に神経を使うことなく過ごすことに生きがいを感じるような委員を、我々はどうしたら一年間もつないでおくことができるのかと、……

壁が具体化されて我々の前に姿を現わしてきしたのは、五月ごろからだったでしょう。か。毎週委員会を開いても四・五人足らず。先手を取って、午前中に各クラスを回って本日の委員会を知らせる等の、人集めに大わらわ。それでも流会ということが少くなかったことは、否定できません。

低迷状態が続くままに二学期を迎え、我々は、先学期に敷かれた『生徒会のための生徒会誌』という基本方針の上を、少しづつすべりだしました。それと同時に原稿の一般公募をべ切ったのですが一つも集らず、委員が奔走して創作の原稿予約ということになりました。

「もっと一般の原稿をふやせ。」

「創作のページをたくさんいれろ。」と皆さんはおっしゃいますが、増やしたくても増やせない、この現実をもう一度考え直していただきたいのです。

それでも、ル・クルール作制に集中できる我々は、この学期中にすべての予定をたて、実行に移すことができました。毎年『名物』に

るのです。本を作ることに情熱を持ち、自分からル・クルールをしつて立つという生徒が現われるまで、ル・クルールは廃刊にしたほうが良いと思います。一部の皆さんには暴言としか思えない意見かもしれません、ただの委員会としてやる気のない委員が作るより、心からル・クルールを作ろうとしてくたさる方を一般公募し、その方々に委員になっていただくというような方法をとったほうが、生徒会のためにも、ル・クルールのためにもよいと思います。今のままでは、ル・クルールが可愛そうです。そうでもしない限り、ル・クルールは生き恥をさらさなくてはならないのです。これ以上ル・クルールを我々生徒の『墮落』した手で汚したくないのです。おわかりいただけるでしょうか。ル・クルールも、きつと、かの情熱にあふれた、りっぱな編集委員の出現を、望んでいることと思います。そんな方の出現を切に望んでやみません。

## 編集後記

「二十四万もぶんどりやがって、おれ達に少しよこせ。」  
なんて、どこかのおにいさんがおっしゃる



けど、二十四万背中にしよつてるこつちだつて楽じゃない。自分のお金でもないのに、責任おわされて、ついでに難かしい本まで作られて、ほんでもって、アンケートを取ったら、

「お前等何やってんだー。」

「会費ドロボー。」

なんてひどいやね。……………(S・T)

「アーもつともだー、もつともだー」と言いました(マル)

「だいぶくたびれちゃったわー。」と委員長。そして、「また、しわが……………」と副委員長。……………(T・Y)

筆が変つて、話も変つてちよつと堅い話に入ろうと思います。この生徒会誌編集委員会まあ早くいえばル・クールは一体この後どうなっていくのでしょうか。みなさんのお力におすがりしたのです。喜びも悲しみもみなさんと共に……………ネエ。

(M・S)

万年筆がぐつと安いのにかわつて、話題も変わることにする。どうして私たちがしほつても出ないチエをしほるのでしょう。他の生徒と同じ月謝を払っているのに。(もつとも○カ月たまっているけど、とにかく)大変だ

った。

来年は、編集どうするか。ル・クール、好きだから、お別れします。……………(H)

私のことを犀だといって、あなたを犀と

つては、猿だと主張するあなたにおこられてしまうのですか？ 犀は今日も眠っています。誰かがビールかLSDを持ってこなきゃ起さないでしよう。松原高校校門を出て左

折、また、左折、次の次の道を右折すると遠くに鉄条網のお城が、すてきな京王電車の

たえなる尻音にゆれていきます。そのお城で日

なたはこして、大きな犀CHANを何もたないでたたき起して、車をひかせたのが外を窓から見ているあなただといって、犀CHANを怒っていました。

私は犀の味方です。だって彼は大きくて奴は角を持っています。そいつはオコリッポイのとホコリッポイからです。彼女は誇りを持っています。ですからあの人、私をひき殺すでしょう。山には雪がふっているし、水は

つめたいし、木の皮はまずいから、あなたは信用もなくして私と心中しないで。東京タワーは私よりも背が高いのですから。……………(T・A)

動物のお話しのついでに、ル・クールはい

ろいろな動物の集まりでした。それでボス争いがおこり犀君は死んだのです。あまりにも大きな犠牲とあまりにも小さい成果。これで二十四万バアだヨーン。

誰かさん達みたい一杯やりたいヨーン。

……………(Y・K)

#### 編集委員

三年 宗田 潔

二年 秋上 利夫

鹿間 美雪

吉田 忍

一年 菅野 玲子

児玉 朋子

福田 俊之

(以上あいう順敬称略)

表紙 小島 秀隆

顧問 青池 秀二

ル・クール第十六号

昭和四十三年三月三十一日発行

編集 松原高校生徒会誌編集委員会

発行 東京都立松原高校生徒会

東京都世田谷区松上水四一三一五

印刷 日昇印刷株式会社



